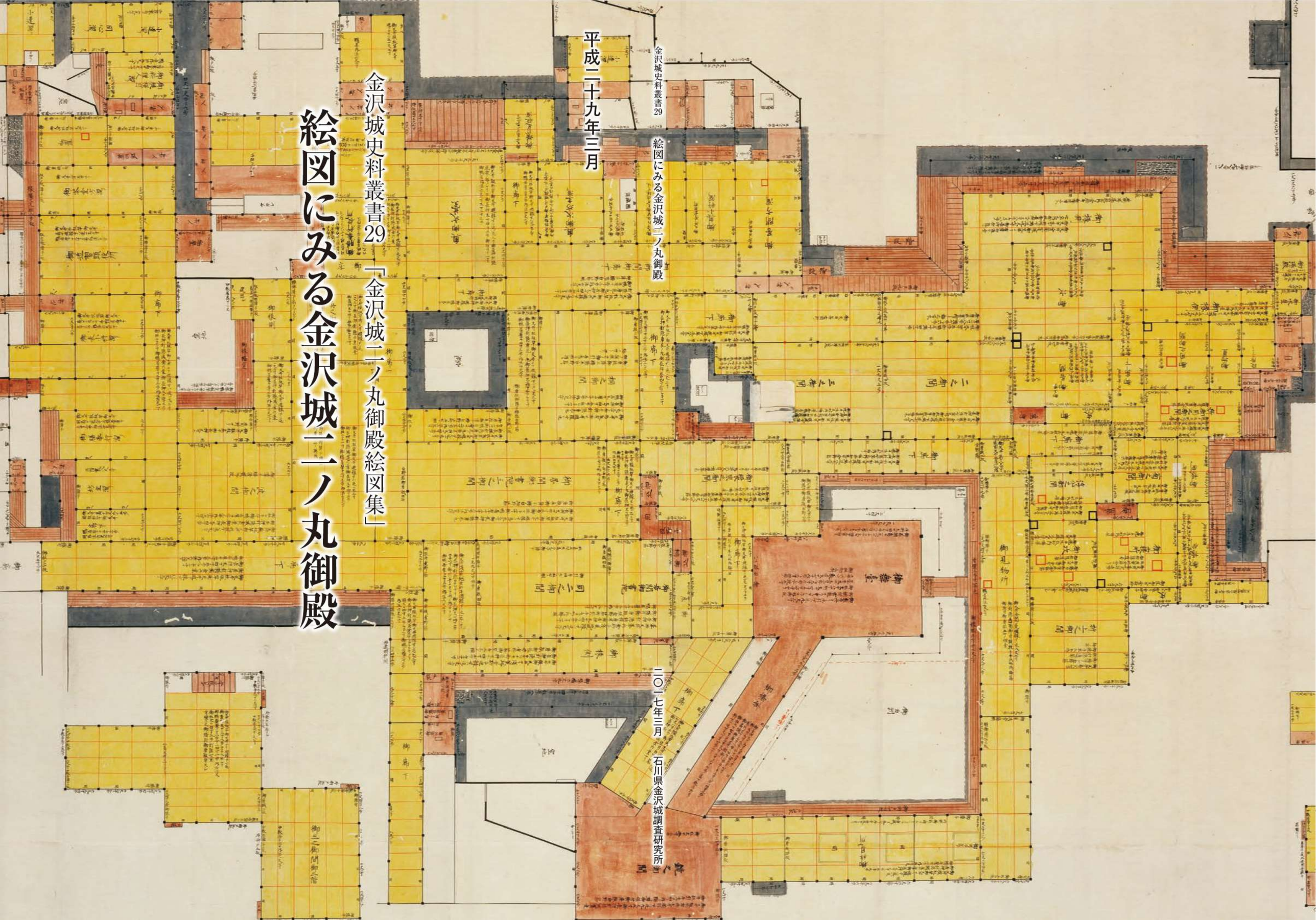


金沢城史料叢書29

絵図にみる金沢城二ノ丸御殿

金沢城史料叢書29「金沢城二ノ丸御殿絵図集」

平成二十九年三月

二〇一七年三月　石川県金沢城調査研究所

例　言

一、本書は、平成一四年四月以来、石川県金沢城調査研究所（平成一八年度までは石川県教委文化財課金沢城研究調査室）が実施してきた、金沢城絵図の基礎的調査で確認された調査データをもとに、とくに金沢城二ノ丸御殿を描いた絵図について、カラー図版で紹介し、あわせて解題を付したものである。

二、カラー図版は、「Ⅰ　江戸前期の二ノ丸御殿」、「Ⅱ　江戸中期の二ノ丸御殿」、「Ⅲ　江戸後期の二ノ丸御殿」という三つの部に分け、金沢城二ノ丸御殿絵図のなかから代表的なものを掲げた。また、金沢城全域図も必要に応じて参考図として掲げている。

三、記載が緻密なもの、史料的価値が高いものの一部は一枚物の別刷図とした（№77のみ冊子にも図版を掲載した）。

四、絵図の番号は、冊子に収録した絵図と別刷図とを分けず、おおよその年代順に付している。

五、収録した絵図の標題は、原則として所蔵元の名称に従った。また、絵図への書き込み等には、不適切な表現も見受けられるケースがあるが、原則として修正等を加えていない。これは歴史的事実を正しく伝えるという認識のもと収録したもので、差別等を容認するものではない。

六、解題とともに収録絵図のリストを掲載した。解題およびリストにおいて、金沢城二ノ丸御殿の変遷を前期（一六三一～一七五九）、中期（一七五九～一八〇八）、後期（一八〇八～）に区分して表した。前期は寛永八年（一六三一）から宝暦九年（一七五九）大火まで、中期は宝暦大火以後、文化五～六年（一八〇八～〇九）の二ノ丸御殿再建前まで、後期は文化大火以降、という時期区分を示すものである。

七、この間の調査にあたり、絵図資料を所蔵する公的機関、民間団体、個人の方々から、ご理解とご協力を得た。この場を借りて、篤く御礼申し上げる。

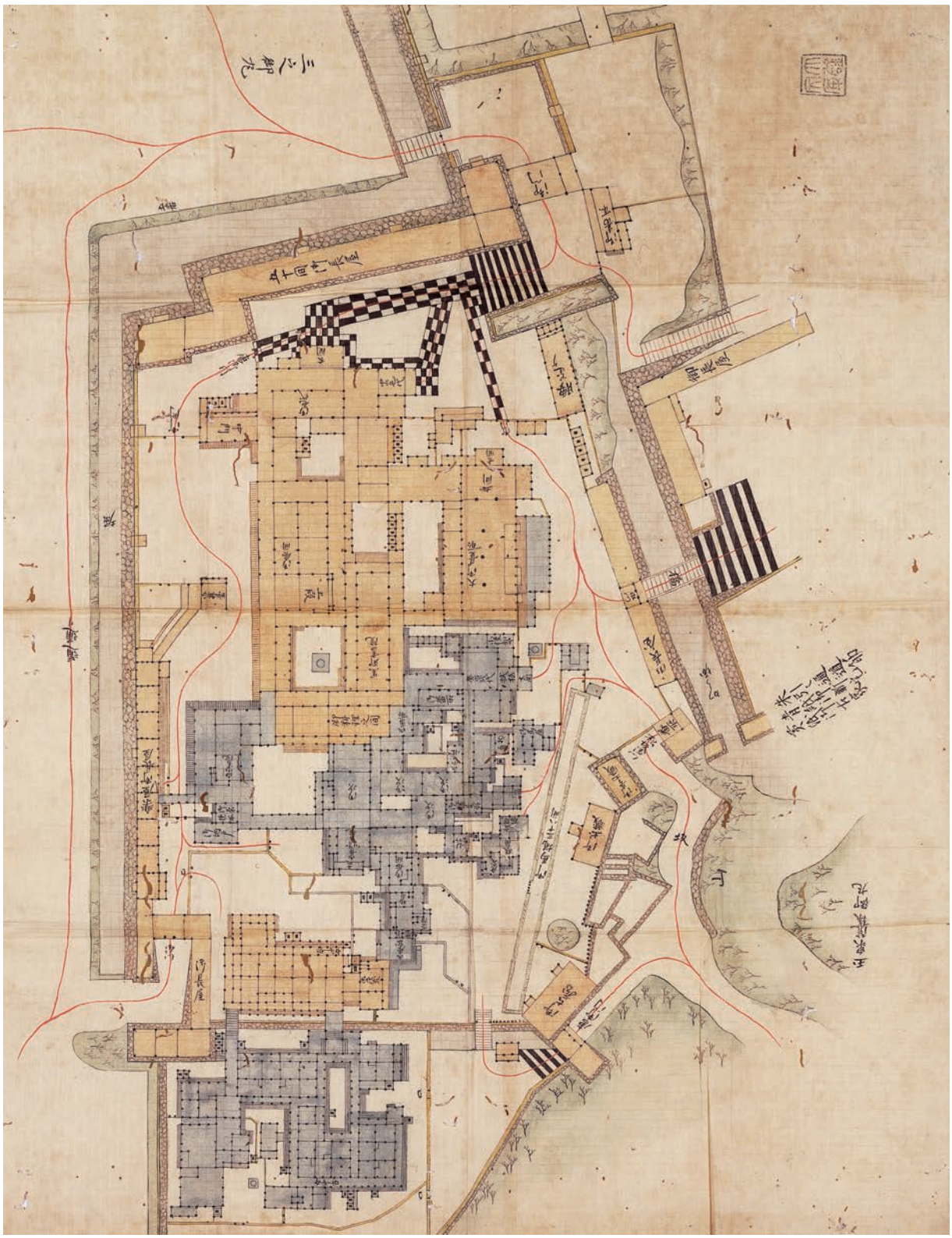
八、本書の土台となった基礎調査の段階より、金沢城調査研究絵図・文献専門委員会の脇田修委員長をはじめ、専門委員の方々から適切な指導・助言を得た。なお、本書の編集は、所長木越隆三、所員石野友康、同大西泰正が担当した。

目次

例言
目次
Ⅰ　江戸前期の二ノ丸御殿……1
Ⅱ　江戸中期の二ノ丸御殿……11
Ⅲ　江戸後期の二ノ丸御殿……15
解題……61
金沢城二ノ丸御殿絵図リスト……88

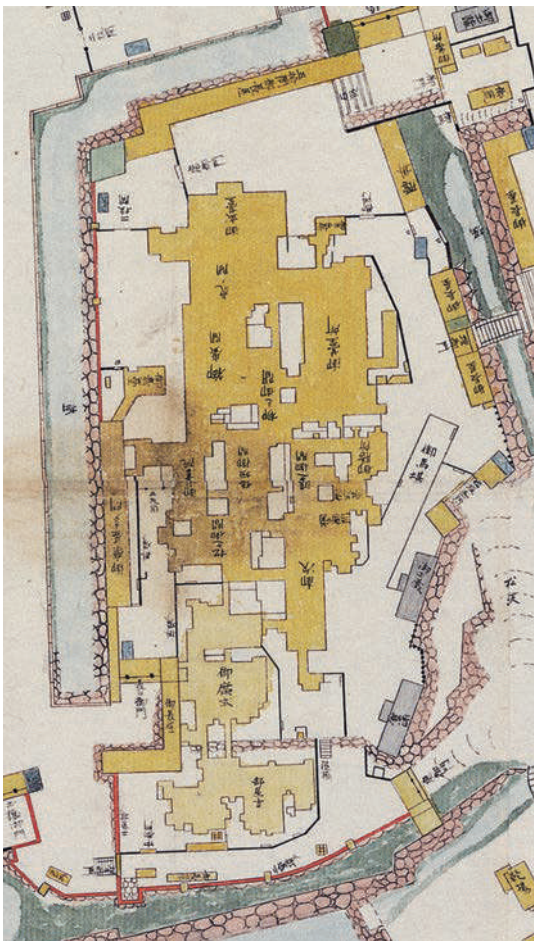
I

江戸前期の二ノ丸御殿



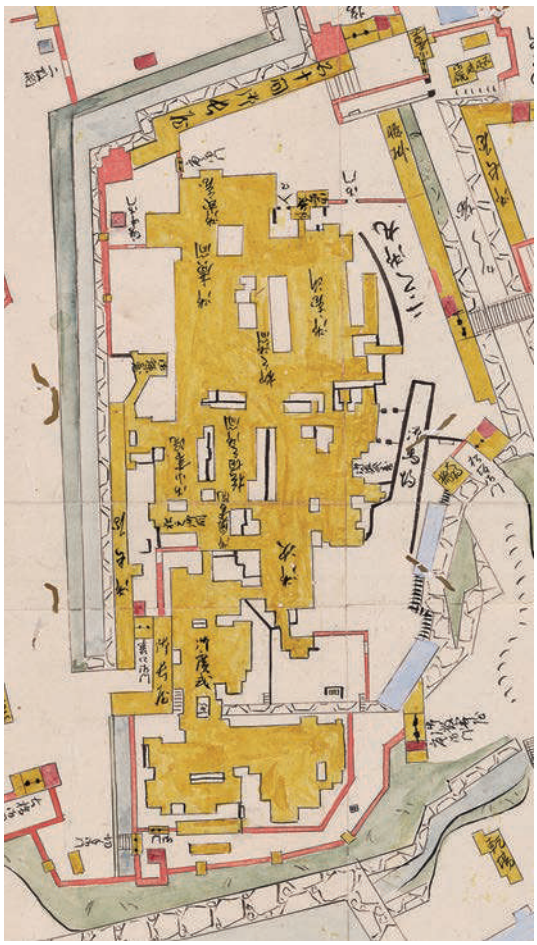
2　金沢城座敷之図二之丸

石川県立歴史博物館　大鋸コレクション（83×65cm）



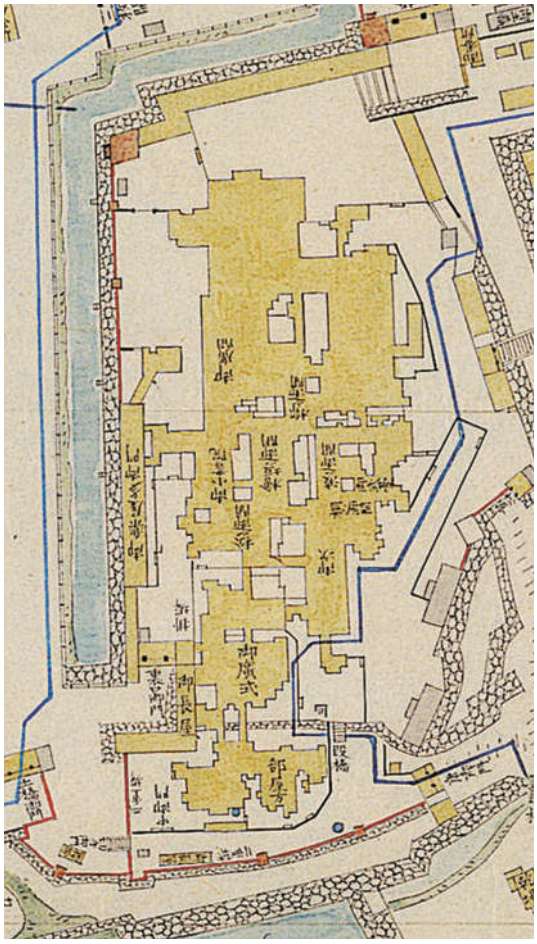
3　金沢城中惣絵図（部分）

石川県立歴史博物館（88×75㎝）



4　金沢城図（部分）

横山隆昭氏（78×79㎝）



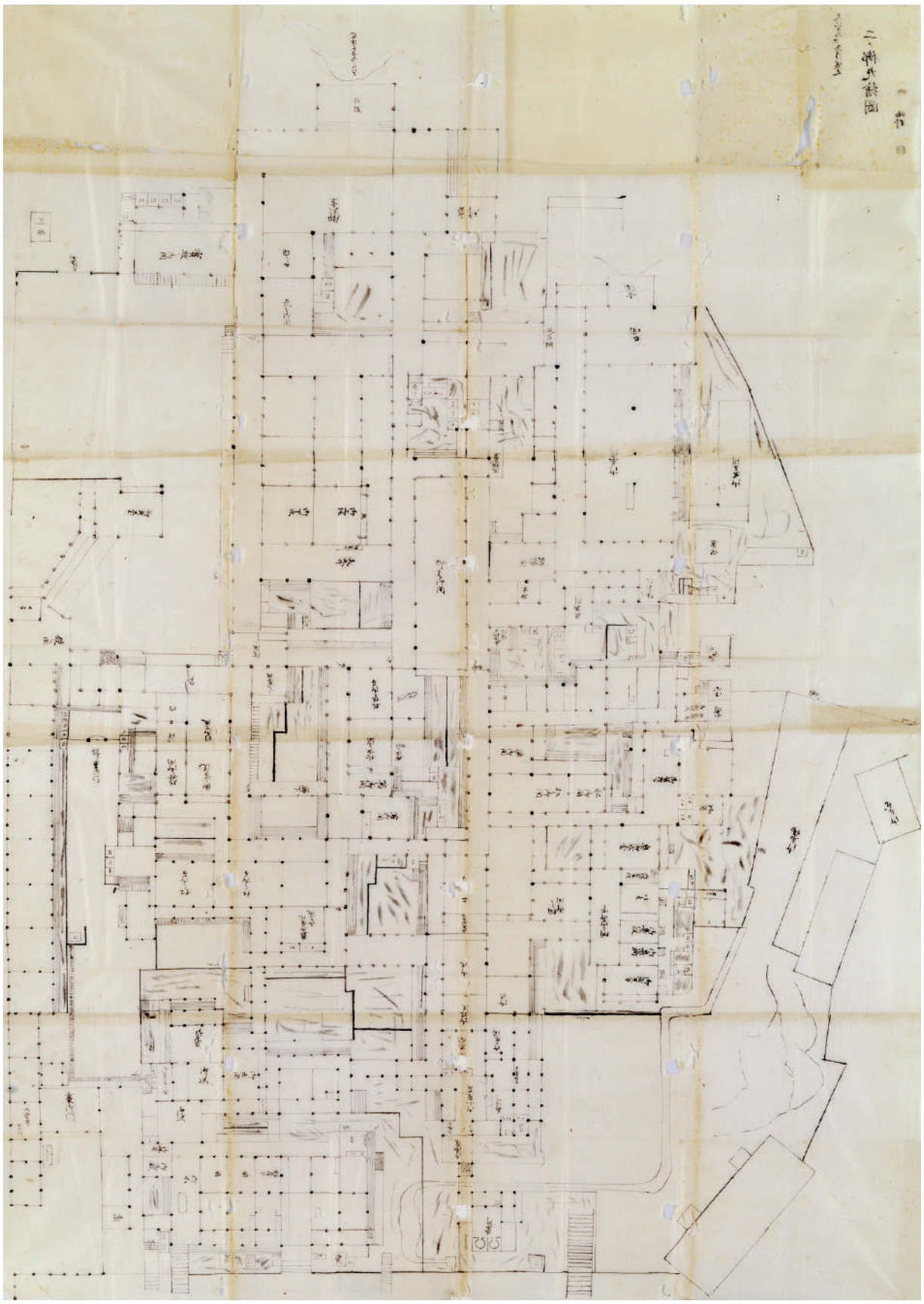
5　金沢城図（部分）

金沢市立玉川図書館　大友文庫（35×42㎝）

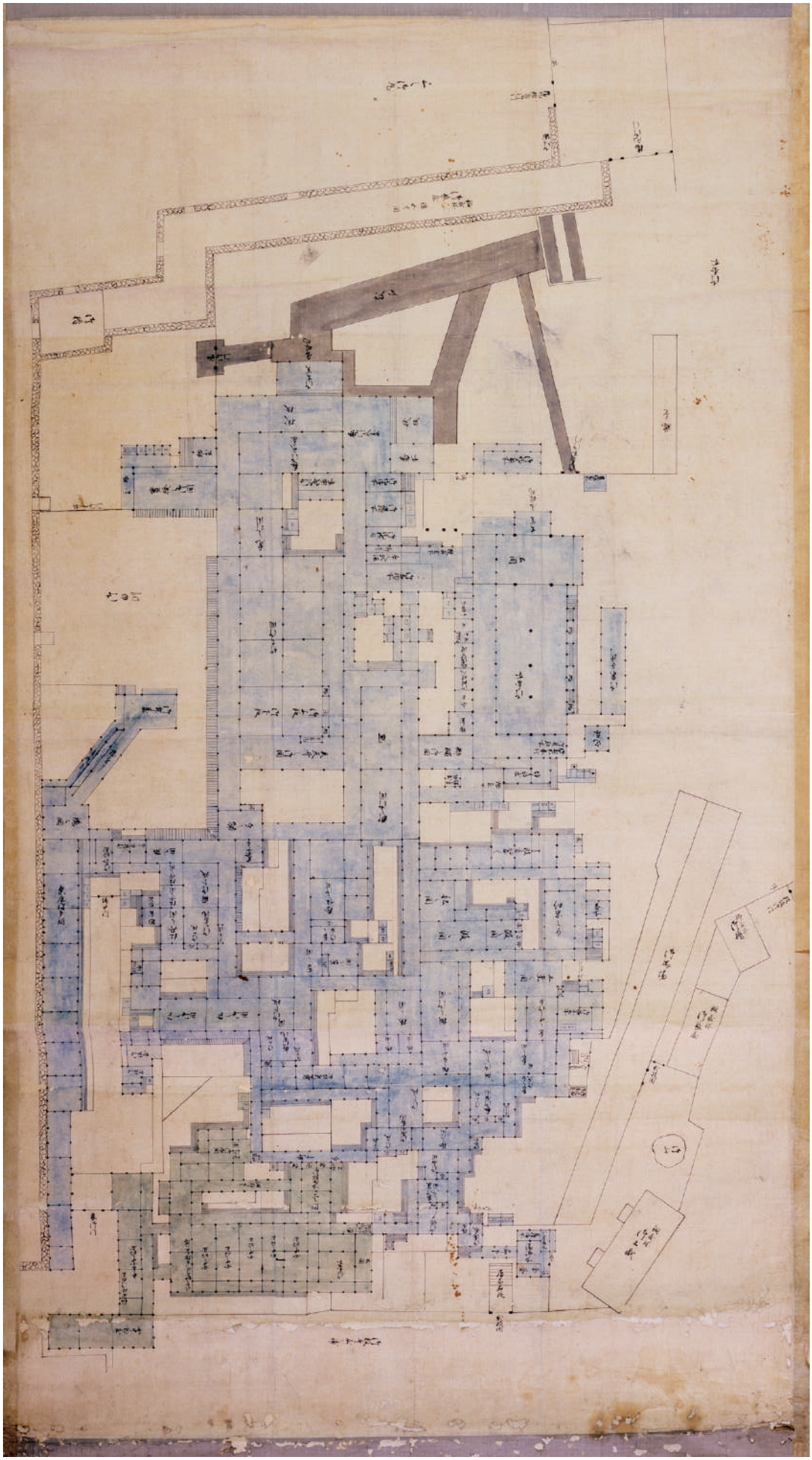
6　金府城二ノ丸

（公財）静嘉堂文庫（86×66㎝）

7　二ノ御丸絵図

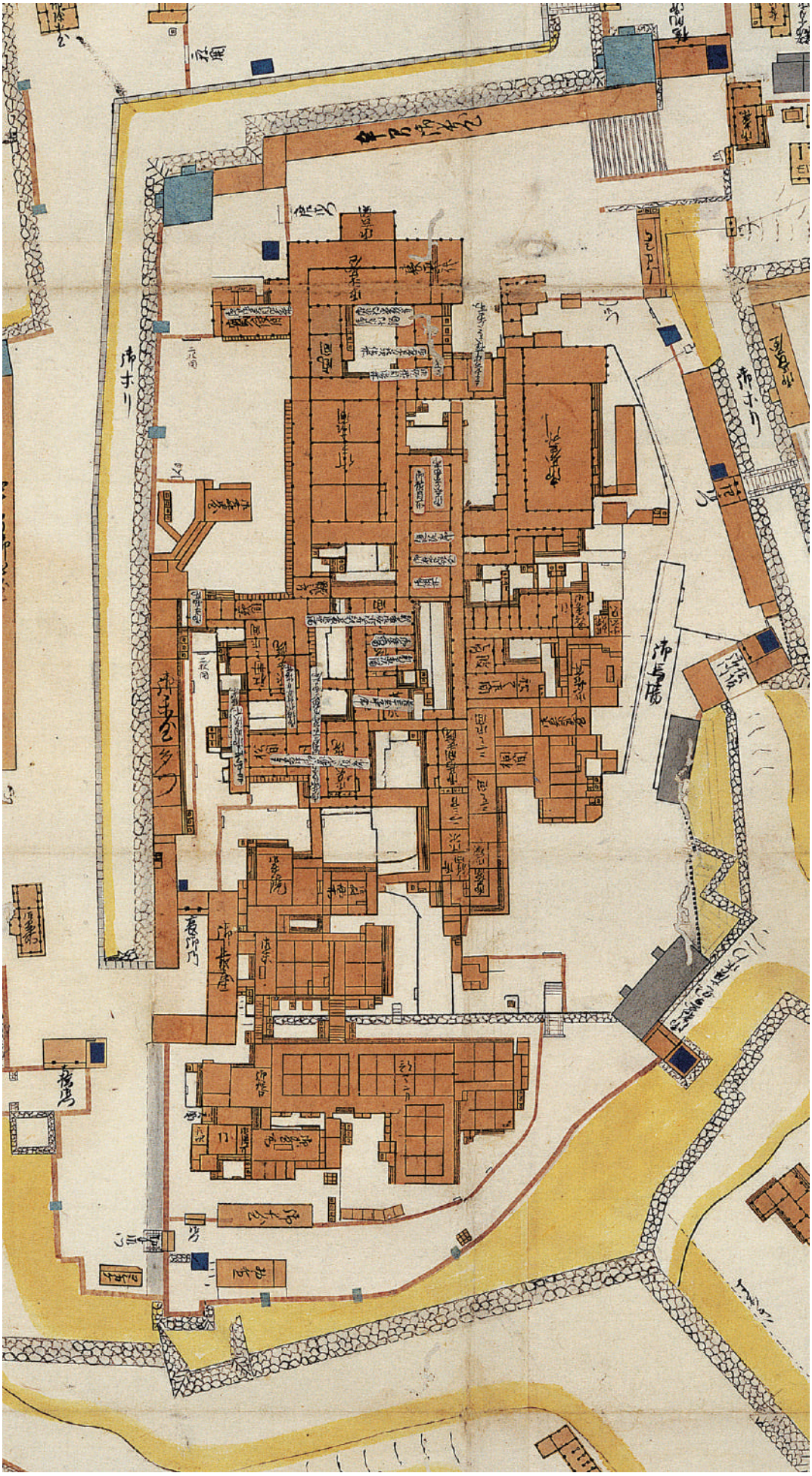


金沢大学附属図書館（105×152cm）



8　二ノ丸御殿図

普森清美氏（140×82cm）

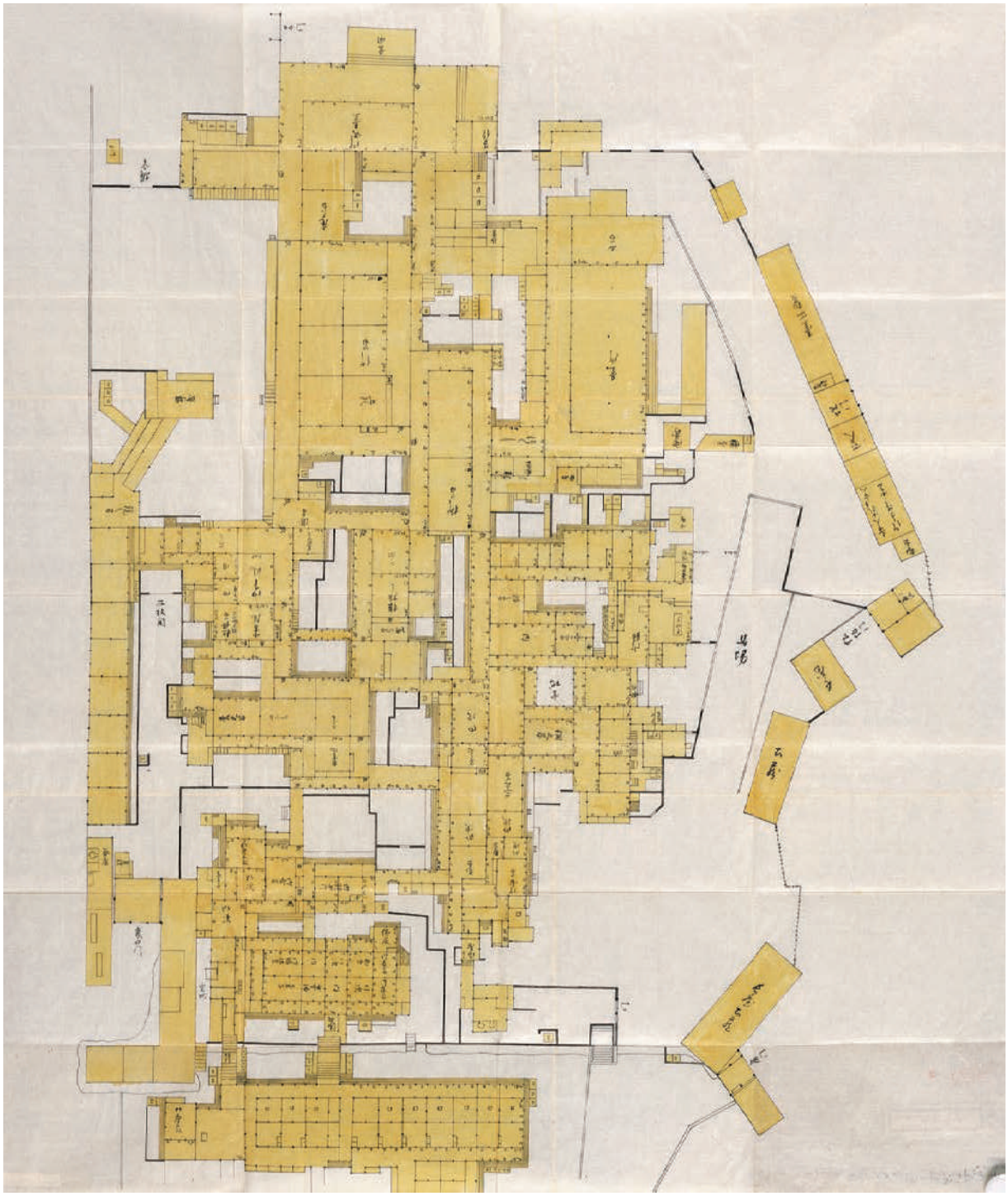


9　金沢城二之丸御殿絵図（部分）

金沢市立玉川図書館　清水文庫（106×141cm）

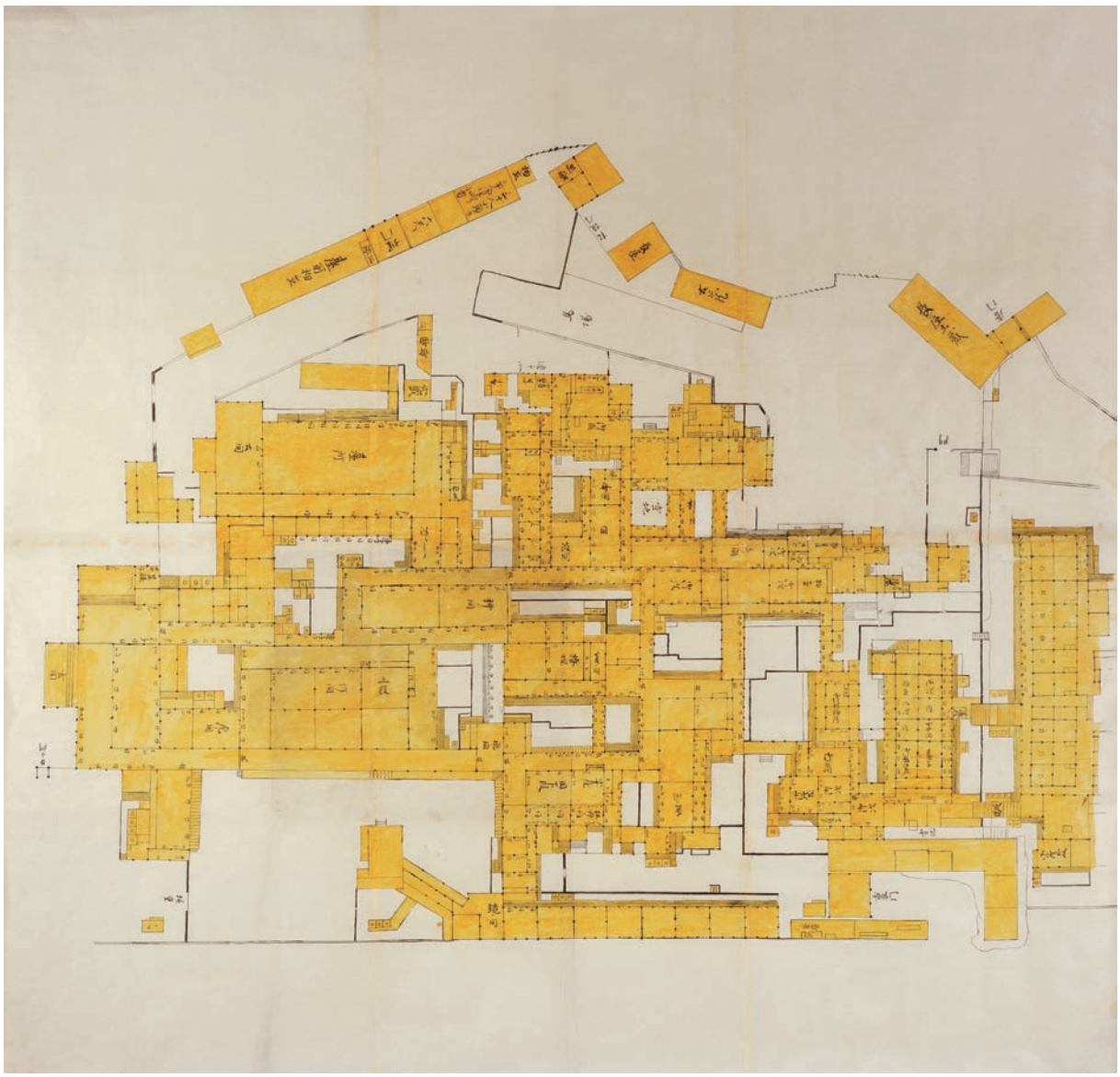
11　金沢城図（写）二ノ御丸御家廻り并御広式

金沢市立玉川図書館　氏家文庫（81×112㎝）



12　二之丸御殿図

金沢市立玉川図書館　大友文庫（72×84㎝）



13 二之丸間取図

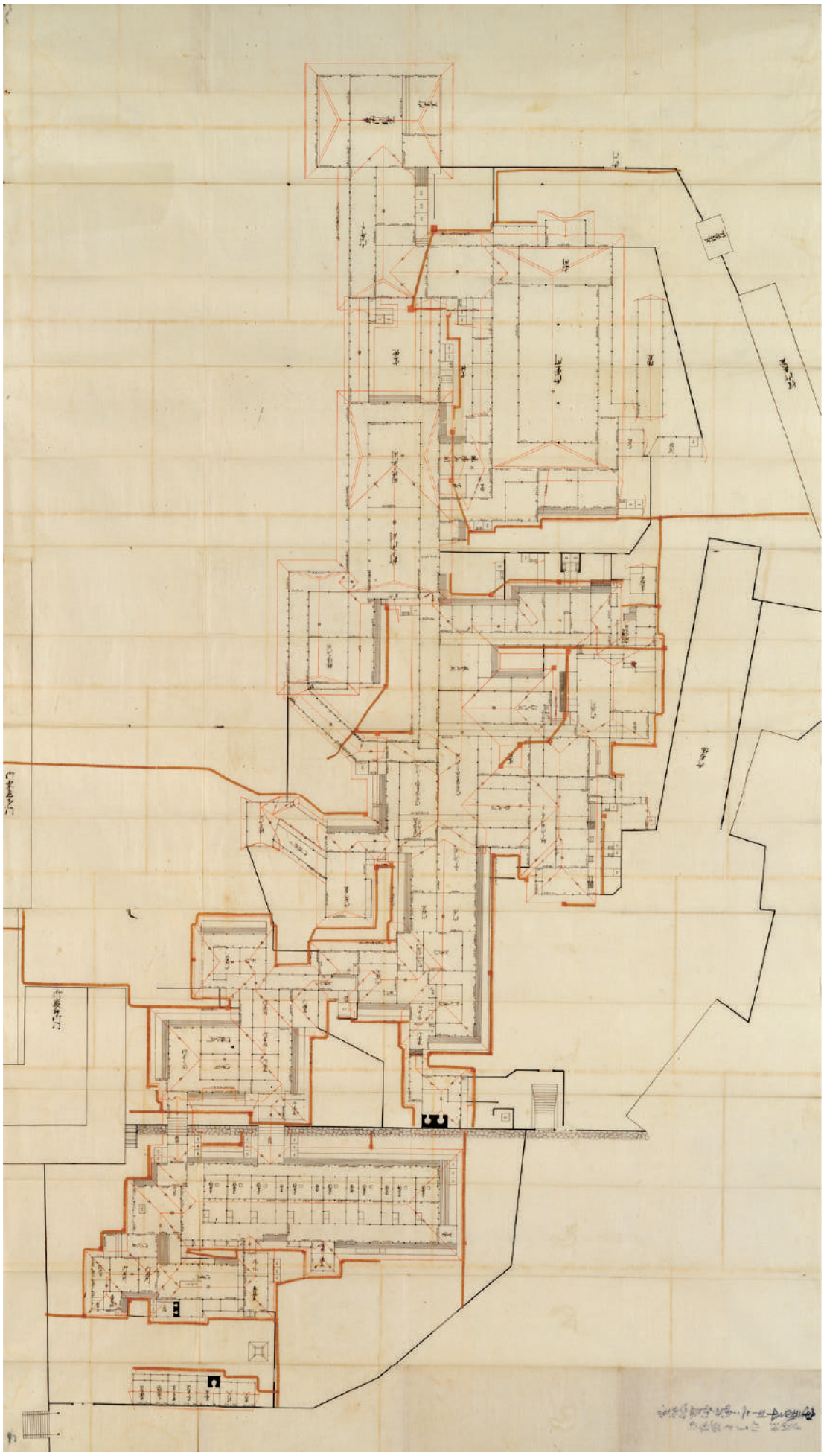
金沢市立玉川図書館　大友文庫（77×82㎝）

Ⅱ

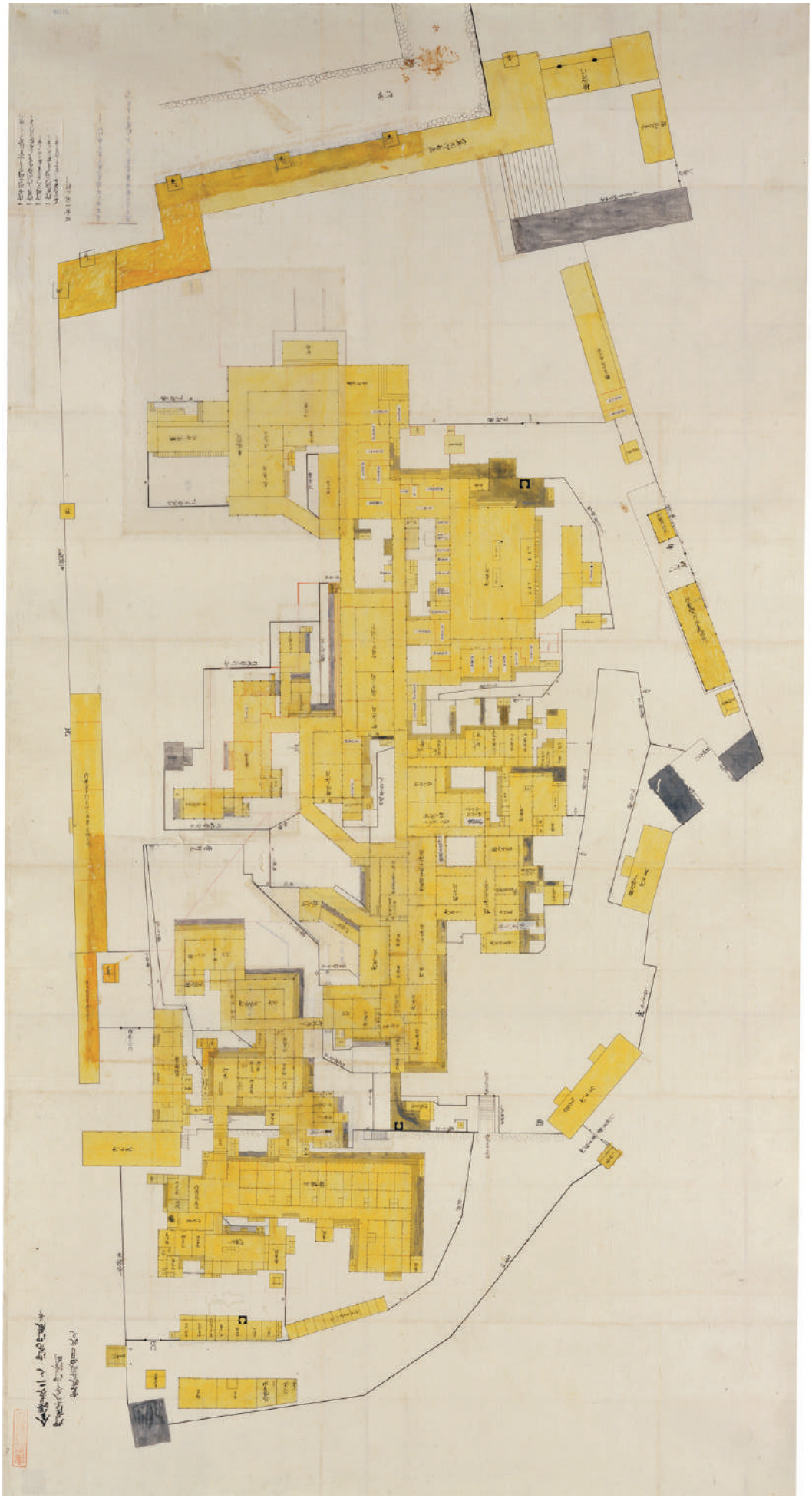
江戸中期の二ノ丸御殿

14

宝暦年中二之御丸御殿地指図



金沢市立玉川図書館　大友文庫（115×203cm）



16　二之丸御殿幷御広式御絵図

金沢市立玉川図書館　清水文庫（96×181cm）

17

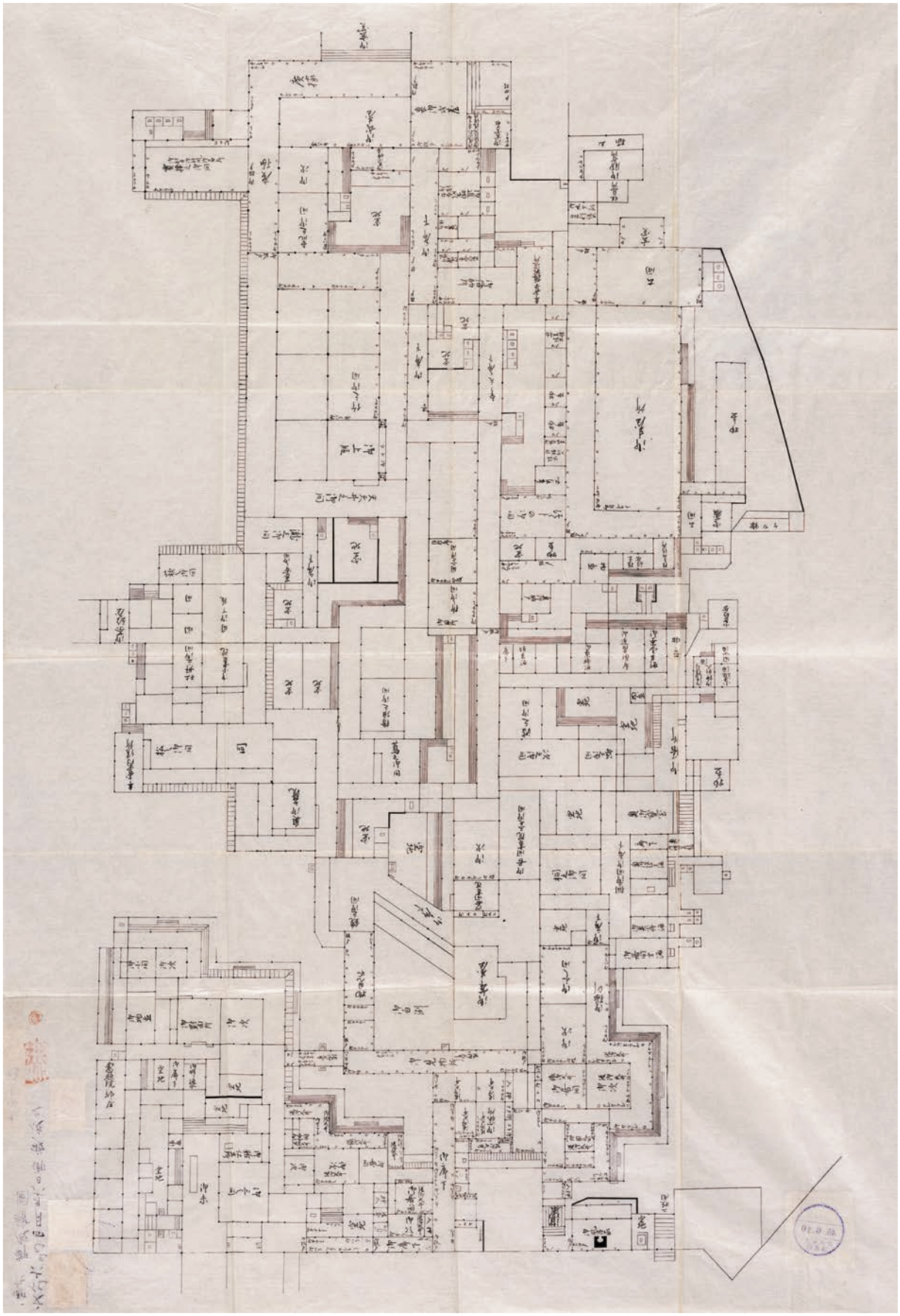
金沢表二之御丸御殿並御広式御絵図

村松家（179×90㎝）

Ⅲ

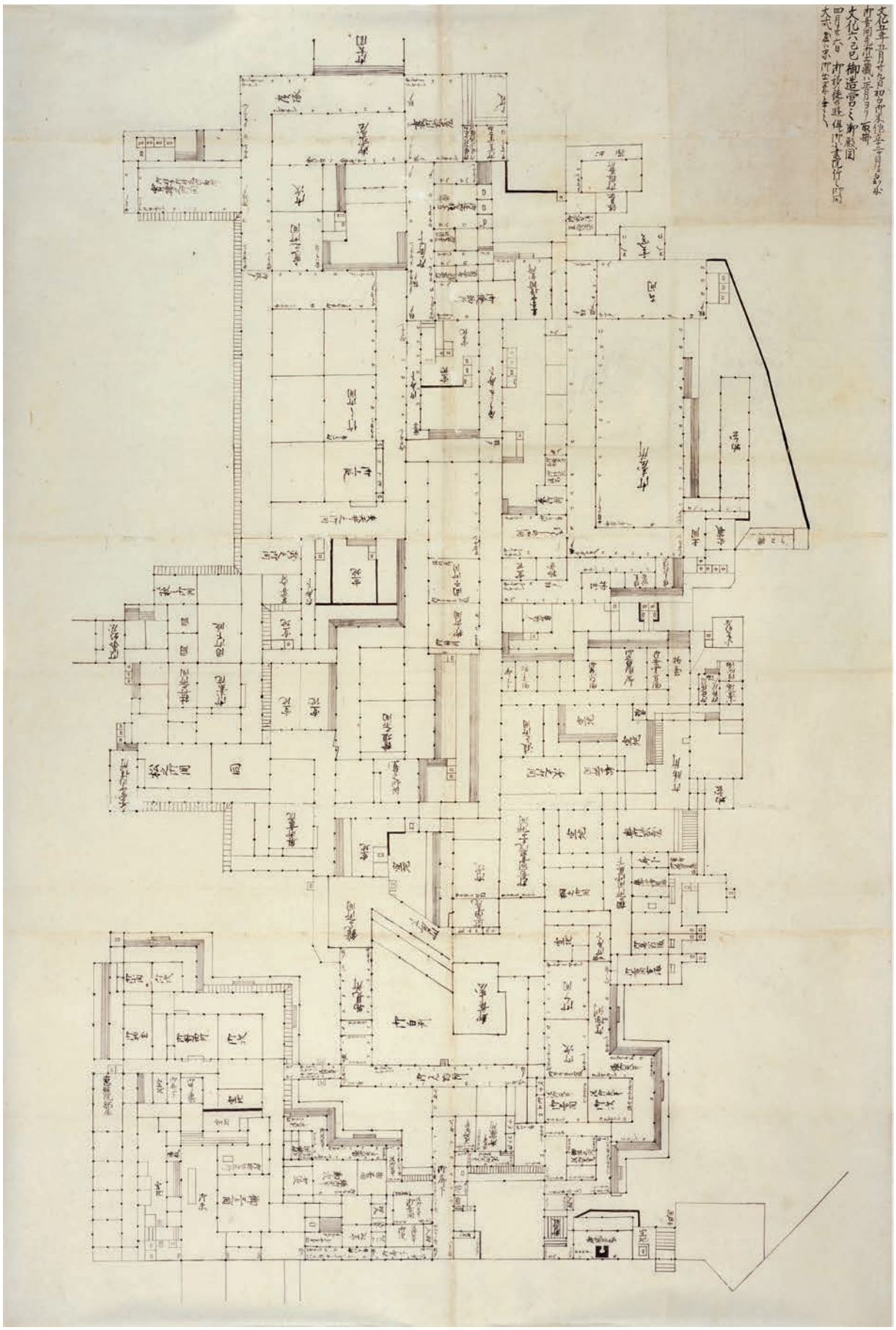
江戸後期の二ノ丸御殿

18　二の丸御殿絵図

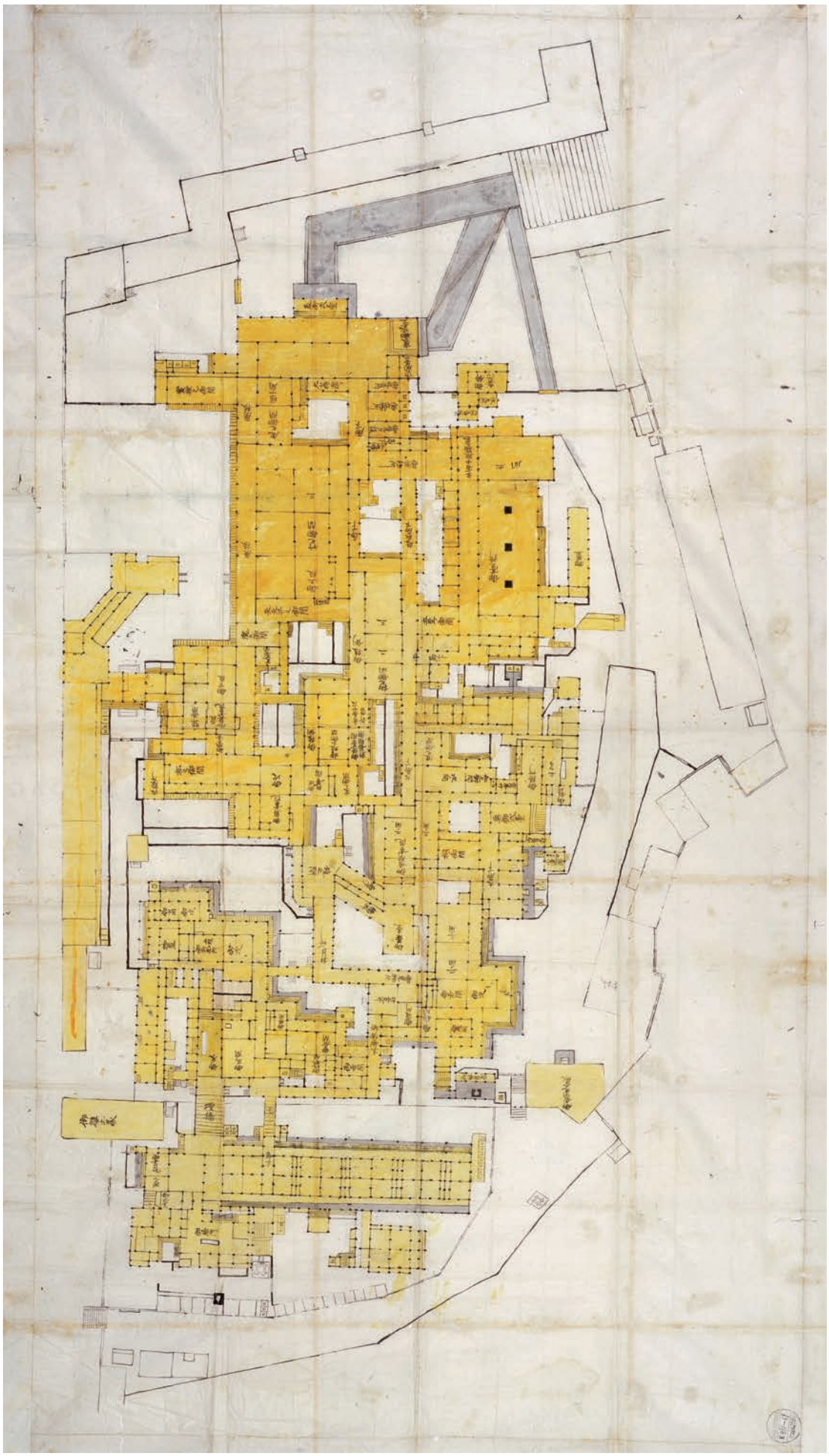


金沢市立玉川図書館　加越能文庫（80×54㎝）

19　文化六己巳御造営之御殿図

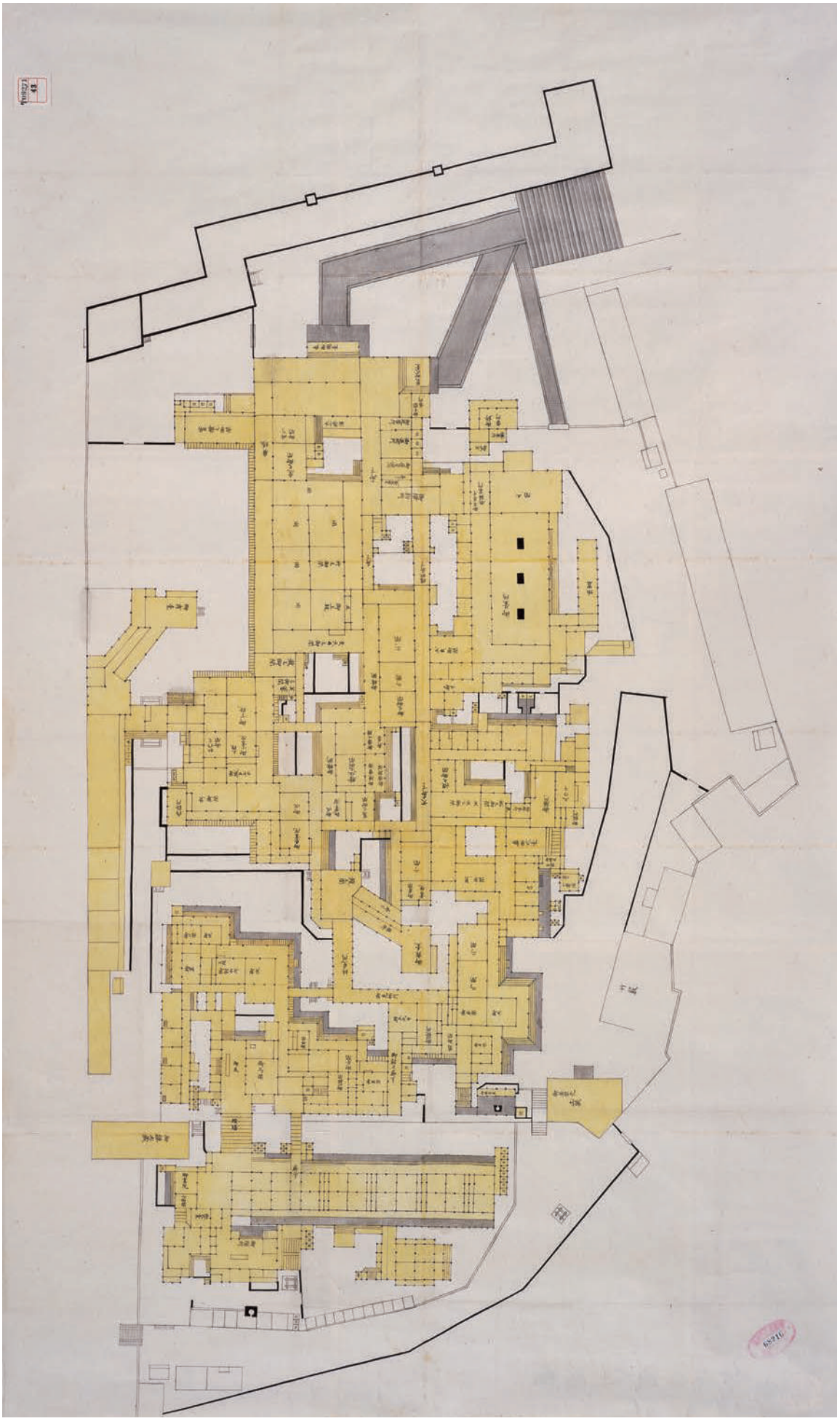


石川県立歴史博物館　篠原一宏家文書（54×80cm）



21 金沢城二之丸図

石川県立図書館（74×129㎝）



22　金谷御殿間取図（金沢城二ノ丸御殿間取図）

富山県立図書館（74×125cm）

23

二の御丸惣絵図（三歩碁）

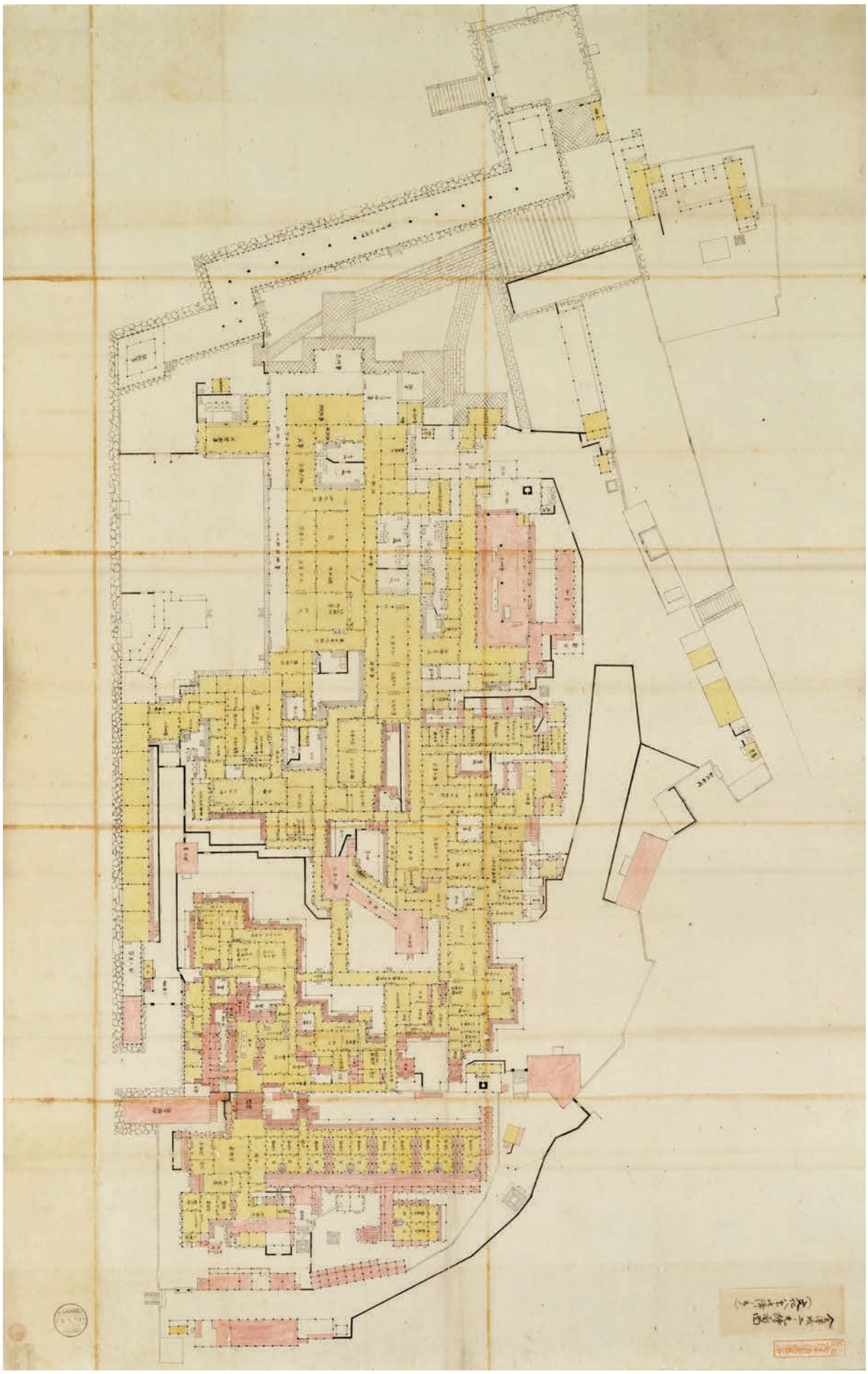
金沢大学附属図書館（75×144㎝）

24　金沢城二之御丸御殿明細図

金沢市立玉川図書館　郷土資料（140×70㎝）

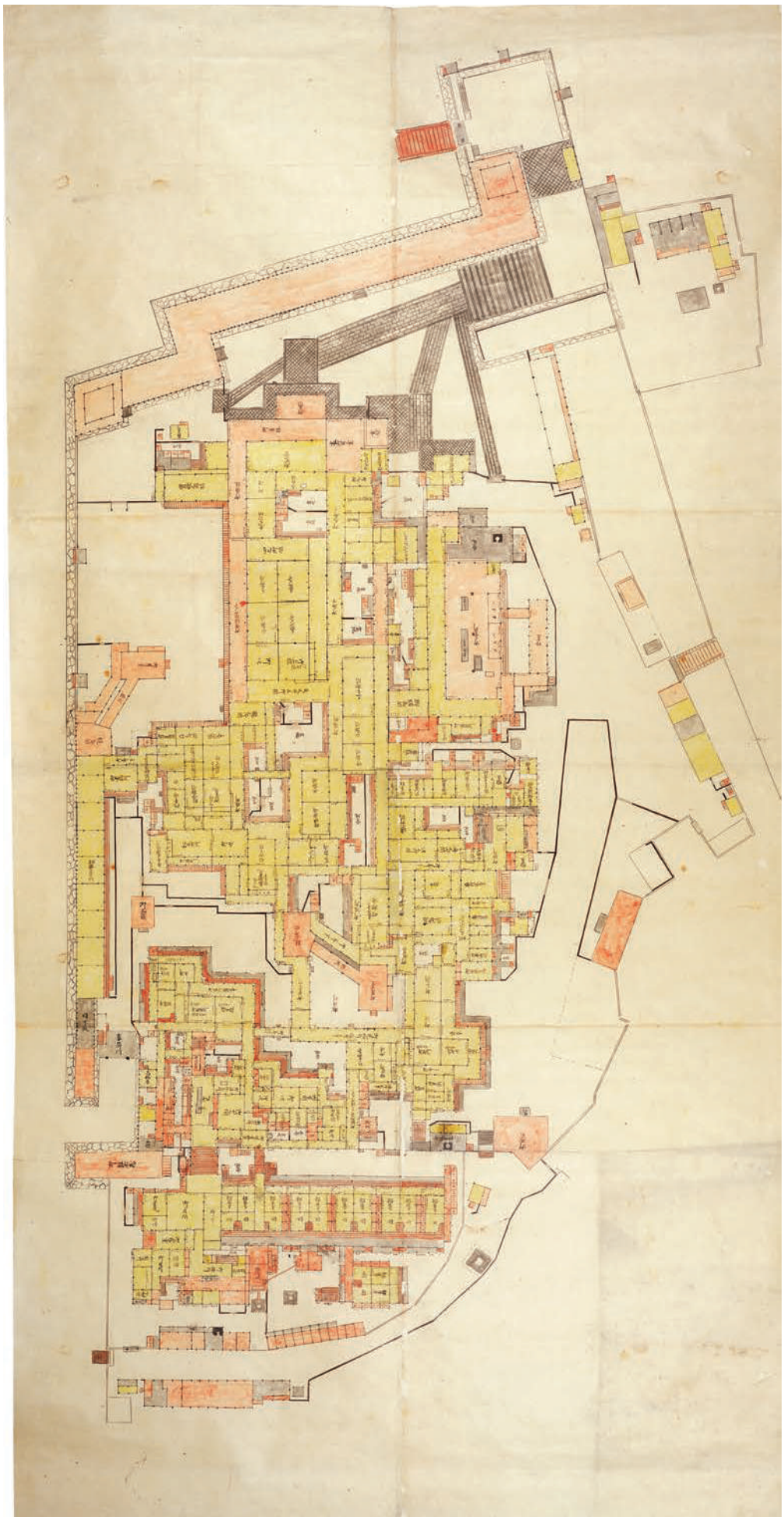
25

金沢城二ノ丸絵図面



金沢市立玉川図書館　郷土資料（87×137㎝）

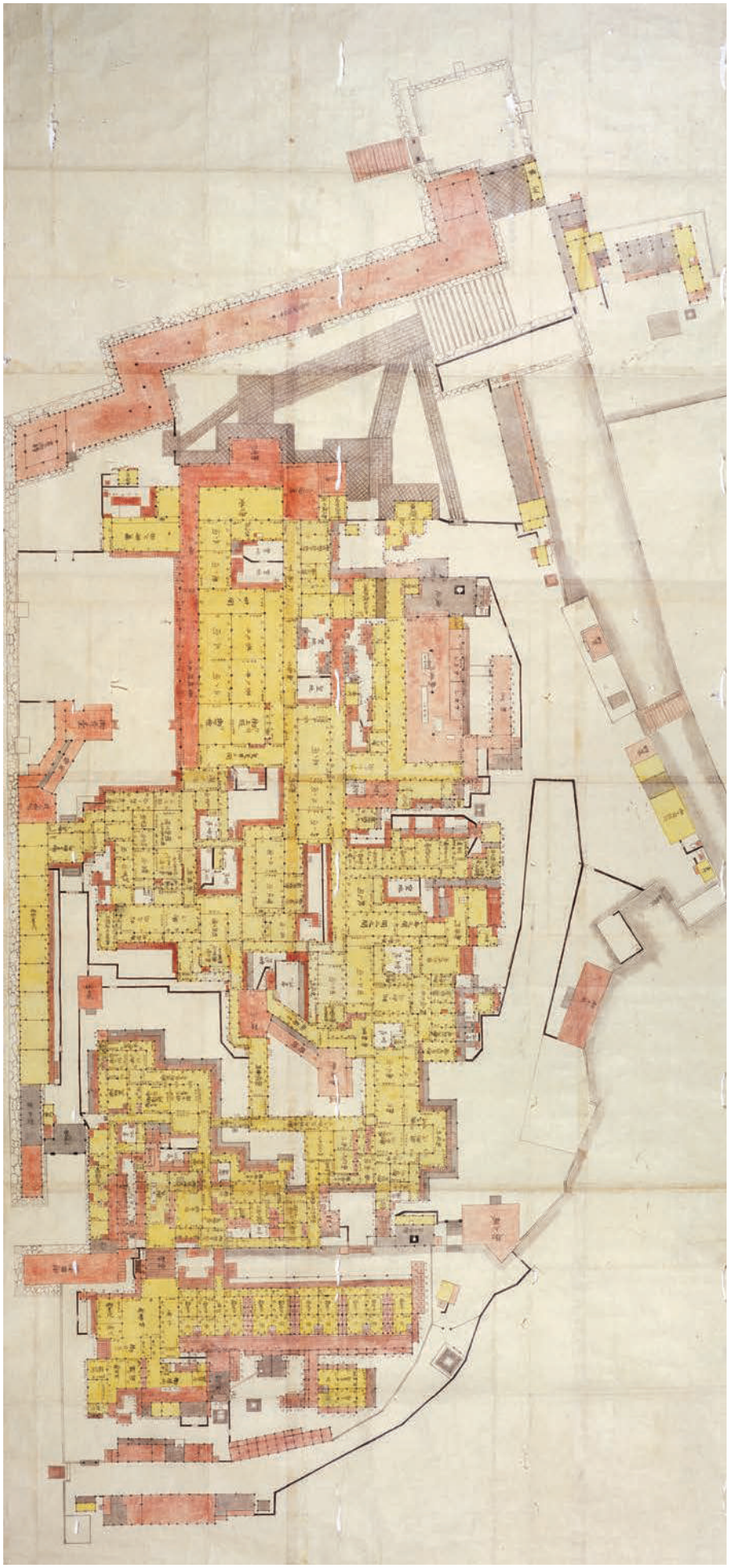
26　金沢城二の丸絵図



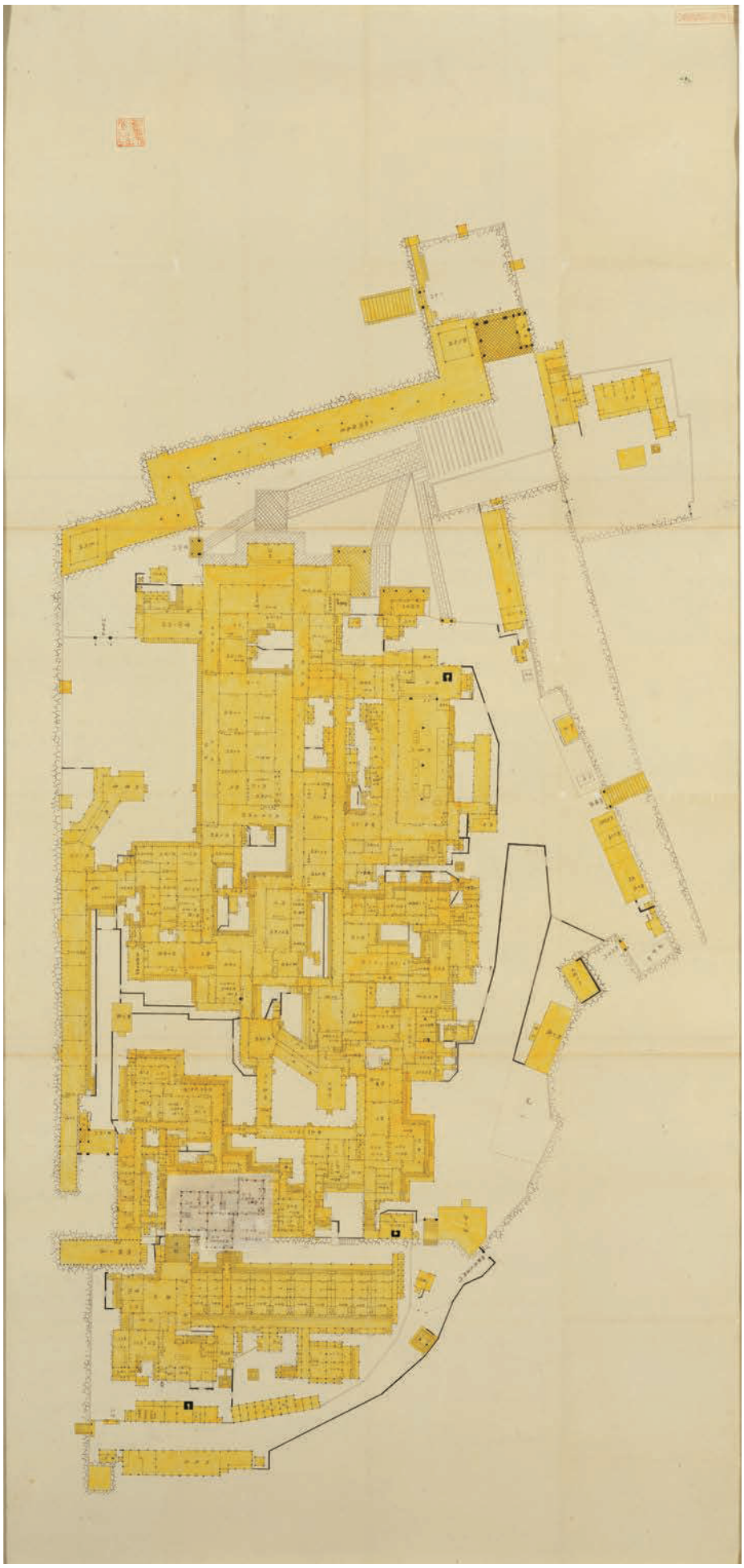
金沢大学附属図書館（150×77㎝）

27

金沢城二ノ丸絵図



石川県立歴史博物館　村松コレクション（66×144cm）



28　金沢城二之丸御住居殿閣図（二ノ丸全図）

金沢市立玉川図書館　氏家文庫（80×168㎝）

29

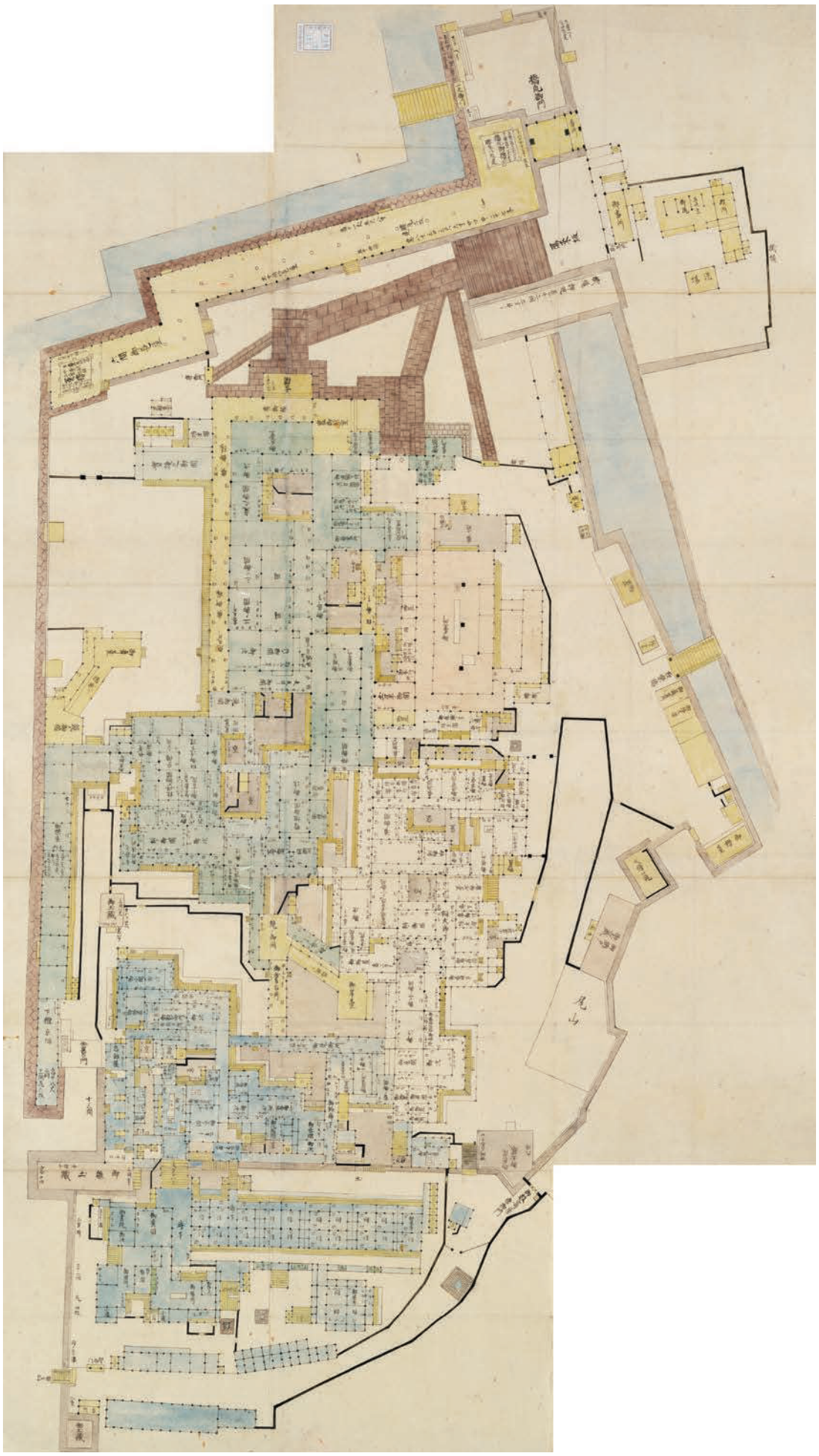
金沢城二之丸御住居殿閣図（二ノ丸全図（三分割））

金沢市立玉川図書館　氏家文庫（165×80㎝）

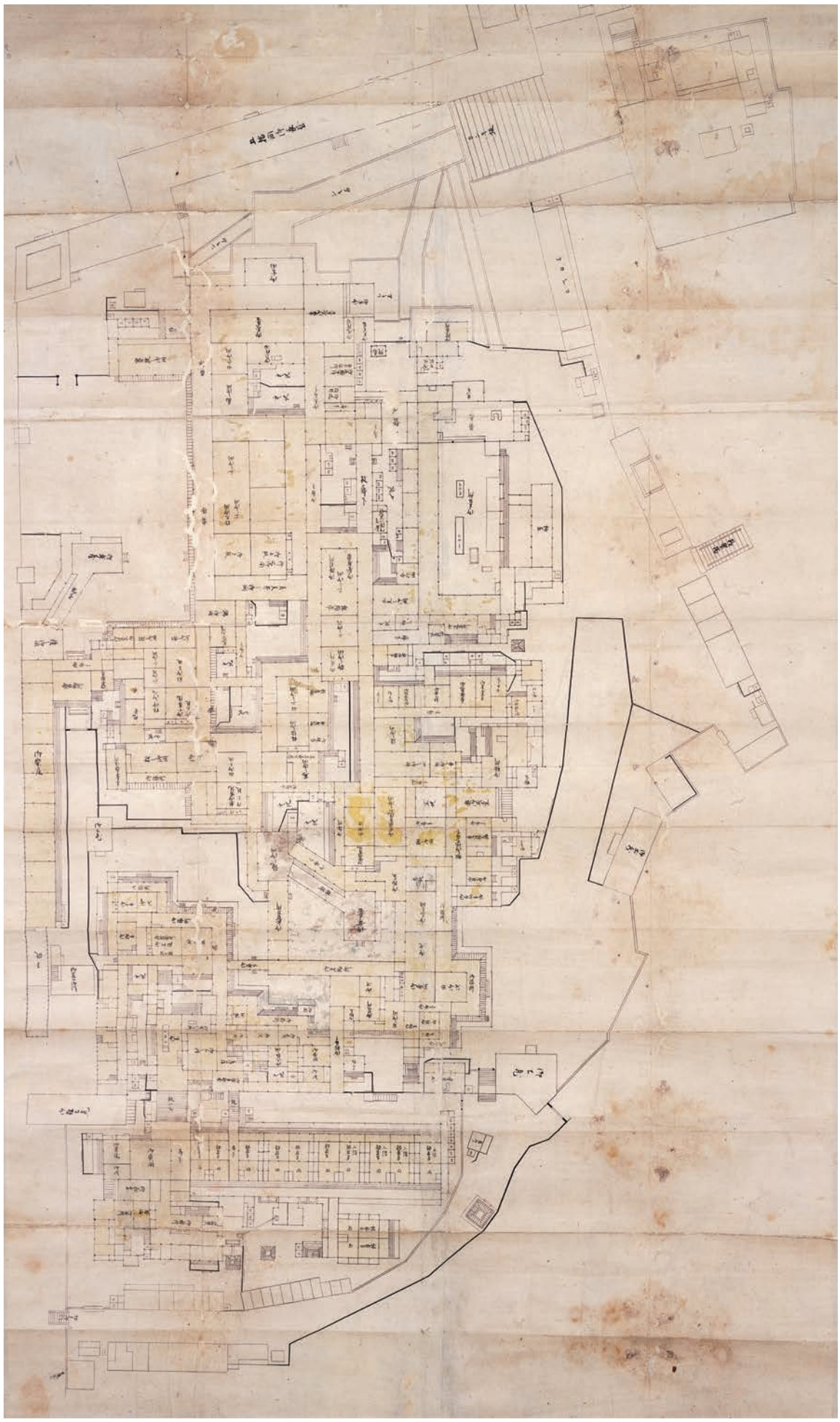
30　金沢城二之丸御殿之図

金沢市立玉川図書館　後藤文庫（103×118㎝）

31 金沢城二の丸絵図



石川県立歴史博物館（75×130㎝）

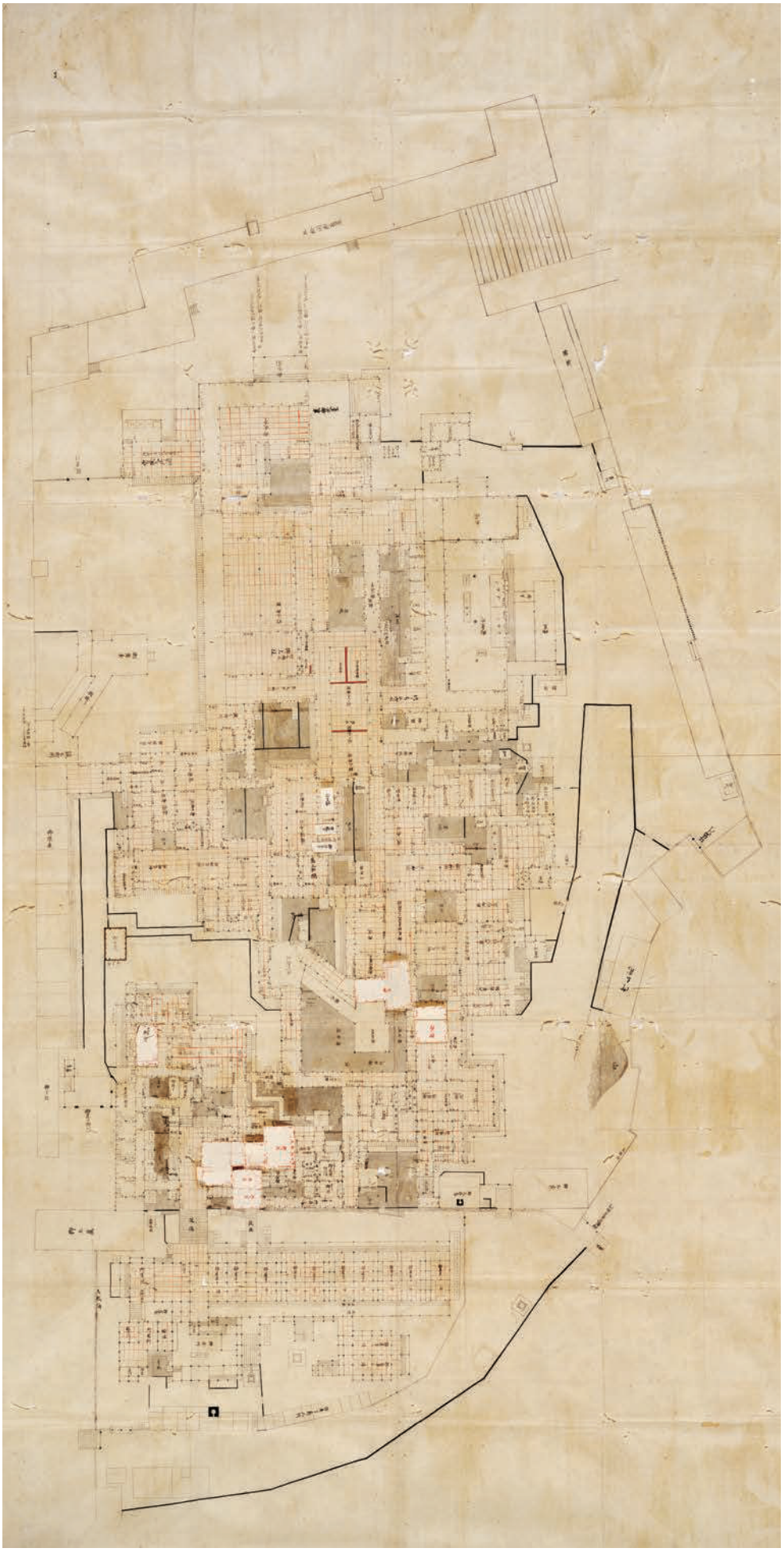


32　二ノ丸御殿図

照円寺（121×73cm）

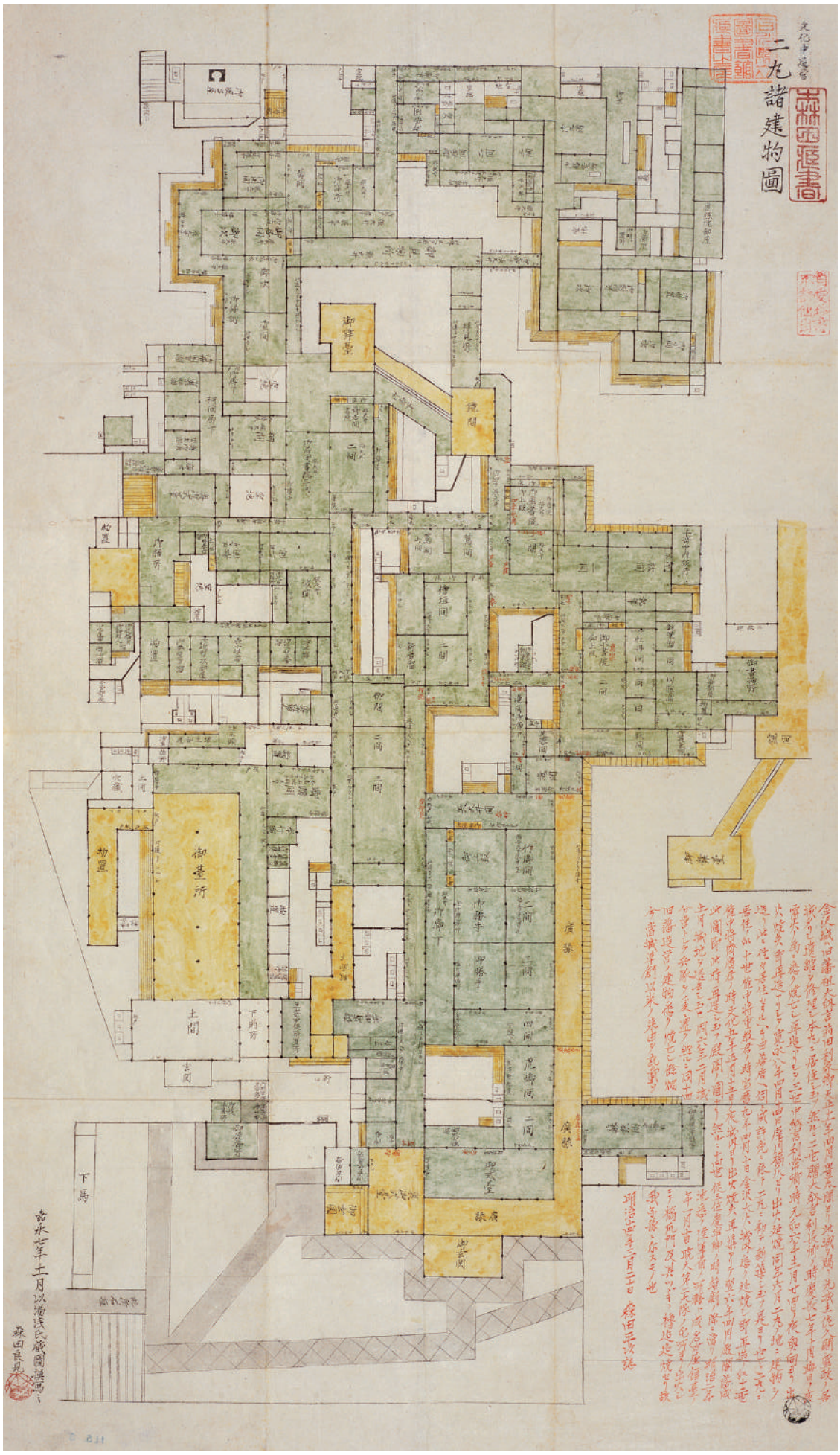
33

二ノ丸御屋形図



前田土佐守家資料館（272×140㎝）

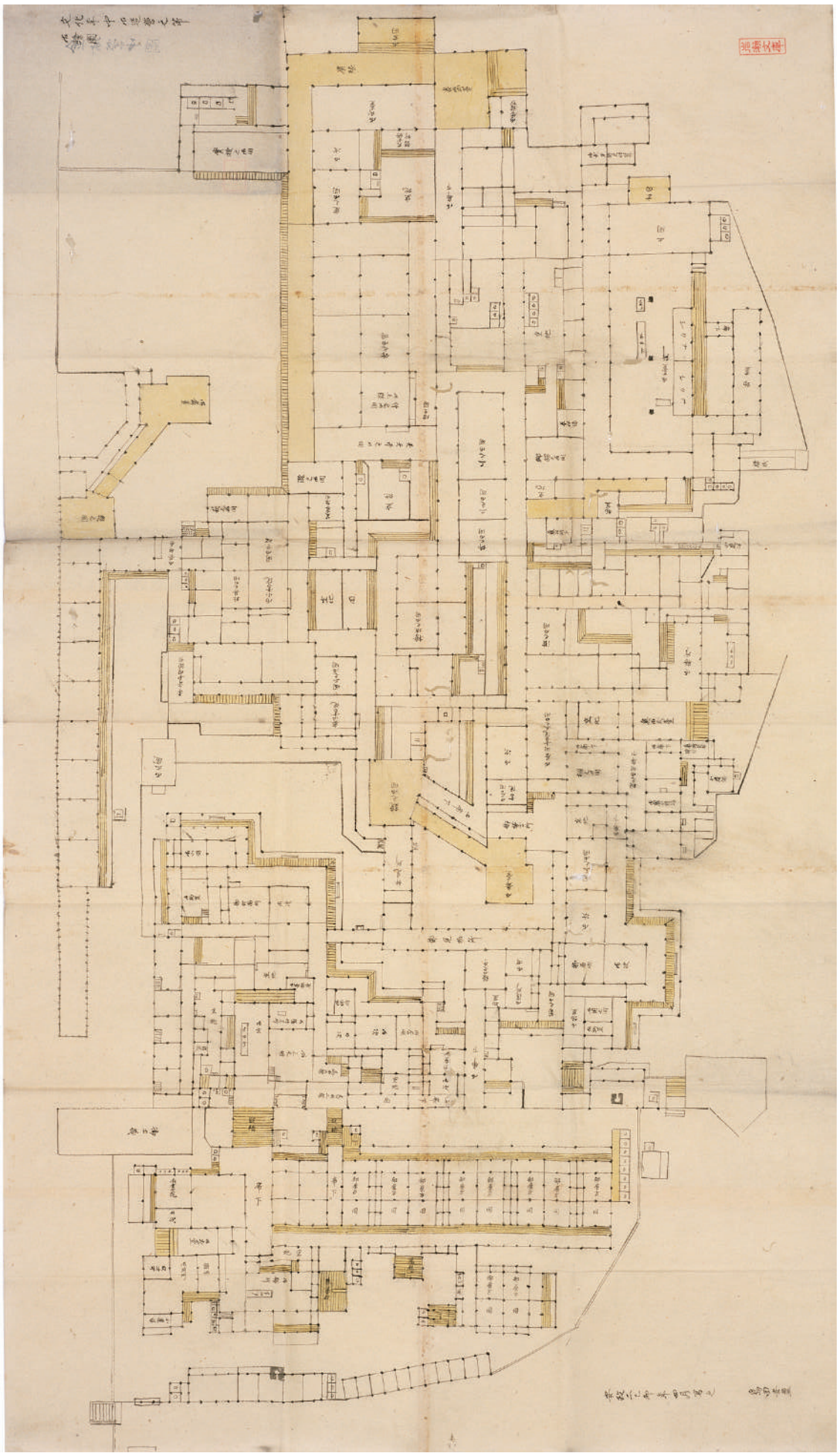
34　金沢城二丸諸建物図



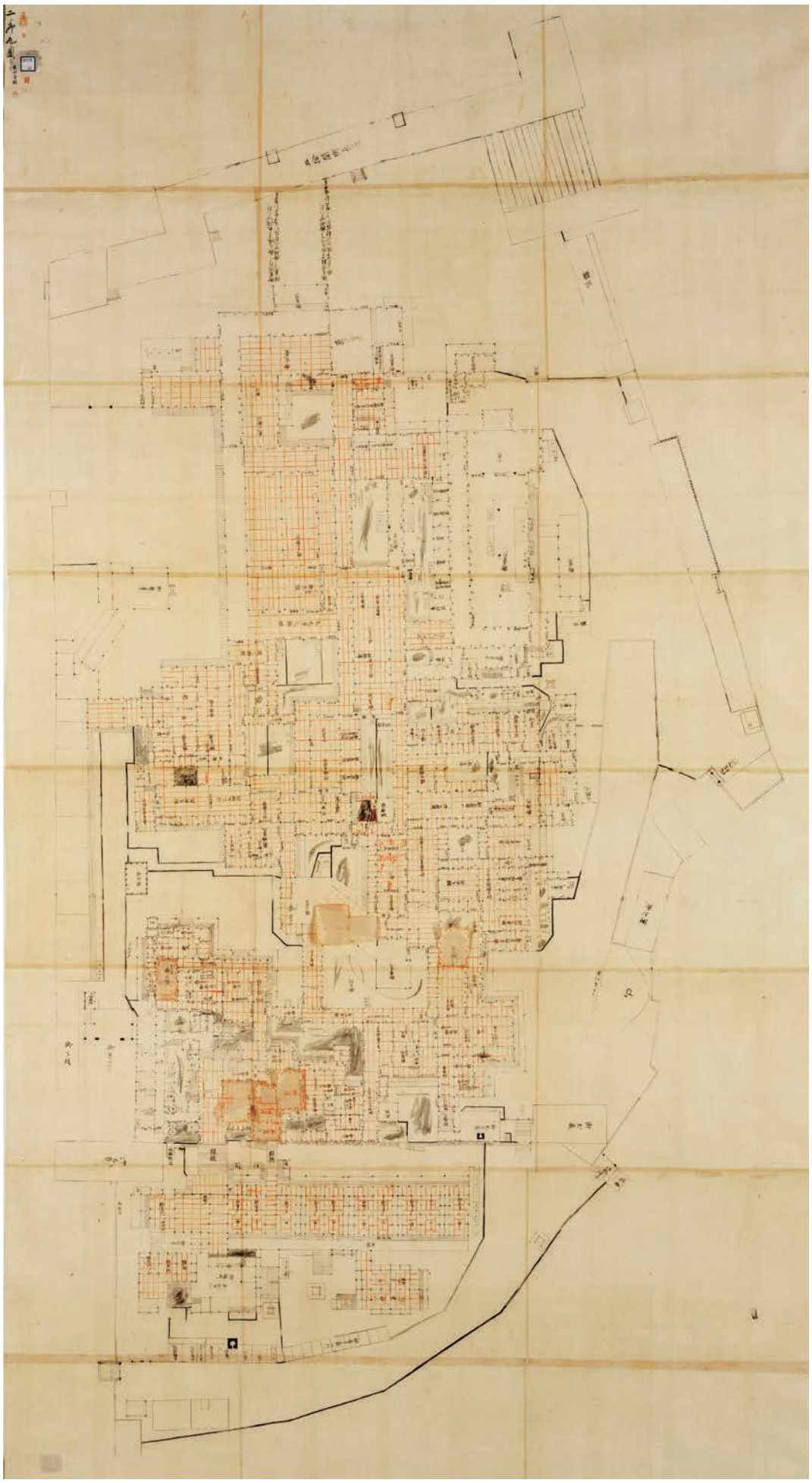
石川県立図書館　森田文庫（90×53cm）

35

金城営中図



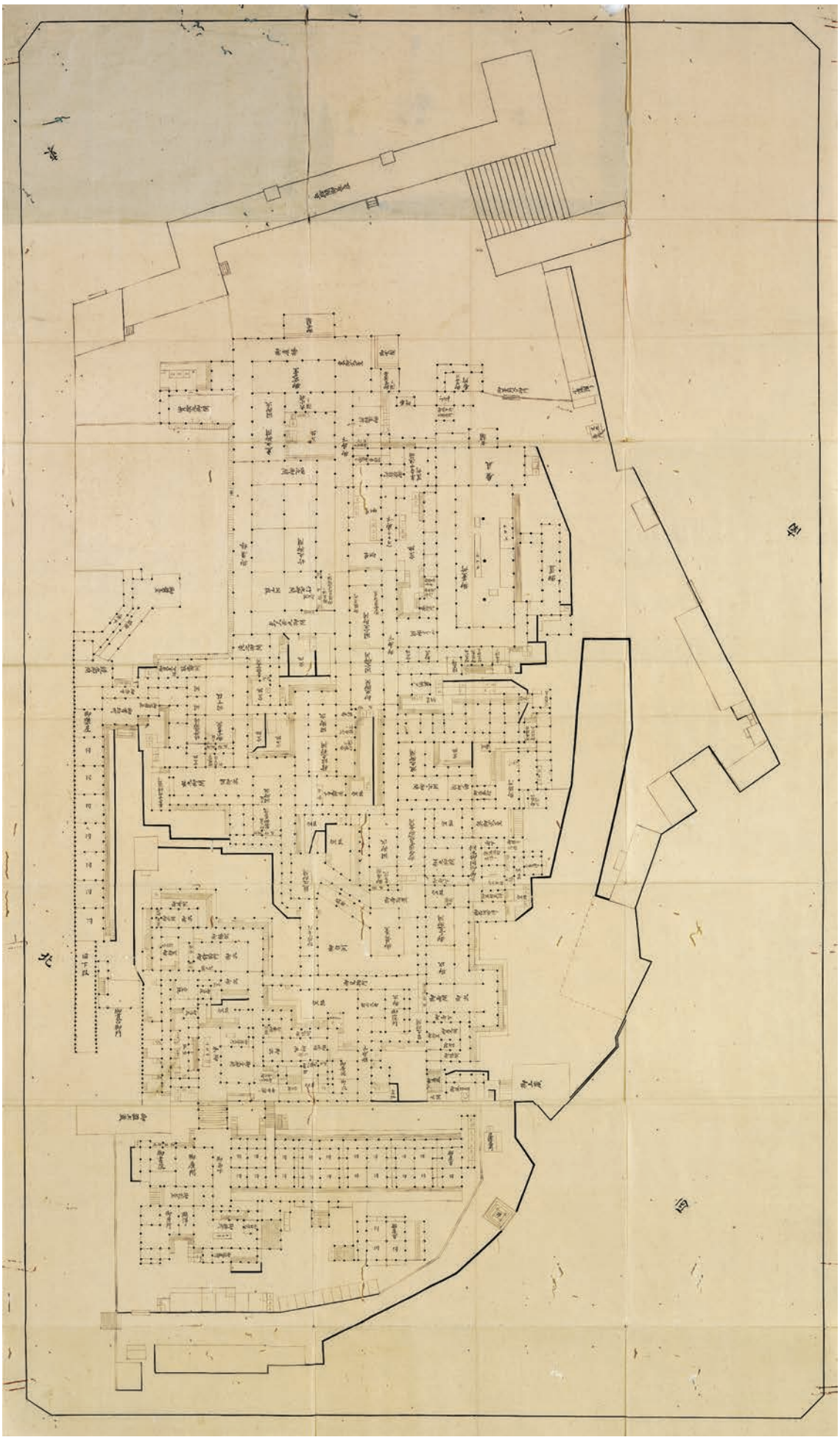
西尾市岩瀬文庫（54×94㎝）



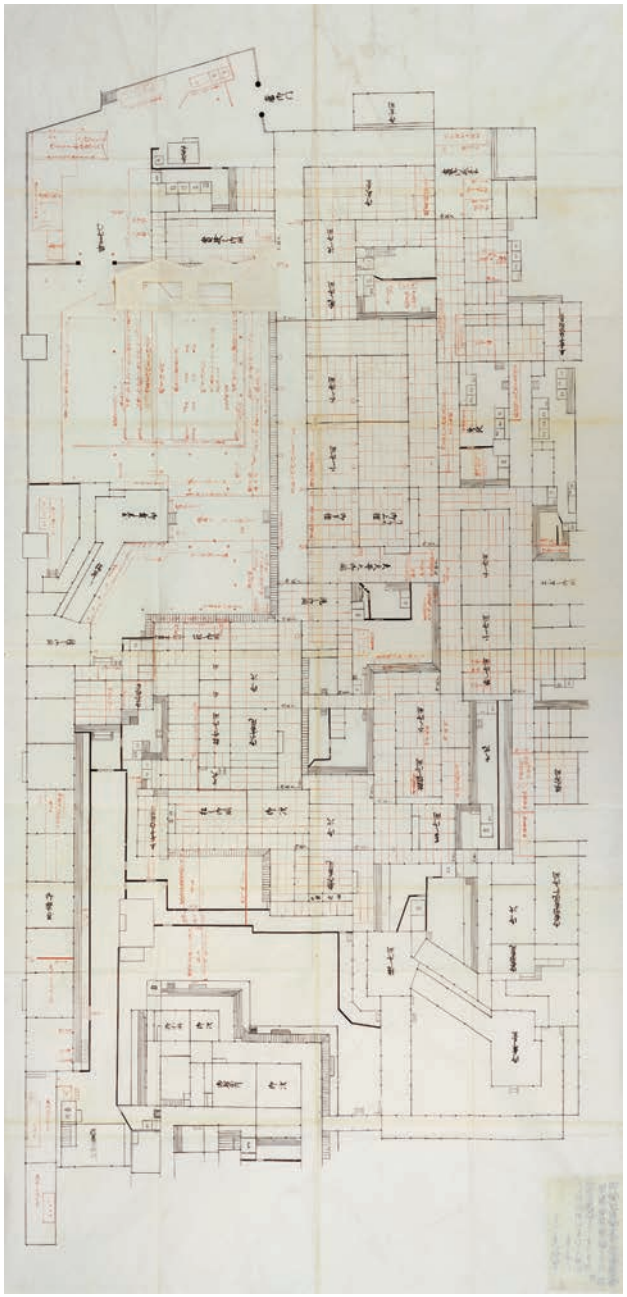
36　金沢城二ノ丸之図

金沢市立玉川図書館　加越能文庫（140×260㎝）

37 二ノ丸御建物平面図



石川県立図書館　富田文庫（78×132㎝）

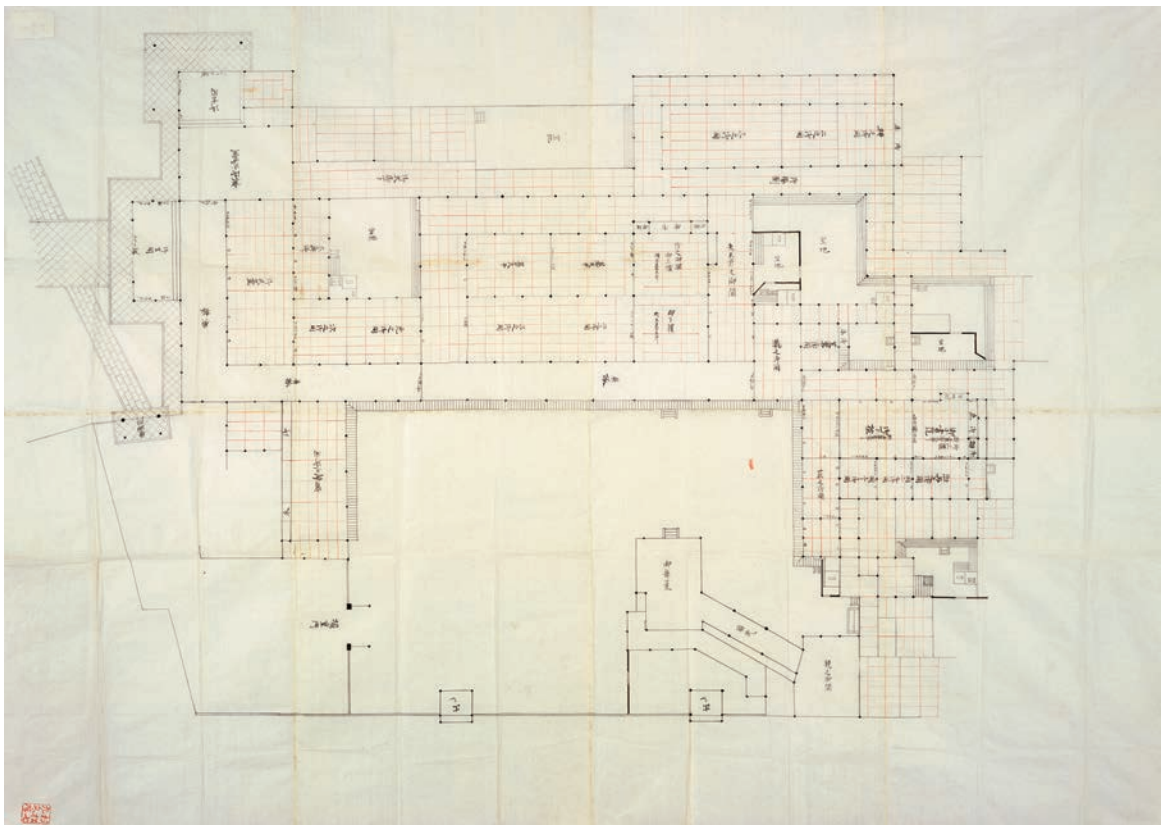


38　於表御舞台御規式御能被仰付候御補理御絵図

金沢市立玉川図書館　大友文庫（74×155㎝）

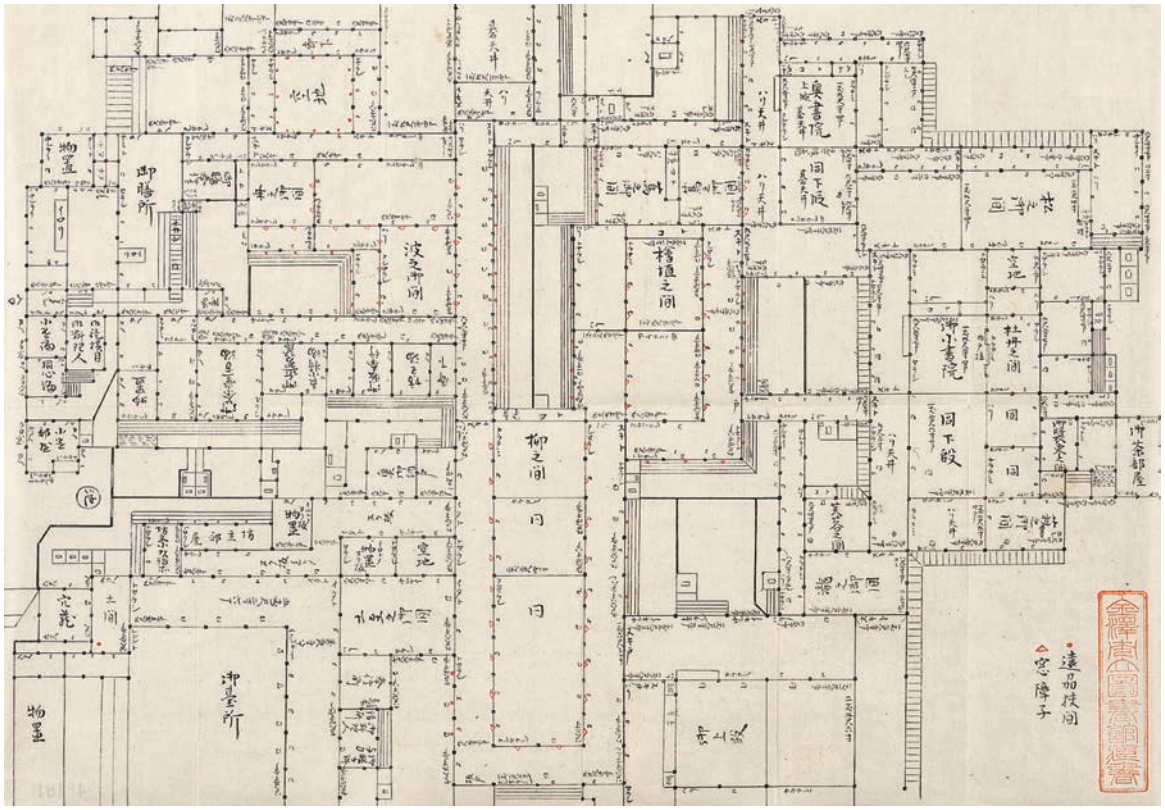
39　加賀金沢城表御殿中之図

（公財）三井文庫（40×27㎝）



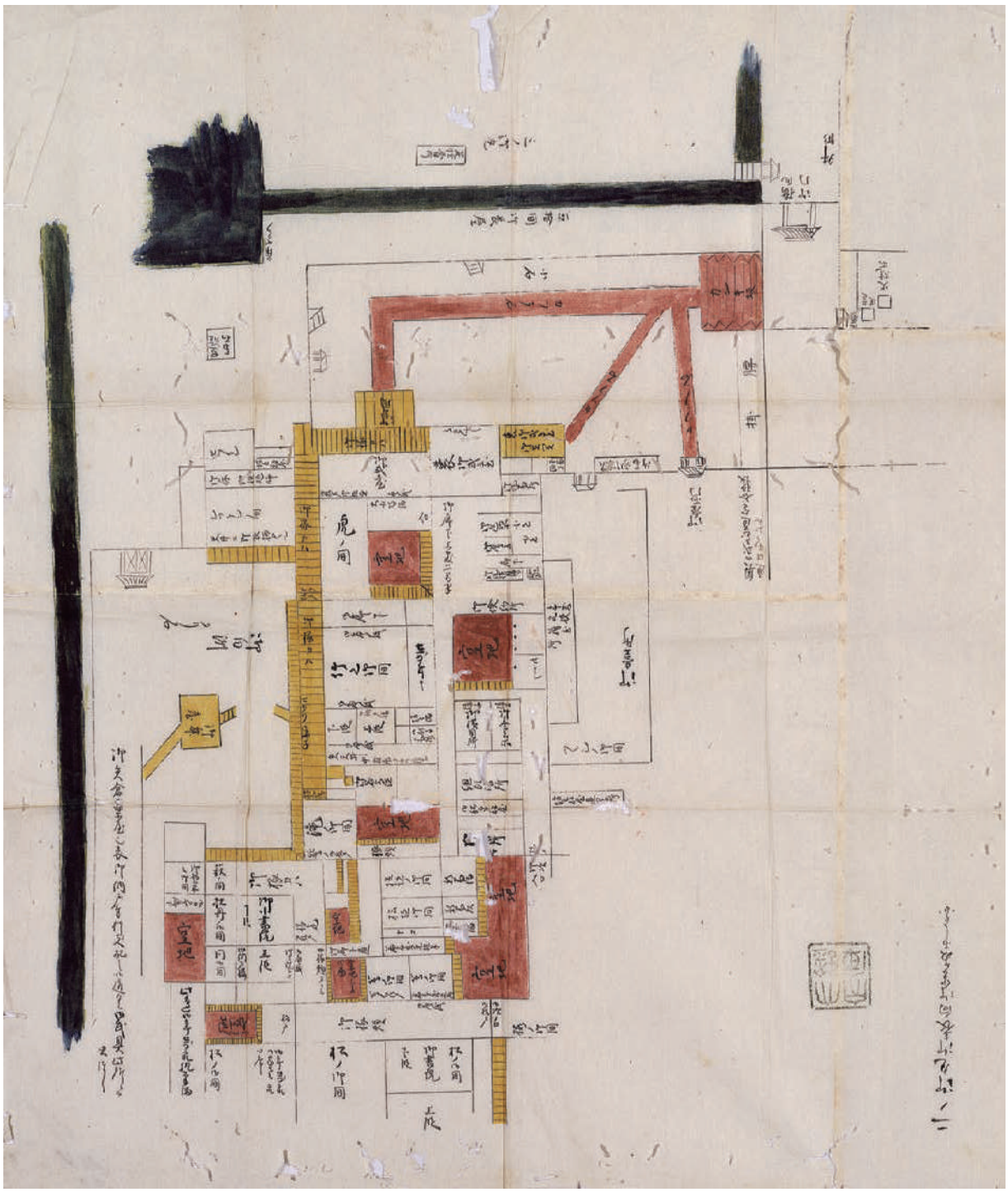
40 金府敷面之図

石川県立歴史博物館　村松コレクション（78×109cm）



41 金沢城二之丸御殿間取之図

金沢市立玉川図書館　清水文庫（28×40cm）

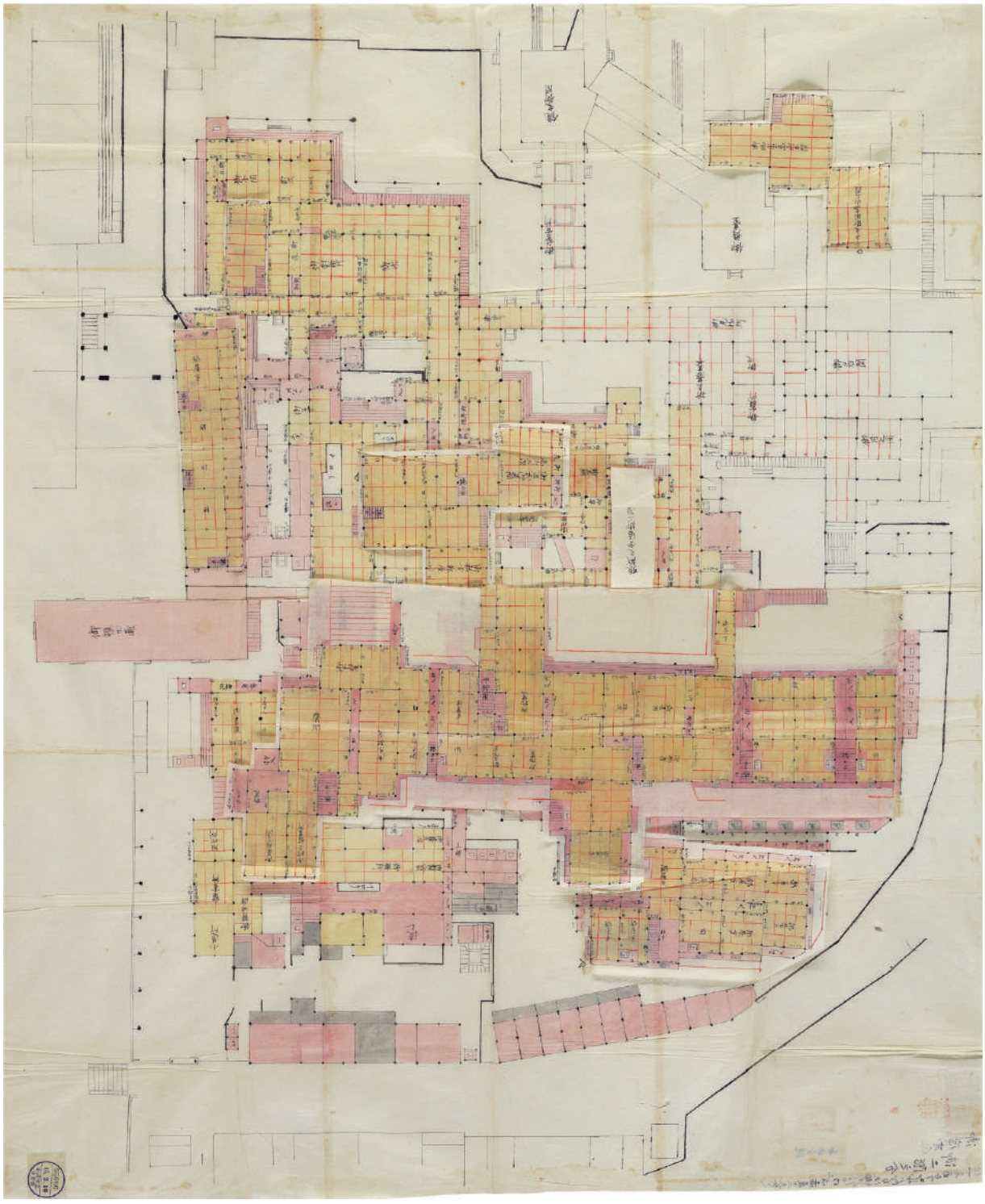


42　二ノ丸表向座敷等之図

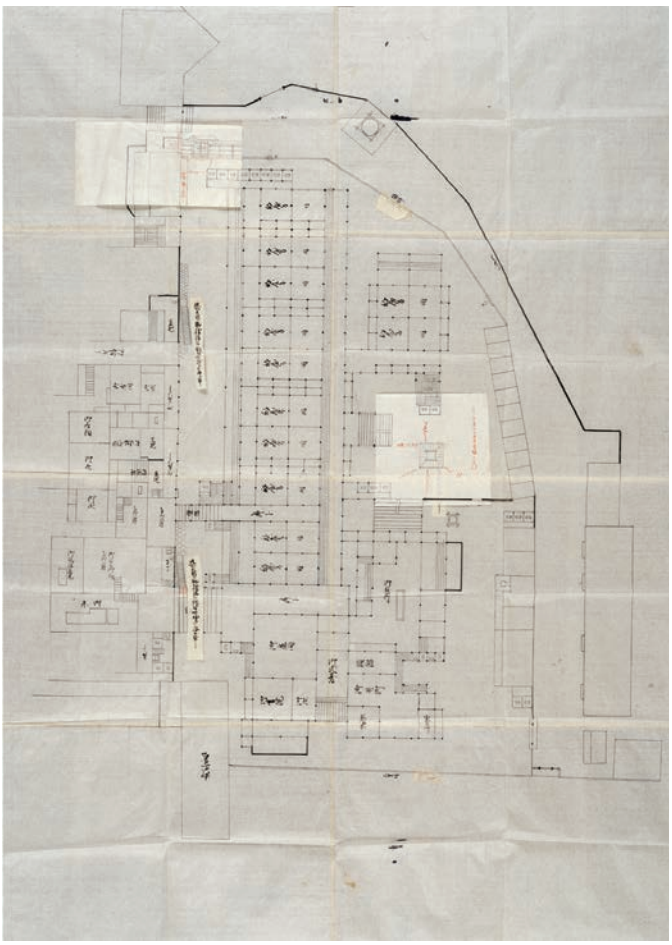
石川県立歴史博物館　大鋸コレクション（56×48㎝）

43

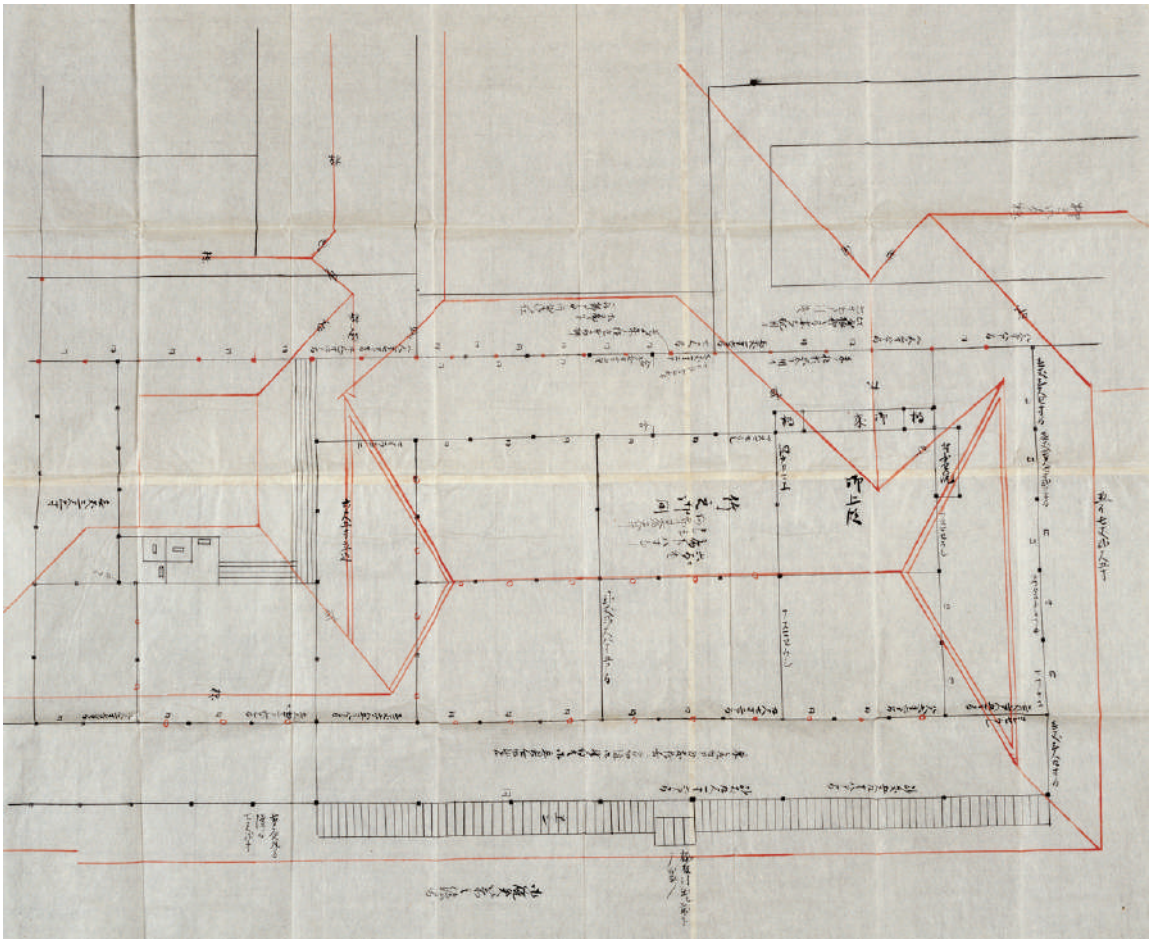
御広式向御二階之分絵図



金沢市立玉川図書館　加越能文庫（80×100cm）



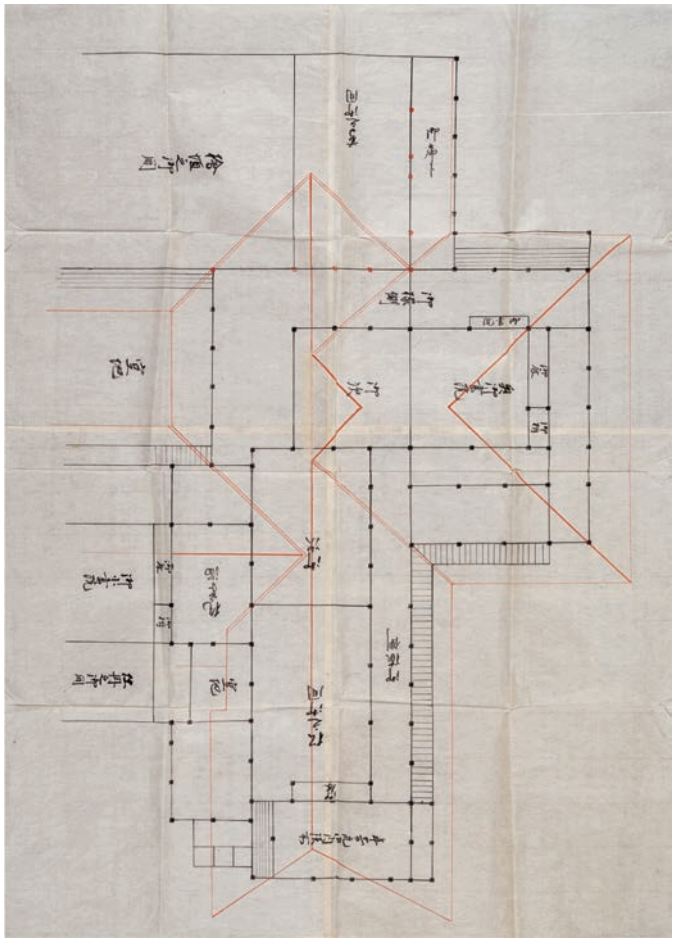
44　二の丸部屋方間取図　松井建設（103×76cm）



45　二の丸竹の間付近平面図（付屋根伏せ図）　松井建設（56×67cm）

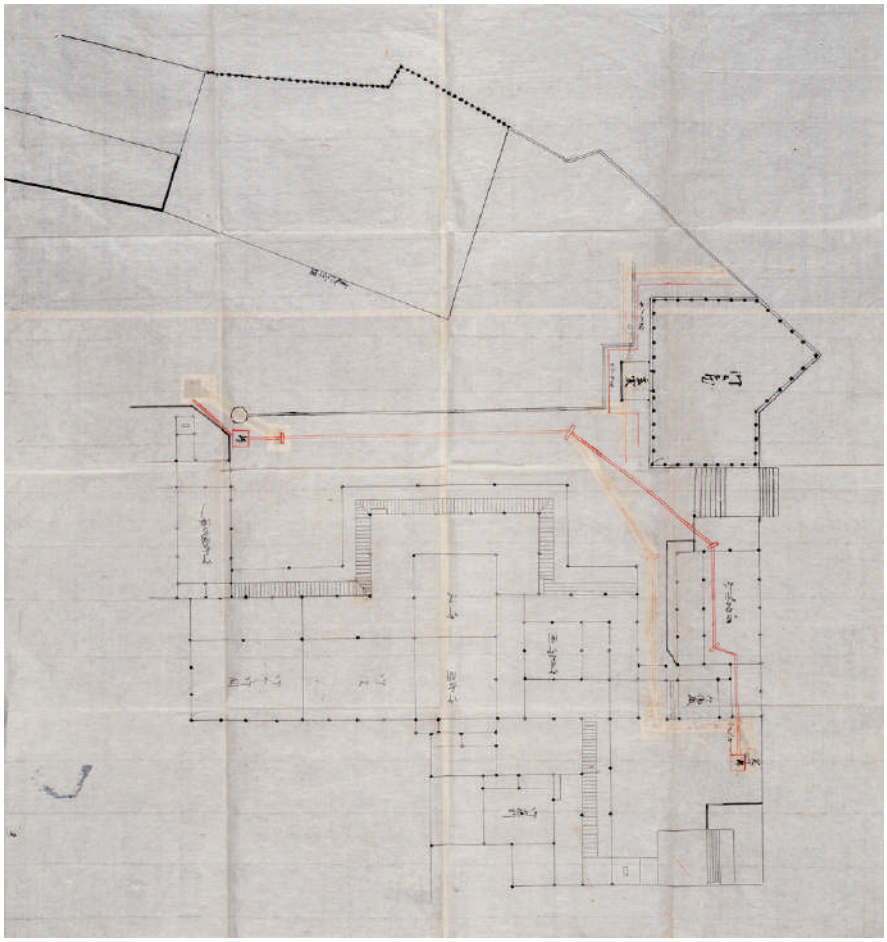
46 二の丸桧垣之間・松之間・奥御書院等平面図（付屋根伏せ図）

松井建設（51×70㎝）



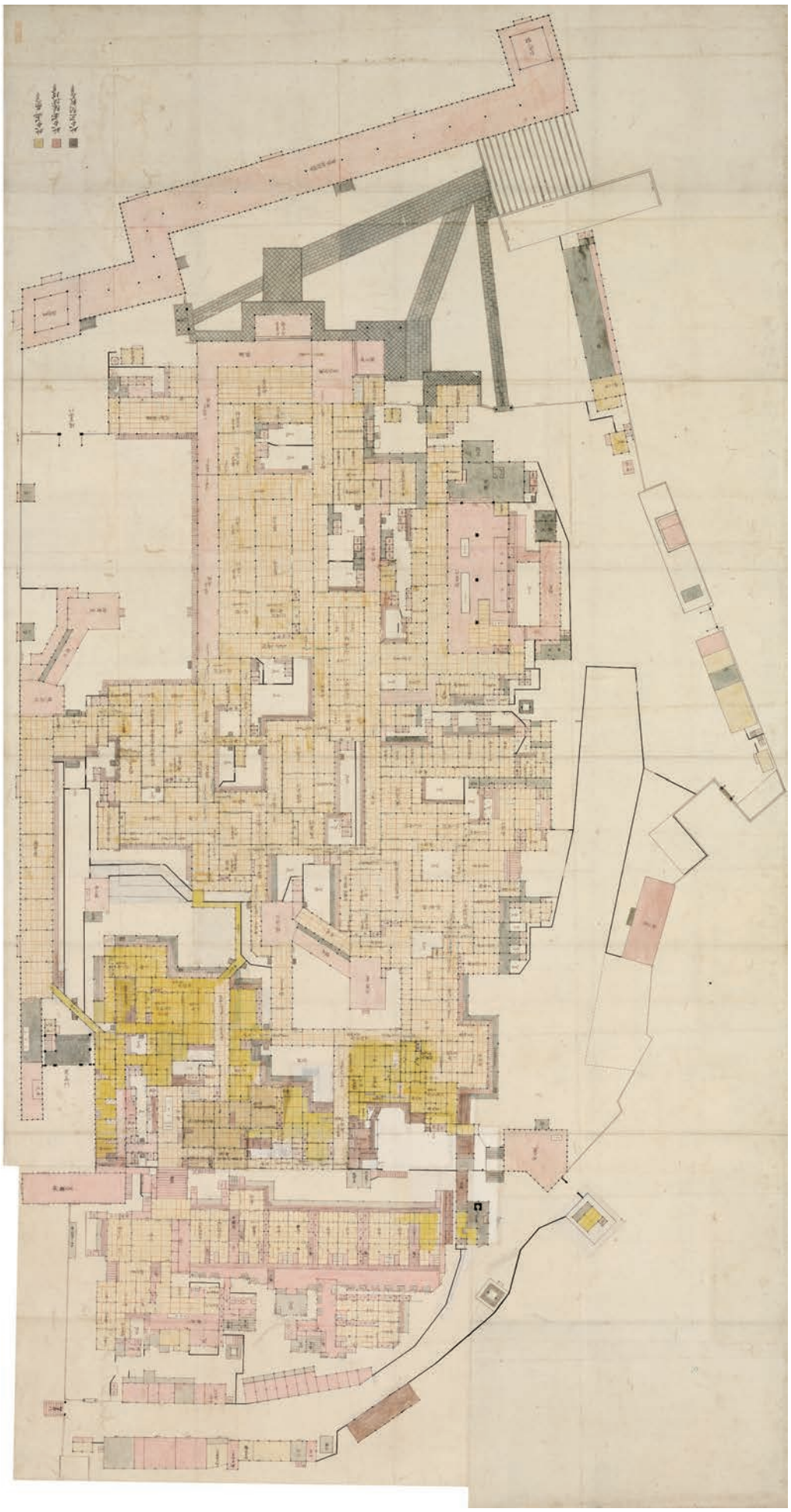
47 二の丸御殿御居間付近の図（付水道路線）

松井建設（60×56㎝）



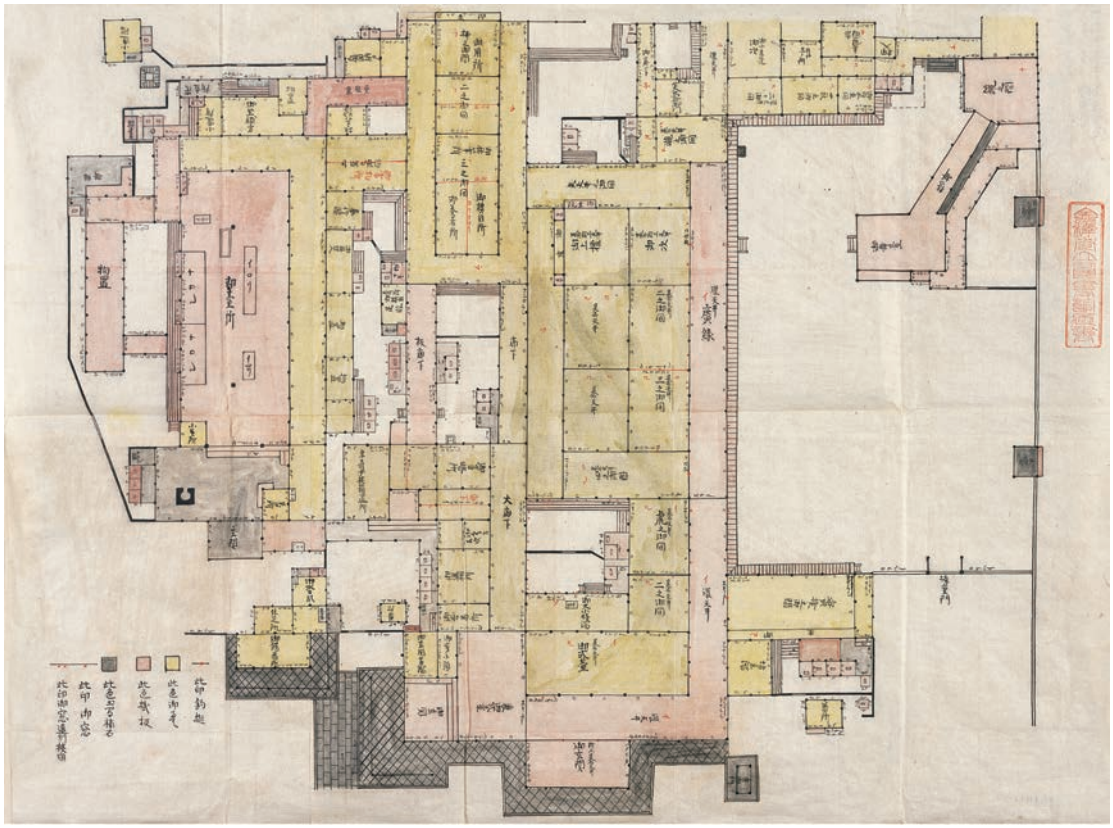
2期図

48　金沢城二の丸地図

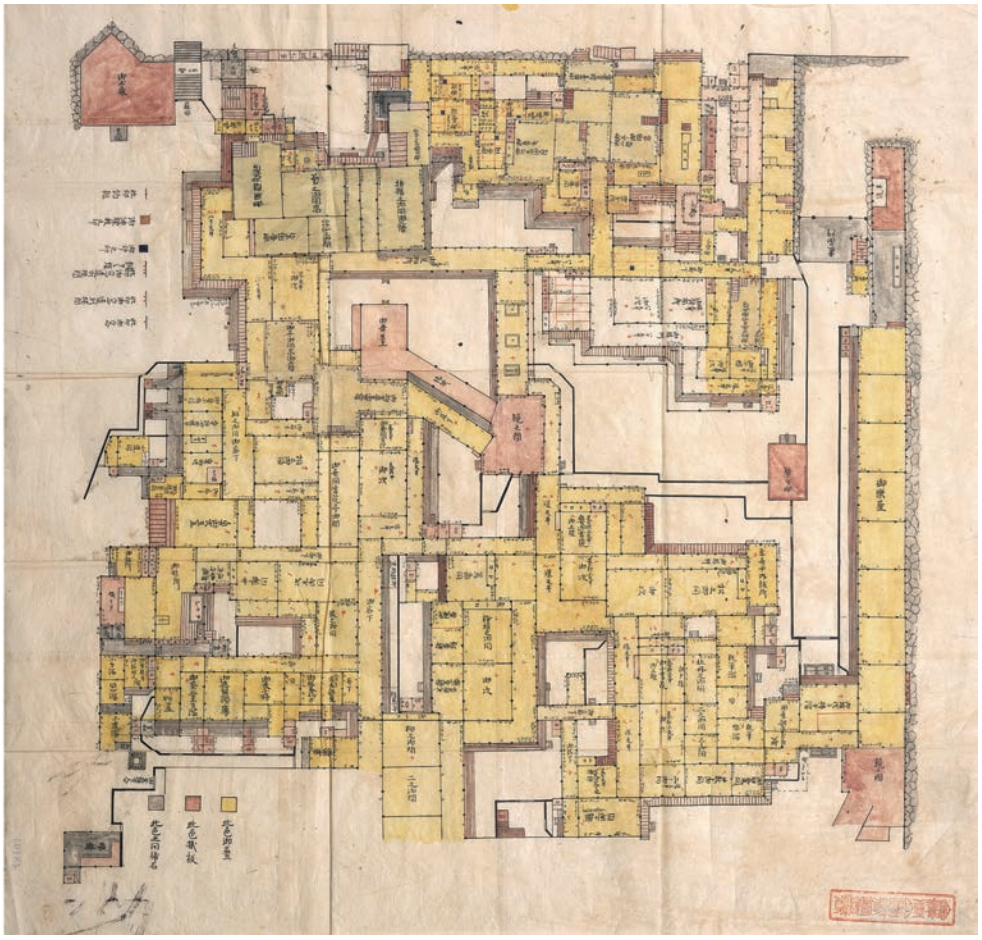


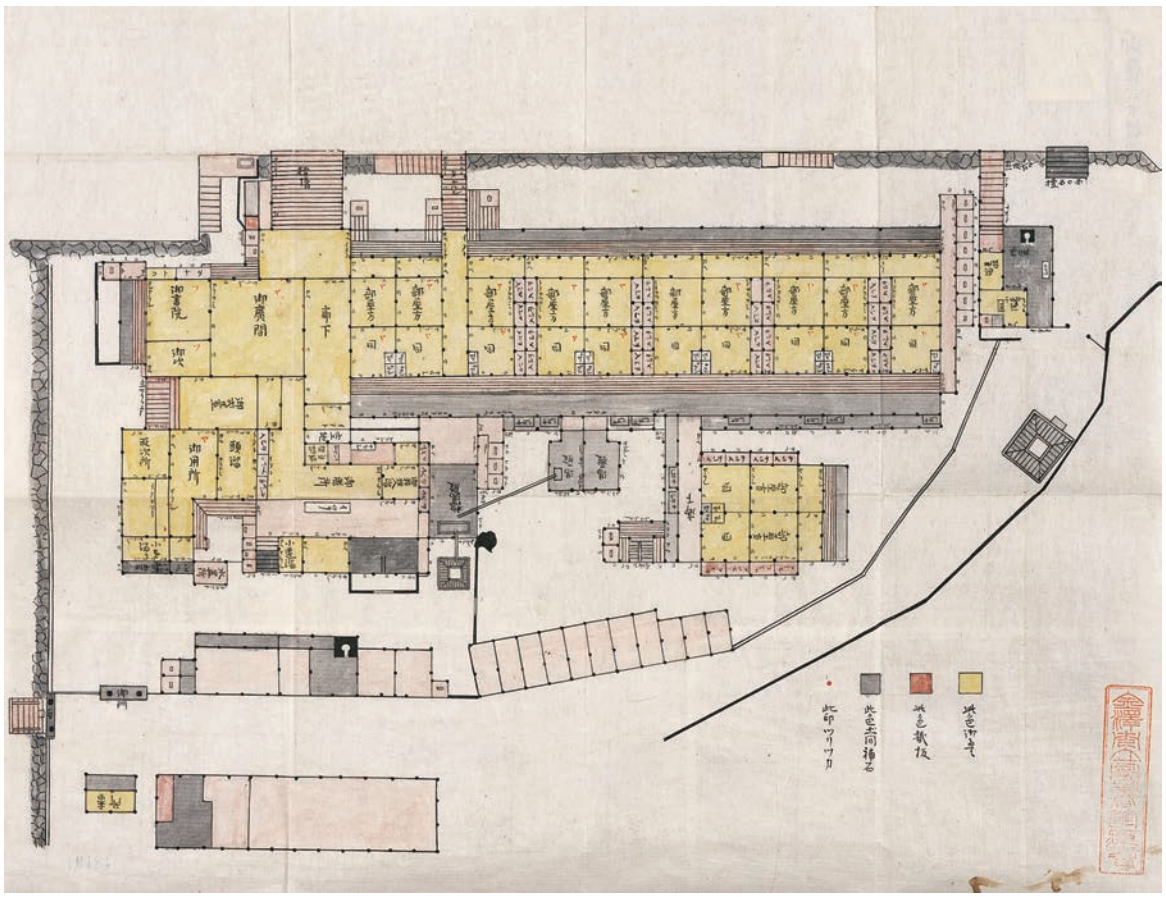
石川県立歴史博物館（130×255㎝）

49 二之丸御殿並御広式下部屋等絵図
（表御式台ヨリ竹之間迄、御台所ヨリ柳之御間迄）
金沢市立玉川図書館　清水文庫（40×54㎝）

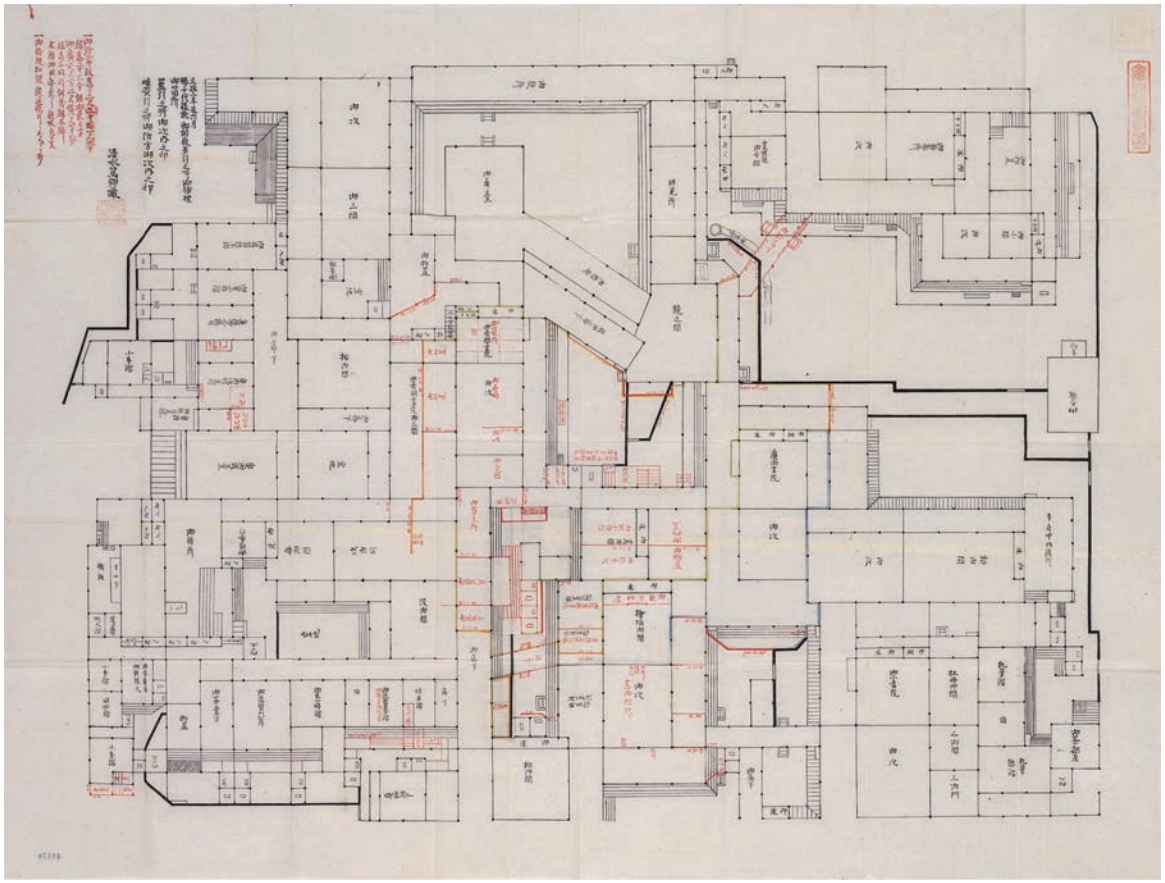


50 二之丸御殿並御広式下部屋等絵図
（滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻リ御広式廻リ迄）
金沢市立玉川図書館　清水文庫（52×55㎝）

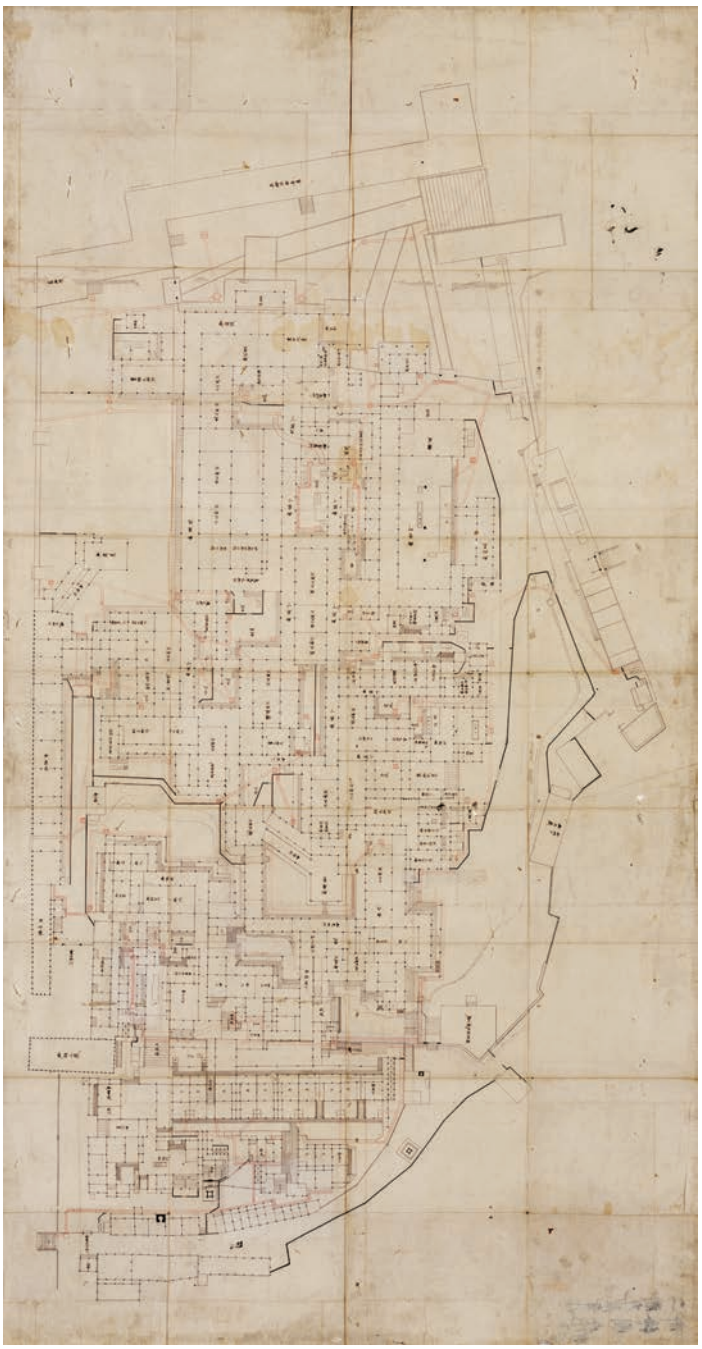




51　二之丸御殿並御広式下部屋等絵図（御広式下壇廻り）
金沢市立玉川図書館　清水文庫（33×43cm）



52　二之丸御殿御補修絵図
金沢市立玉川図書館　清水文庫（67×88cm）

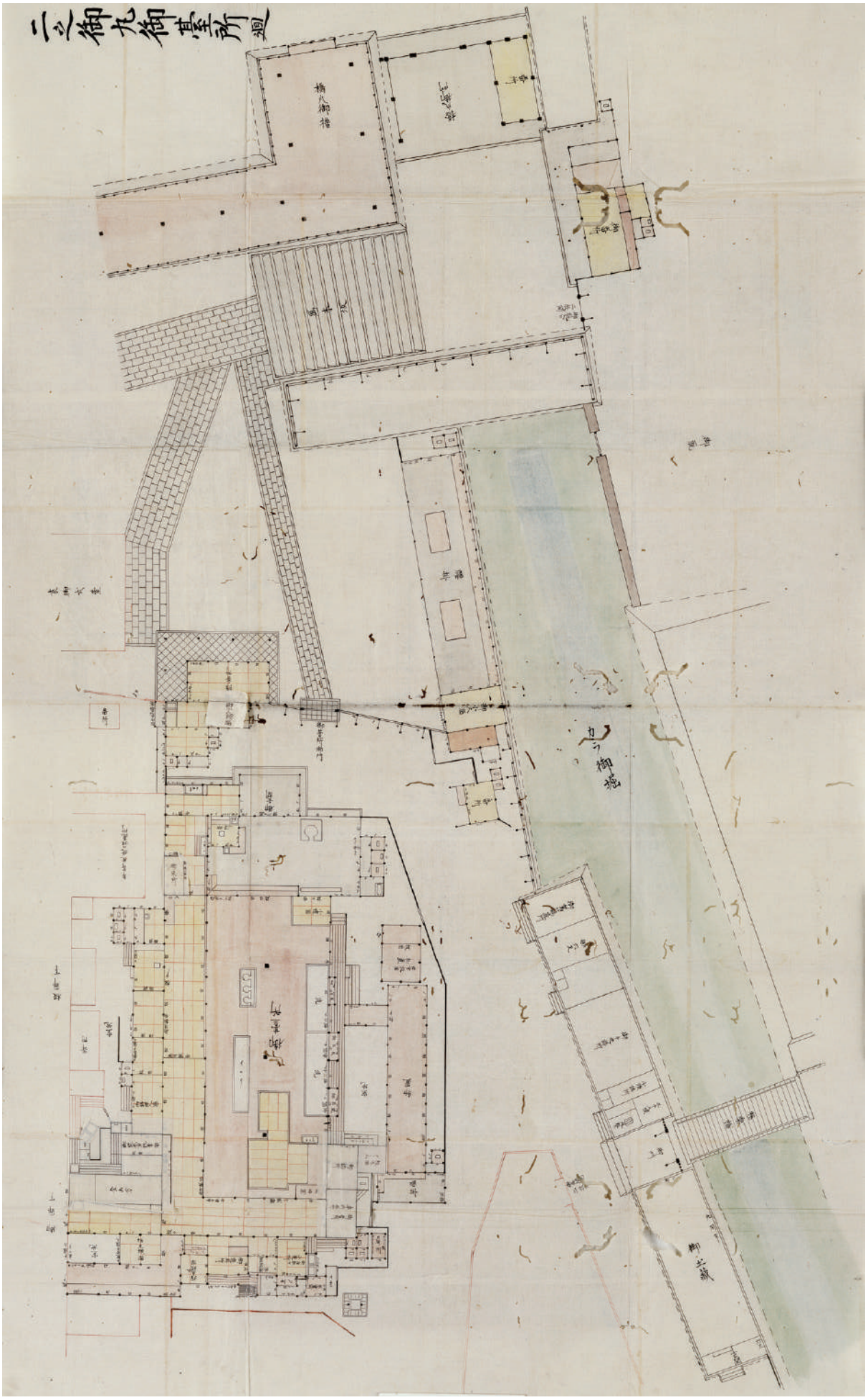


54 二ノ丸万年樋絵図

大友佐俊氏（188×98㎝）

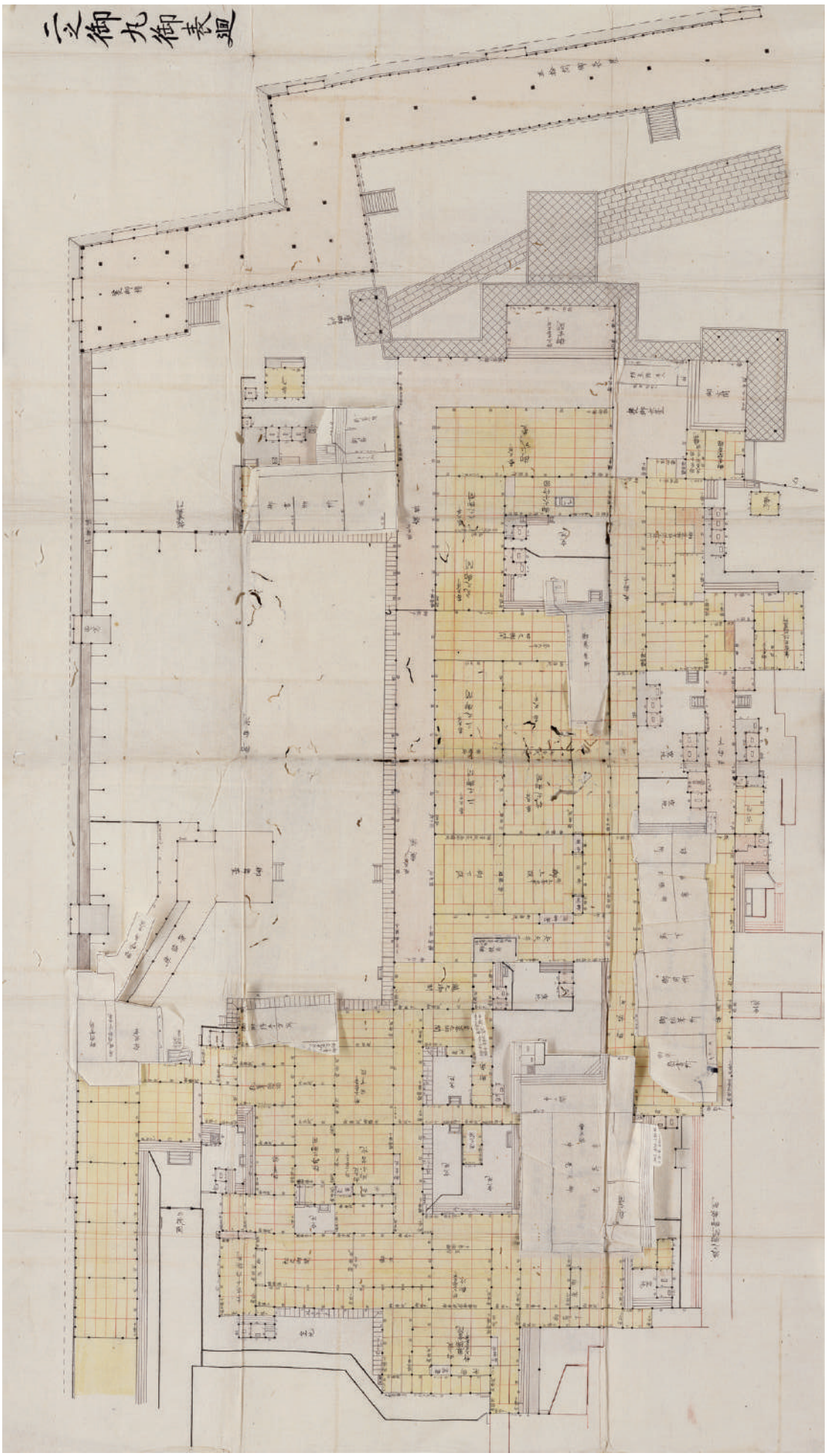
55 御城中壱分碁絵図（部分）

横山隆昭氏（151×137㎝）



60　竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図（二之御丸御台所辺）

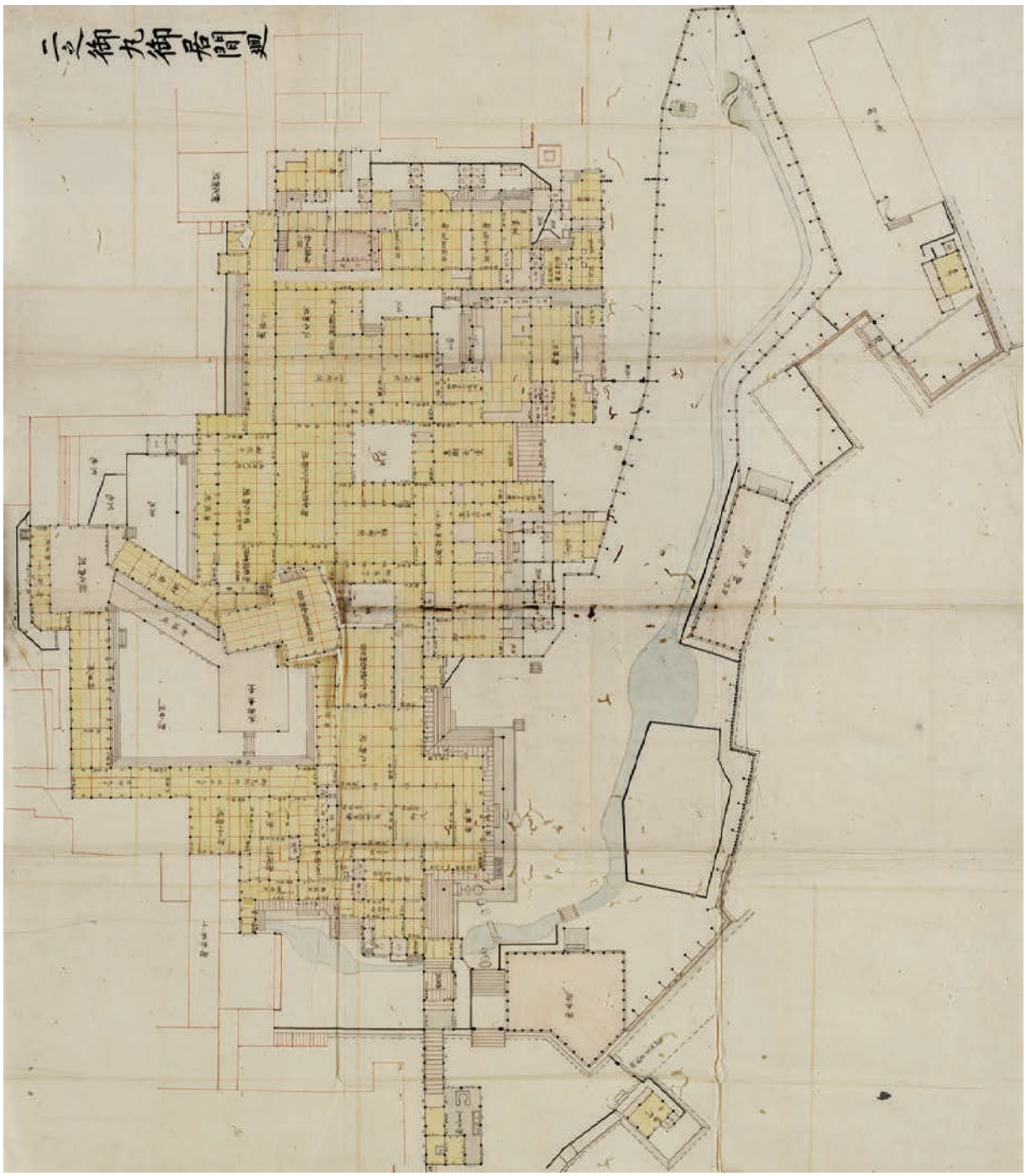
大友佐俊氏（119×75㎝）



61

竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図（二之御丸御表廻）

大友佐俊氏（128×76㎝）



62　竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図（二之御丸御居間廻）

大友佐俊氏（91×100㎝）

63

金沢城二の丸奥部絵図

石川県立歴史博物館（110×78㎝）

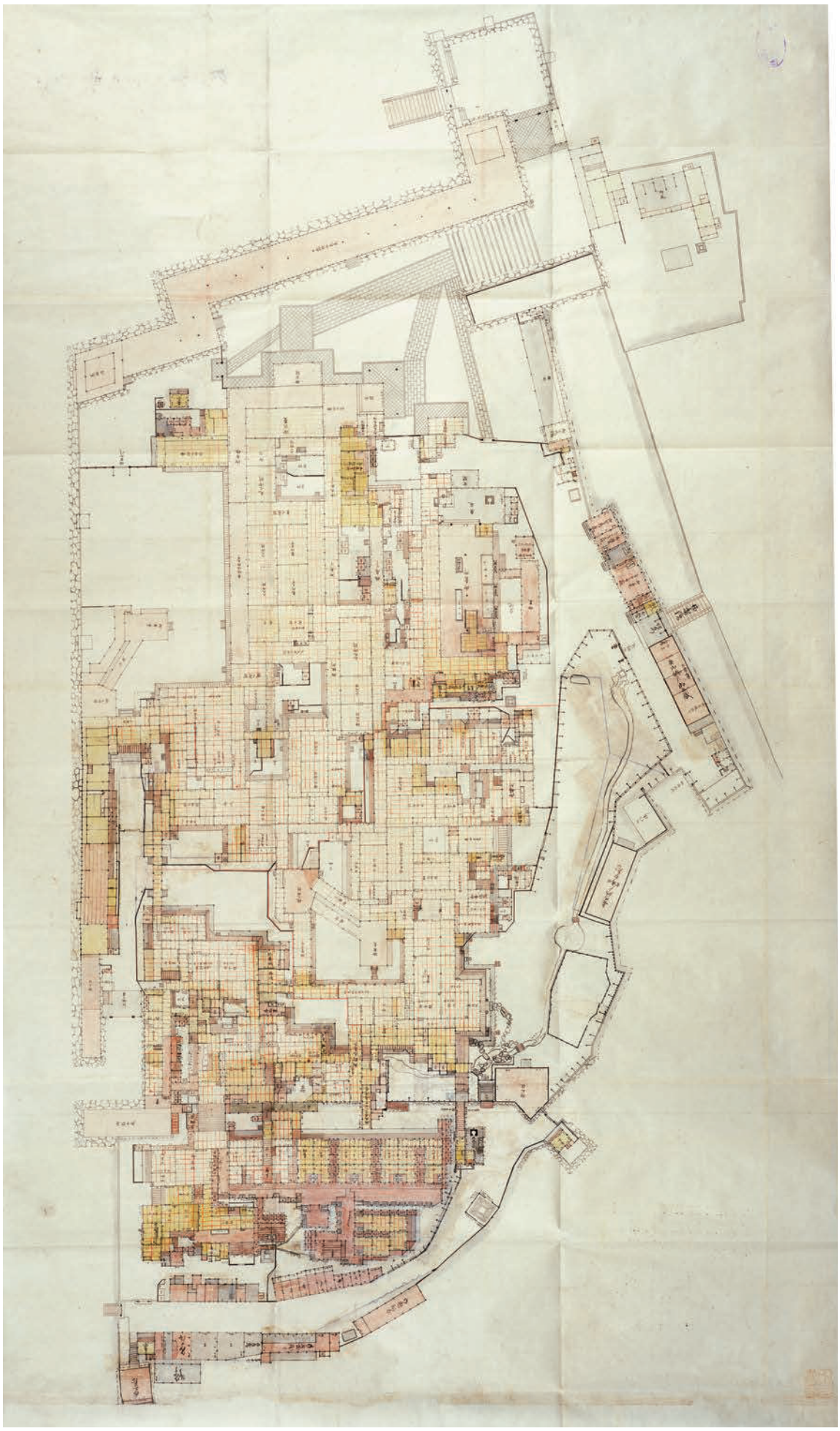
3期図

64　御城分間御絵図（部分）

（公財）前田育徳会（155×213㎝）

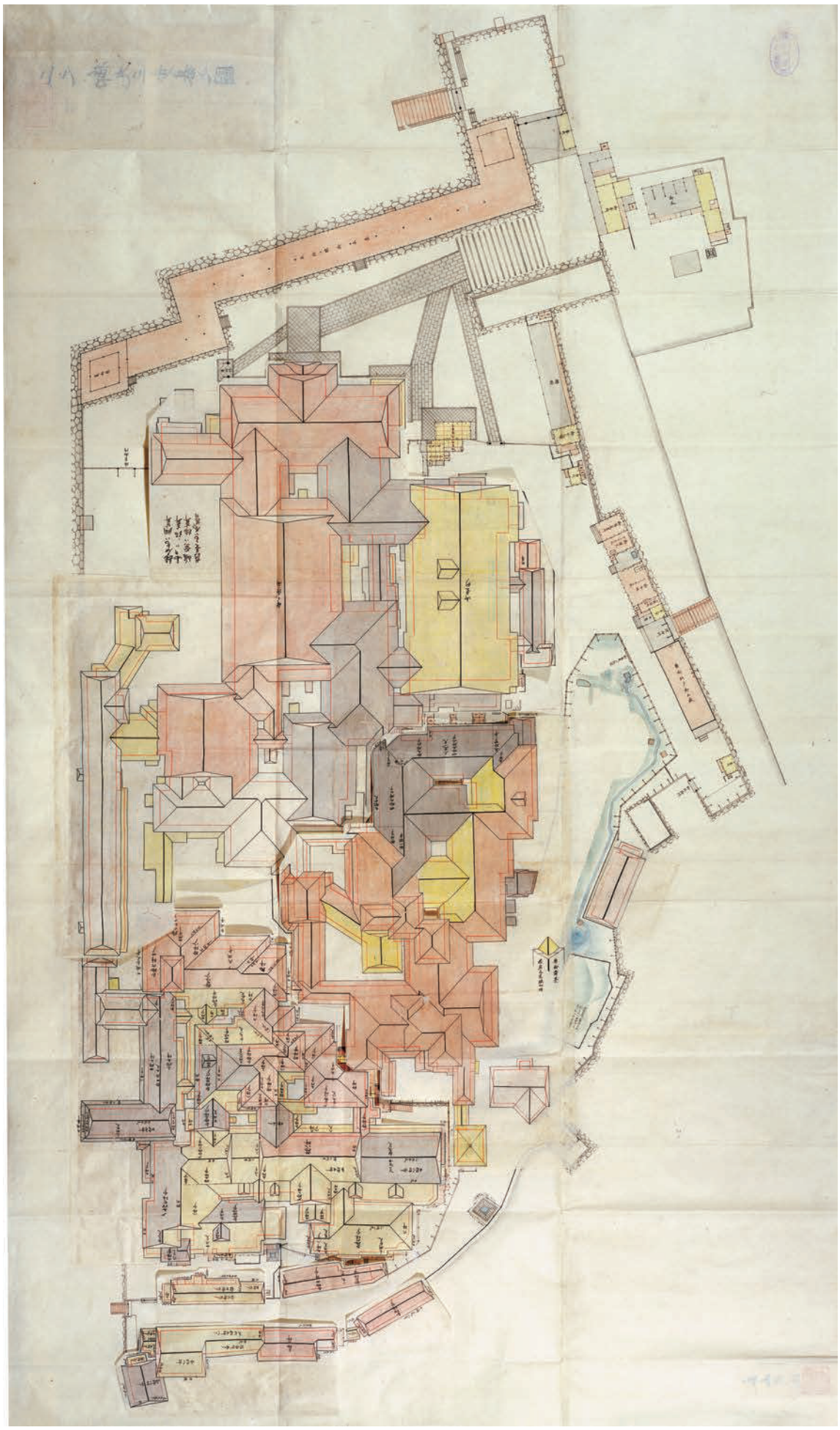
65　加州金沢城二ノ丸之図

（公財）三井文庫（80×145㎝）



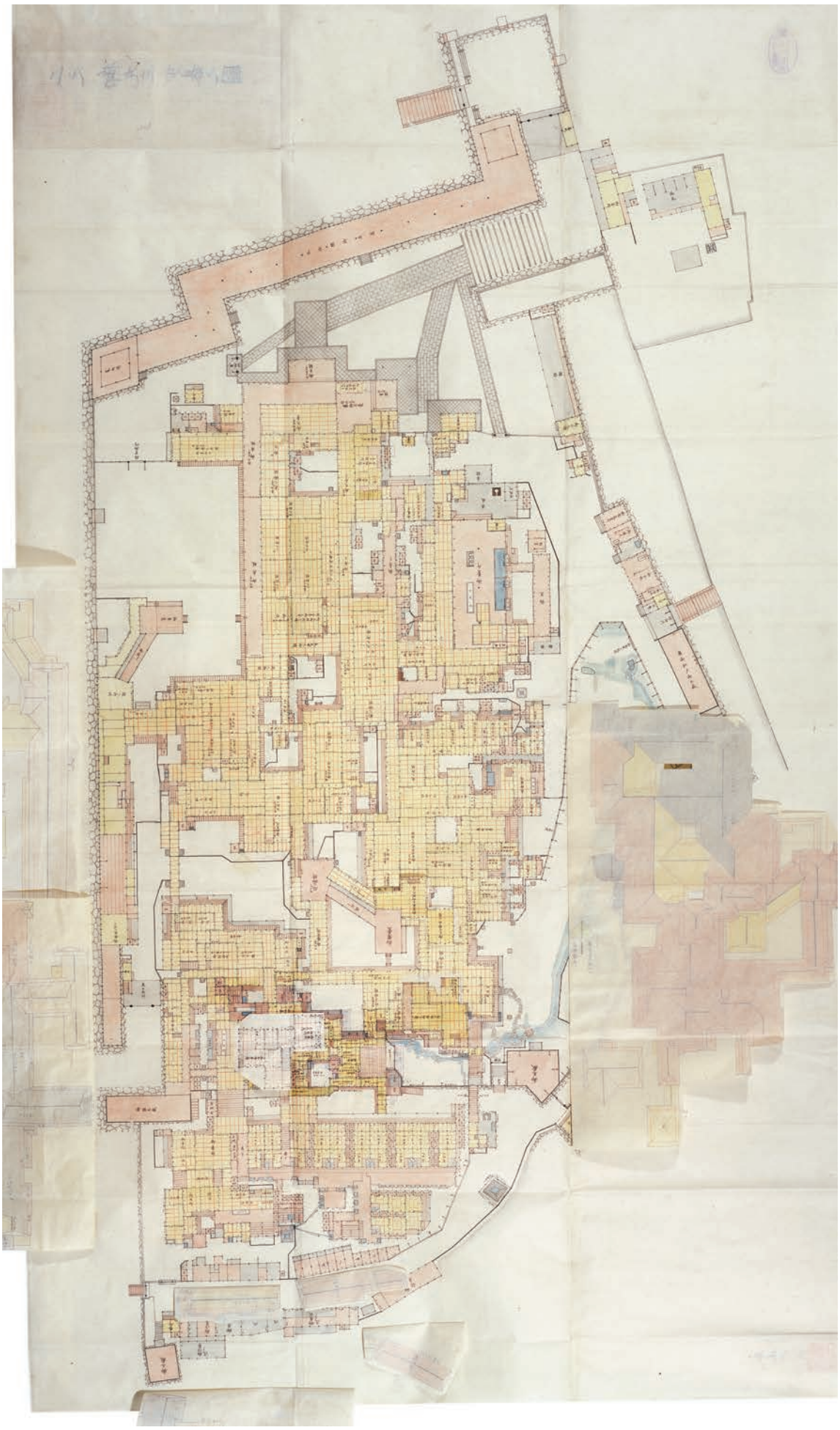
66 金沢城二之御丸三歩碁図A

石川県立図書館（143×83㎝）



67　金沢城二之御丸三歩碁B

石川県立図書館（142×83cm）



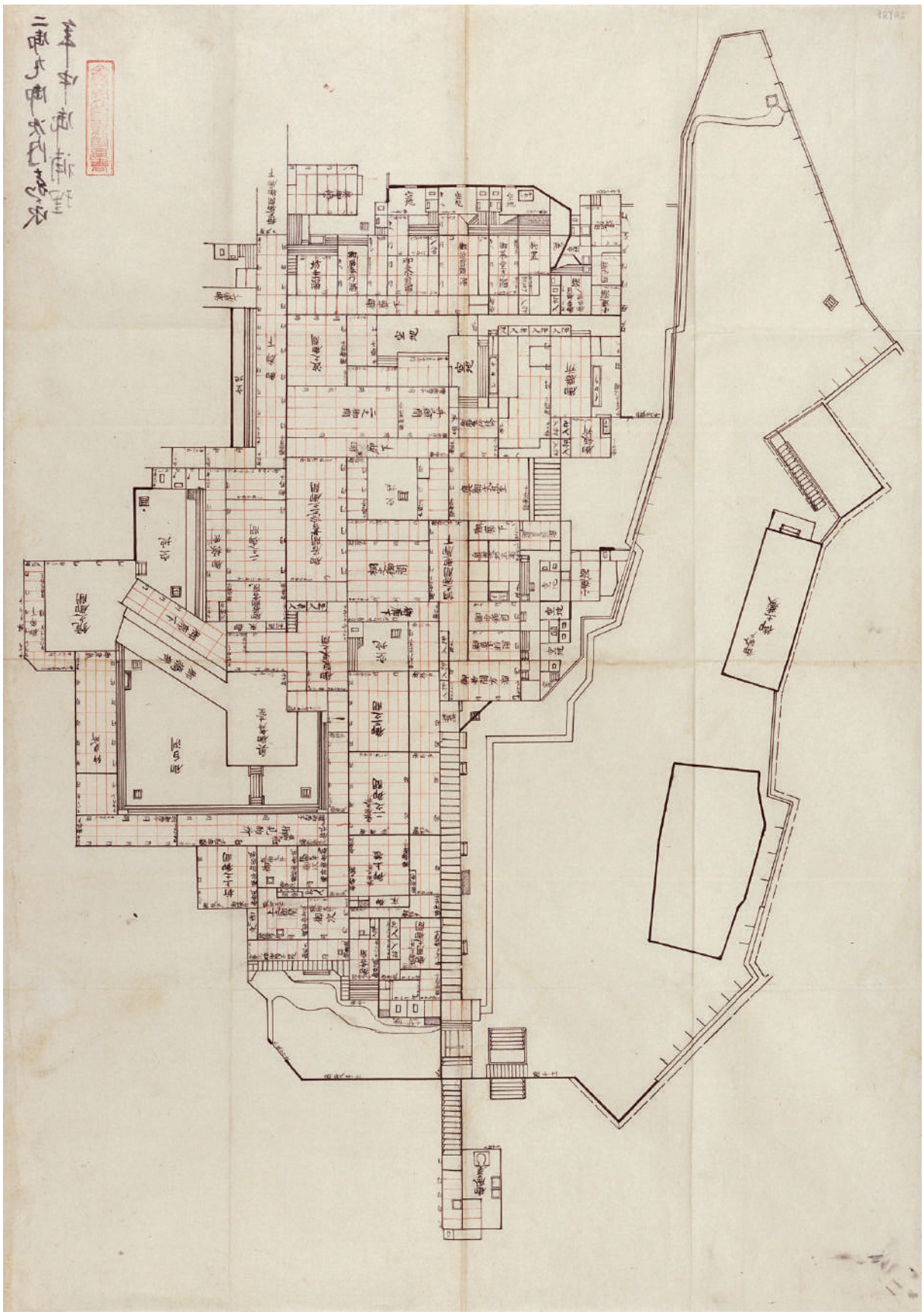
4 期図

68　二ノ丸御殿図

青磯文庫

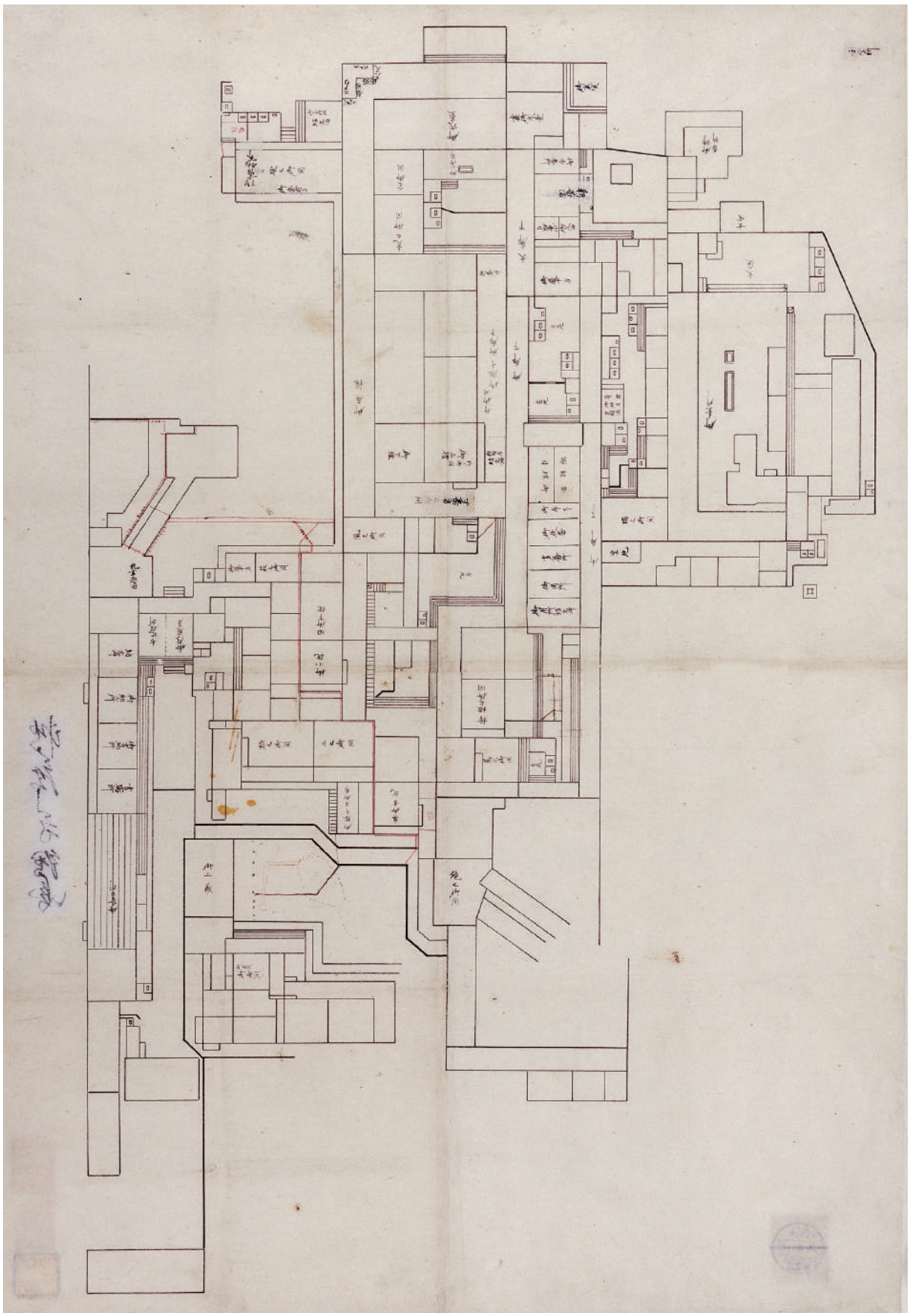
69

金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図

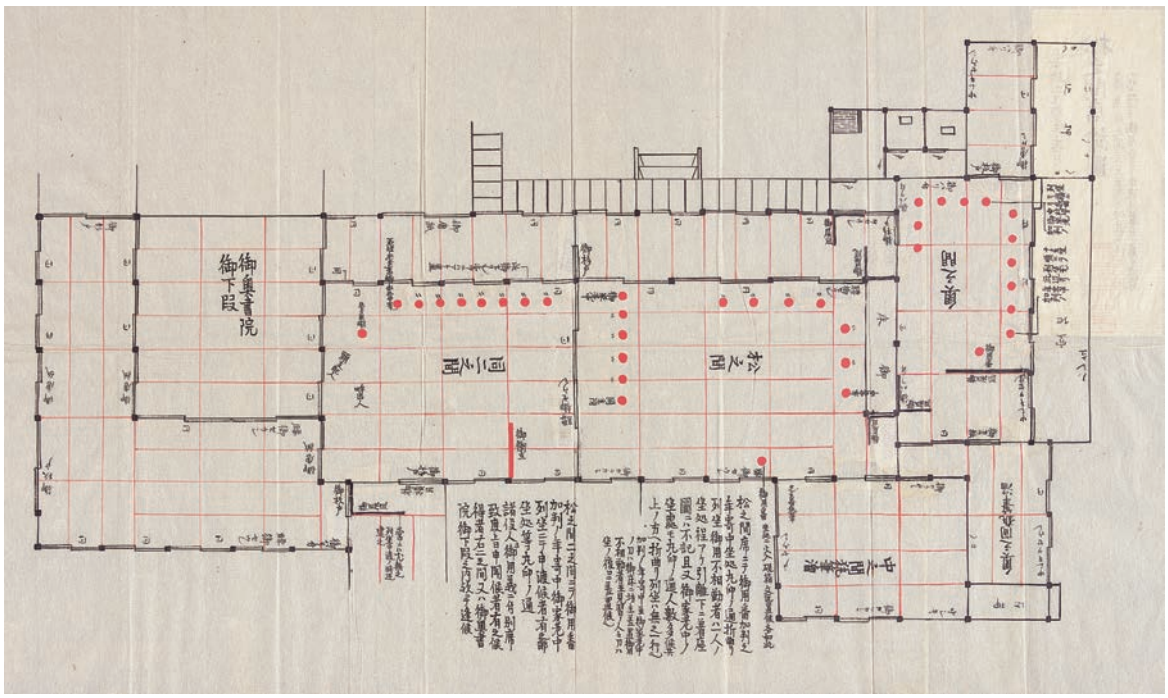


金沢市立玉川図書館　清水文庫（56×80cm）

70　金沢城二之丸転席方絵図

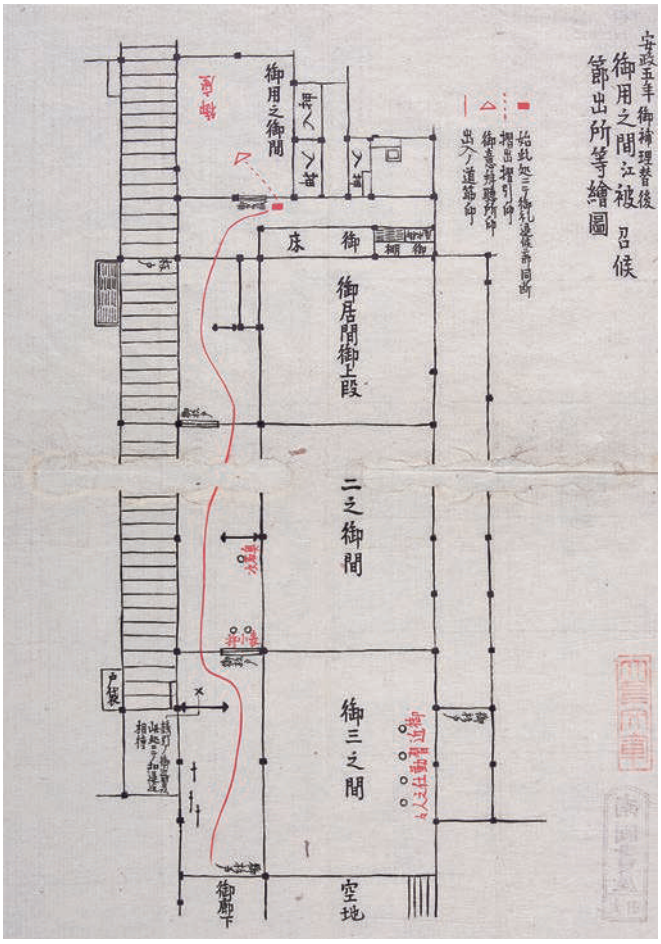


金沢市立玉川図書館　加越能文庫（55×78㎝）



71 用番方御絵図⑩松之間席絵図

金沢市立玉川図書館　大友文庫（28×49cm）



72 用番方御絵図⑮御用之間江被召候節出所等絵図

金沢市立玉川図書館　大友文庫（30×21cm）

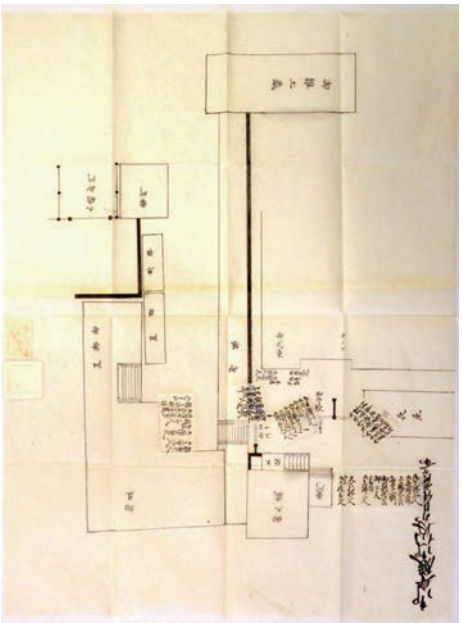
5期図

73　金沢城殿中図

（公財）前田育徳会（77×55㎝）

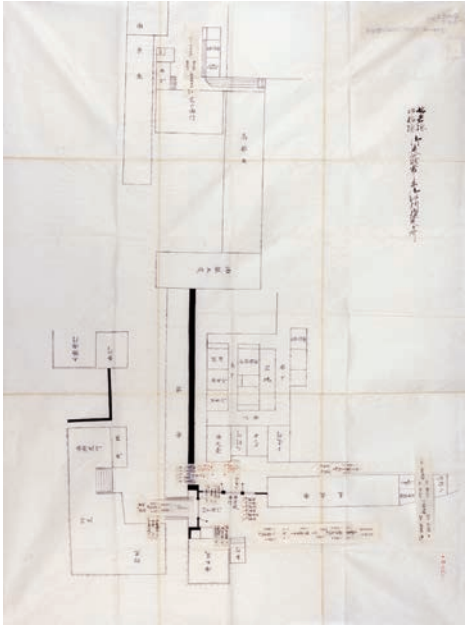
74 姫君様御着輿之節御供落シ絵図（御守殿御門内外御供落シ個所）

金沢市立玉川図書館　加越能文庫（48×36㎝）



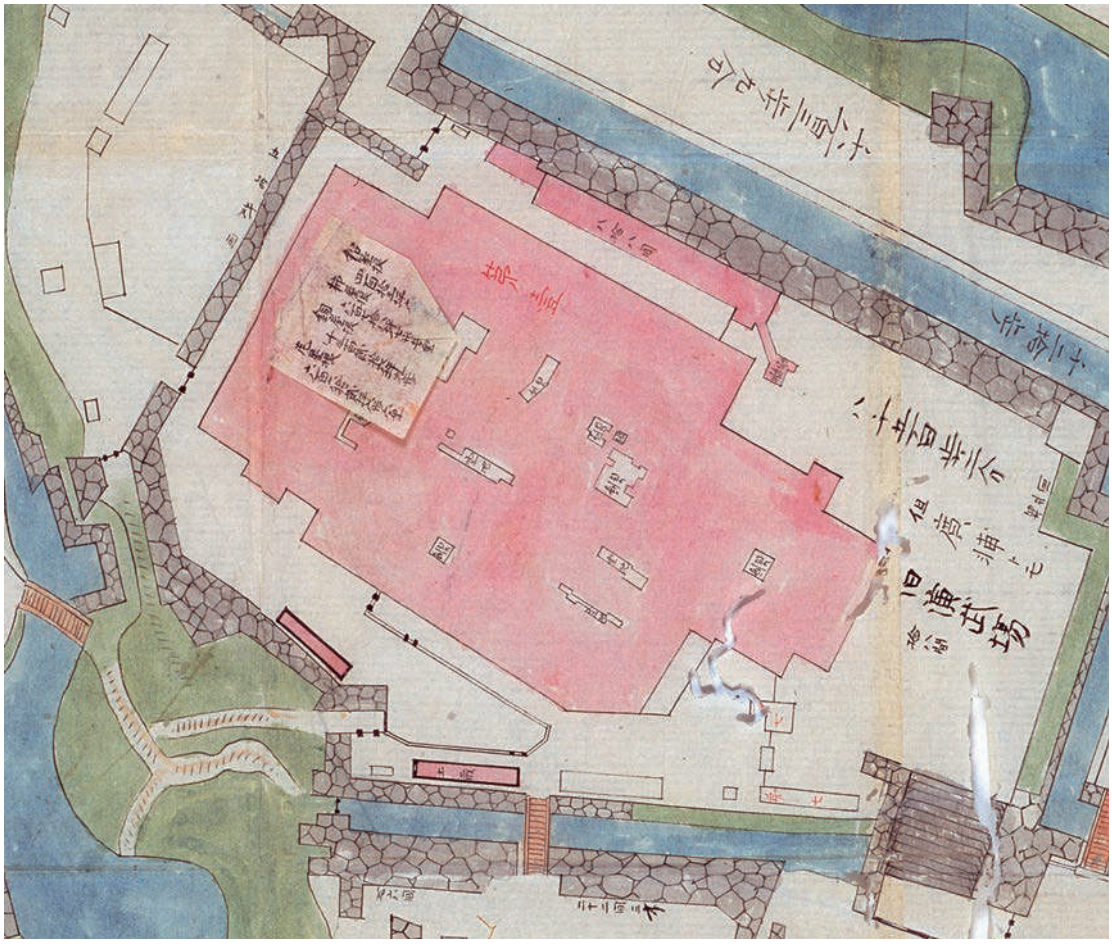
75 金沢城二之丸御守殿御供建方絵図（姫君様・初姫様御建込非常之節御立退御行列御供建方絵図）

金沢市立玉川図書館　加越能文庫（108×79㎝）

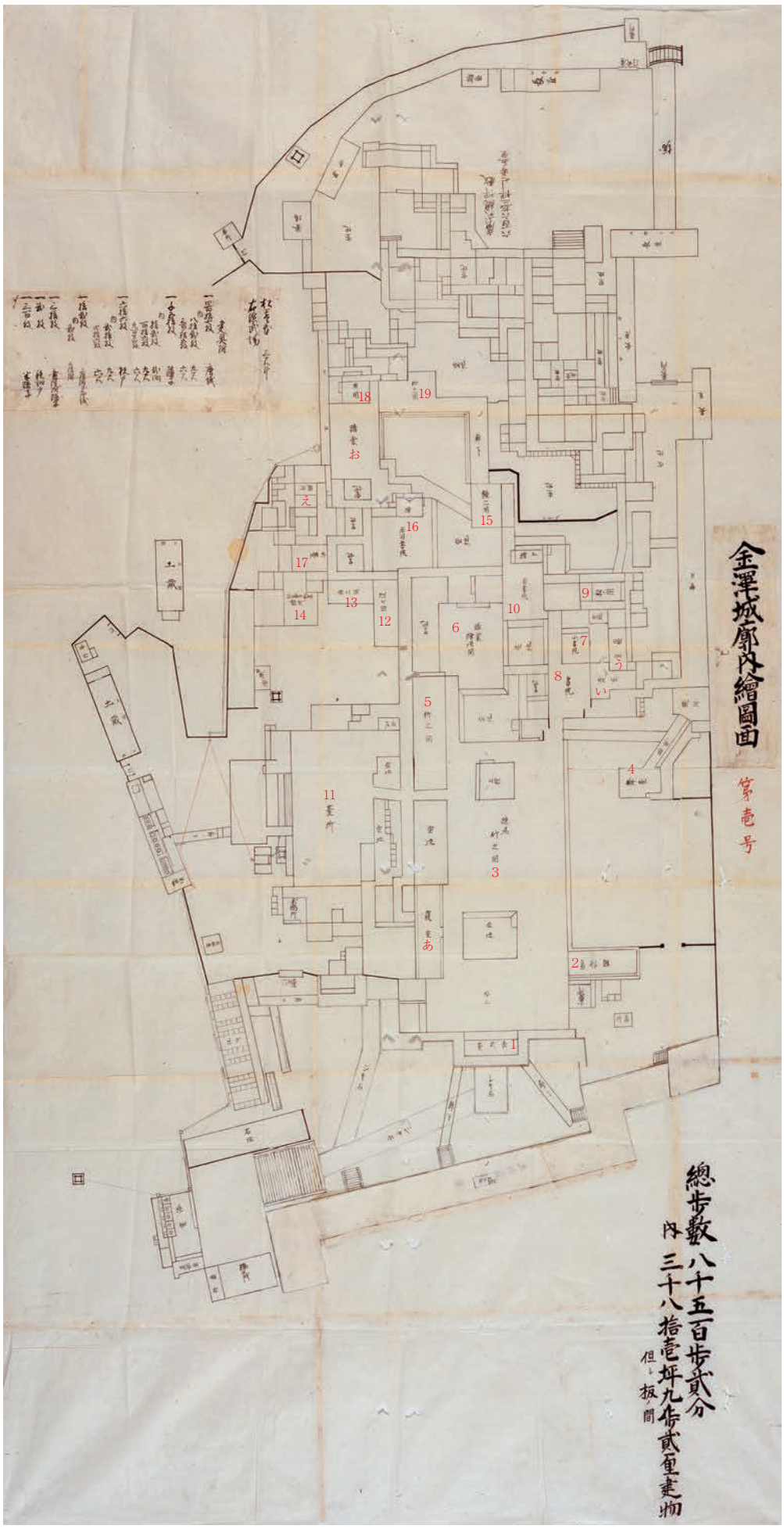


76 金沢旧城廓総図（部分）

石川県教育委員会（68×78㎝）



77　金沢城廓内絵図面



絵図に記した1～19、あ～おの記号については、解題82頁表2を参照。

石川県教育委員会（140×77cm）

解題

石野友康　木越隆三

一　金沢城二ノ丸御殿の変遷

石野友康

(1) 二ノ丸御殿の創設

金沢城のほぼ中央部に位置し、加賀藩政の中枢を占めたのが二ノ丸御殿である。二ノ丸御殿の嚆矢は、寛永八年（一六三一）の大火後の城郭再興時に遡る。藩祖前田利家の入国以来、本丸にあった御殿は数度焼失し、その都度再建された。三代藩主利常は、水廻りの悪い本丸にあった御殿を二ノ丸に移した。

草創期の二ノ丸御殿の景観については、良質の史料が少なく、構造等不明なところが多い。十七世紀後半の景観を示すとされる「金沢城二之丸座舗之図」（金沢市立玉川図書館）より寛永創建時の二ノ丸御殿を推測するほかない。

この絵図にみる景観は、藩主の生活空間たる御居間廻と女性たちの生活の場である広式（奥向）が分離した構造になっているほか数寄屋屋敷には建物が未だみられず、のちの裏口門を切手門としているなど、十八世紀以降の御殿とは異なった形状を示していた。

寛永十六年、利常は家督を長男光高に譲り加賀小松城に隠居した。光高は江戸藩邸での生活を続け、好学の藩主として将来を嘱望されたが、正保二年（一六四五）三十一歳で急逝した。光高の後継には嫡男犬千代（のちの前田綱紀）が就き五代藩主となったが、三歳と幼少であったため祖父利常が後見として藩政を差配した。

利常隠居後の金沢城は専ら重臣たちが詰める城で、二ノ丸御殿は政庁としての機能を失いつつあった。他藩からは小松城が藩政の中心とみられていたようで、明暦元年（一六五五）に再燃した白山争論の際には、福井藩からのクレームはまず小松城にもたらされている。光高が早世したことにより、藩主在府の状態が正保二年から万治三年（一六六〇）まで続いた。金沢城が再び藩政の中心となるのは寛文元年（一六六一）、綱紀が藩主として初入国を果たして以降のことであった。

(2) 前田綱紀の二ノ丸御殿整備

二ノ丸御殿は、五代藩主綱紀の時代に本格的に改修の手が加えられ、徳川御三家に次ぐ家格であると自負する前田家の御殿として整備された。

江戸に生まれ、江戸で育った綱紀は、寛文元年、十九歳の時に初めて領国加賀の地を踏んだ。重臣との初対面の際には並み居る重臣に圧倒されるなど藩政の課題を自ら感じ取り、藩主の権威を高めるため、改めて藩組織づくりを進めた。城の整備は権威を内外に示すためにも不可欠であり、早い時期に普請に着手する必要があった。

初入国をひかえた万治三年、二ノ丸御殿の普請・作事を行っていることが確認できたが（金沢市立玉川図書館加越能文庫「御横目書付留帳」）、寛文元年四月頃までには完成をみた（加越能文庫「菅君雑録」）。翌寛文二年には唐門造営のため栃材の準備を命じ（『改作所旧記』）、寛文四年に江戸より金沢に戻った穴生後藤勘左衛門は「御城中御石垣御用」をつとめたという（加越能文庫　後藤平左衛門「先祖由緒并一類附帳」）。勘左衛門の携わった仕事が寛文五年正月の土橋門石垣修理（加越能文庫「菅君雑録」）のことをさすのか定かではないが、寛文期に御殿周辺の整備も進められていたことを伺わせる。その後、奥小将を勤めた藩士大野木（葛巻）克明の記録によれば、貞享三年（一六八六）、元禄七年から翌八年（一六九四～九五）、元禄九年から十年にかけて都合銀一五〇〇貫の費用をかけた二ノ丸御殿の拡張工事を行っている（加越能文庫「元禄雑記」）。この普請によって御居間廻と広式部分がつながるようになり、数寄屋屋敷には女中たちの生活空間が増築された。これらの普請では、とくに元禄九年六月に着手された普請は規模が大きいものであったらしく、八月江戸より戻った綱紀は二ノ丸御殿ではなく蓮池御殿に入り、ここで政

務をとった。普請が終り、綱紀が二ノ丸御殿に移徙したのは翌十年六月のことであった。

(3) 江戸中期の金沢城

綱紀に続く六代吉徳の時代の二ノ丸御殿については、享保十一年から十三年（一七二六～二八）頃にかけて御居間廻の普請が行われていた（加越能文庫「中川長定覚書」）。どれほどの規模であったのかは定かではないが、屋根の工事が行われているから部屋の模様替え程度ではなかった。これは、家督を相続して間もないころであることを勘案すると、代替わりによる普請とも考えられる。吉徳から七代宗辰への代替わりの際にも御居間廻の普請が確認できる（「遠田日記」）。

また、この代替わりの普請とは別に、御殿普請があったようで、元文四年（一七三九）三月には御大工山本久兵衛を普請主附とし、「二御丸　御居間・御広式・御居間廻　御住居替」の普請が行われ、同年八月に完成したという（山本啓「先祖由緒并一類附帳」）。

しかし、六代吉徳以降、七代宗辰、八代重熙、九代重靖と早世する藩主が続き、代替わりの普請を含め、日常的に城の整備に専念する余裕はなかったと考えられる。

宝暦五年（一七五五）四月、幕府の巡見上使松平頼母・大河内善兵衛が金沢城を訪れた。二ノ丸御殿や蓮池御亭、本丸の三階櫓でも菓子にて歓待を受けているようである。城内の絵図が進献されており、No.11「金沢城図（写）二ノ御丸御家廻り并御広式」（金沢市立玉川図書館氏家文庫）やNo.12「二之丸御殿図」（金沢市立玉川図書館大友文庫）、No.13「二之丸間取図」（大友文庫）はこのときに藩で作成された絵図の写であると考えられる。なかには近代の写本もみられるが、これらの絵図によって宝暦五年段階の間取りが確認できる。

(4) 宝暦大火と復興作業

宝暦九年四月十日、折からの強い南風にあおられ、泉寺町にあった玉龍寺の塔頭舜昌寺から発した火災は犀川を越え、瞬く間に城下を焼き尽くし、ついに城にも火がかかり、玉泉院丸など一部を除いて城地の大半が灰燼に帰した（宝暦の大火）。

未曾有の大火災であり、被害状況は幕府へも届けられた。この火災では御殿も焼失し、早急な復旧作業が求められた。藩主重教は火災から半年経った閏七月金沢に到着し、金谷御殿にはいった。

二ノ丸御殿の復興作業については、火災から二年ほど経った宝暦十一年二月に木作初めを行い、四月に柱建、翌十二年に上棟式、そしてこの年に一応竣工、翌十三年四月に藩主重教を迎えた。ただし儀式典礼を行う表向のエリアなどは未完成のままであった。絵図からみると「竹の間」付近ができあがってはいないことが確認できる。ただし、その後も普請は続いており、安永三年（一七七四）に「御式台」・「実検の間」「虎の間」などが出来しているほか、天明七年（一七八七）には、表向以外でも手が加えられ「御居間」周辺、奥向きの「対面所」「御座敷」辺でも普請が進められた。しかし、文化五年（一八〇八）の火災まで御殿全体の再建は見送られた。

(5) 文化大火と再建事業

文化五年正月、二ノ丸御殿内部からの出火によって全焼した。文化の大火とよばれる火災である。斉広は当時在府中で無事であった。三月の帰国を待って、藩では造営方役所を設置し、造営奉行の采配のもと再建事業が進められた。火災から五ケ月経った六月二十八日に、木作り始めの儀式が行われ、ついで七月二十五日に柱建ての儀式が行われた。進捗は概ね順調で、翌六年四月には斉広が臨時の御座所である八家本多邸から二ノ丸に移った。しかし、この段階では表向の表式台・竹ノ間等は未だ完成をみて

おらず、翌七年になって全面的に竣工し、造営方役所も閉鎖された。

この文化の造営事業については、造営奉行の一人高畠厚定の職務日誌「御造営方日並記」（加越能文庫）が詳しい内容を持っている。

＊「御造営方日並記」は文化六年正月から同七年七月にかけての高畠厚定の職務日誌で、普請の進捗がよくわかる好史料である。御殿の仕様の一端も知れることから、金沢城調査研究所（当時は金沢城研究調査室）において金沢城史料叢書1、2として、全面的に翻刻した。参照されたい。

この文化の造営事業でかかった費用は銀六千九百貫匁程であったが、そのうち実に八十四パーセントが藩士や庶民などから事実上の献金によってまかなわれた。そのためか御居間廻や奥向ばかりでなく表向きの座敷も半世紀ぶりに完成できた。

（6）江戸後期の二ノ丸御殿

文化の造営以降の御殿図については、六十をこえる多数の絵図が残っており、絵図編年が課題となっている。そこでここでは参考になる重要な出来事を述べていきたい。

文化の広式二階普請

文化の造営事業が終了したのは前述のように文化七年七月のことであったが、その後も普請自体は継続されていたようである。その一つが広式や部屋方の二階部分の増築であった。文化八年六月に御大工篠田弥三兵衛は「二　御丸広式・部屋方二階建揚等補理主附」となっており（篠田義十郎「先祖由緒并一類附帳」）このときの普請に携わっていたが、№43「御広式向御二階之分絵図」（加越能文庫）によれば、「御広式之分、□（文）化十酉年出来被仰付大脇六郎左衛門方図り出ス　同十一戌孟夏十二日写之」との記載があり、文化十年あたりにも広式二階部分の増築工事の完成が目指されたようである。具体的な普請の推移についての詳細はわからないが、文化八年から十年ごろにかけて段階をふんで広式二階部分の普請が進められていた状況が読み取れるのではないだろうか。なお、「御広式向御二階之分絵図」に記述される大脇六郎左衛門は文化七年に二ノ丸広式御用・金谷広式御用主附を勤め、文化十年に物頭並となった人物である（「諸頭系譜」）。

また、篠田弥三兵衛は、文化九年八月に「二　御丸奥御舞台・御見物所等御補理主附」にも命ぜられており、広式等二階の普請とほぼ同時期奥能舞台・見物所の普請も行われていたことを伺わせる（篠田義十郎「先祖由緒并一類附帳」）。この普請では御大工清水又十郎も携わっているが（金沢市立玉川図書館清水文庫「清水又十郎相続以来二ノ丸造営其他主付御用之時拝領目録」）文化十年に白銀を拝領しているからこの時期までには普請が終了していたものと考えられる。

側室栄操院の子女と二ノ丸御殿

ついで文政元年（一八一八）には、御寝所・御居間の「御住居替」が行われている（前掲清水文庫「清水又十郎相続以来二ノ丸造営其他主付御用之時拝領目録」）。藩主の生活エリアの普請である。「御風呂屋」が数寄屋屋敷へ降りたのはこのときのことと想定することも可能かもしれない。

さて、文化八年七月、待望の男子として二ノ丸広式で誕生した藩主斉広の子勝千代（のちの十三代藩主斉泰）は、文政三年には十歳になり、斉広と相殿とすることにして御居間書院に居を移した（加越能文庫「官私随筆」）。御居間書院は、藩主と重臣たちが集まり政策や人事などを議した場所である。御大工清水篤卿（又十郎）が記した№52「二之丸御殿御補修絵図」（清水文庫）はこのとき作成されたものであった。「補裡」とあり、勝千代の住まいとしてふさわしいものとして造り替えられたものと解される。

一方、今一度同じ頃の広式に目を移すと、広式には斉泰同母の妹寛姫の居間が新築された。寛姫は文化十二年六月誕生し、文政十年、小倉藩主小笠原忠徴に嫁すため真龍院（斉広正室鷹司氏）の養女となり、同十二年金沢を

発輿している。前掲「二之丸御殿御補修絵図」に「寛姫御居間」との文字が見えるから、幼少期にはすでにこの「御居間」に居たのであろうか。この「寛姫御居間」をめぐっては、文化六年の絵図などと見比べると、普請を行った形跡がみられ（前掲「清水又十郎相続以来二ノ丸造営其他主付御用之時拝領目録」参照）、「文化十二年四月二之　御丸御広式御対面所御建継被仰付」というから部屋自体は文化十二年頃に竣工したものと考えられる。

なお、寛姫発輿後もこの居間は残されたようで、絵図をみるとこのあたりの間取りに変化はない。

文政五年に斉広は家督を斉泰に譲り、現在の兼六園の地に竹沢御殿を築いて移った。斉広はこの竹沢御殿でいわゆる教諭政治を展開するが、二年後の文政七年に死去した。斉広が没するや側室で竹沢御殿に居た斉泰の生母栄操院が竹沢御殿をはなれ、二ノ丸の広式に移った（「本藩歴譜」『金沢市史』資料編3所収）。栄操院は、藩士小野木助三の娘で、十二代斉広の側室となり、斉泰を含め三男六女を儲けている。

天保九年（一八三八）、江戸の藩邸に居た真龍院が金沢に来ることになった。金沢における彼女の御座所については、二ノ丸の広式が手狭であるとして金谷広式の「補理」を行い居所と定めた（「成瀬正敦日記」天保八年四月二十五日条）。金谷出丸に居所を設けることになったものの（金谷御殿、のち弘化二年（一八四五）に松の御殿と改称）、真龍院が本来二ノ丸広式に入るべき存在であることを物語っている。

弘化・嘉永・安政期の二ノ丸御殿と藩主家

弘化頃になると、二ノ丸御殿の儀式典礼や藩士の詰所としての表向のエリアが藩主の子息の部屋として使われた徴証がみられる。弘化四年二月、斉泰の子基五郎・豊之丞が松の間に移っているのである。基五郎と豊之丞は側室久世氏（馨袖院）を母にもつ同母の兄弟で、基五郎は天保四年、豊之丞は天保六年にそれぞれ二ノ丸の広式で誕生している。年寄奥村栄通の日記「官事拙筆」（『加賀藩史料』第十五編）によれば松の間は二人が入ることを想定して普請をおこなっている。このとき基五郎は十五歳で額に角入の儀式を行っている。

すでに金谷出丸においては真龍院の御殿（弘化二年に松の御殿と改称）に加え、世子慶寧（母は斉泰正室溶姫）の御殿（金谷御殿）が相殿として設けられており、金谷に住居しにくいという事情があったのではないか。

続く嘉永期には、広式や御居間廻りにかけて普請が進められた。嘉永三年御大工山上全之助が「二　御丸御広式御奥廻り御補理替御用主附」を命ぜられたという（山上久男「先祖由緒并一類附帳」）から、このころ広式等の普請が行われていたらしいことを伺わせる。

二ノ丸広式御用などを勤めた赤井伝右衛門の覚書によれば、嘉永六年（一八五三）七月、二ノ丸広式奥御居間・部屋方の普請が進められており、御寝所前に新庭をつくったといい、泉水は「城内第一等の清水也」という（「見聞袋群斗記草稿」）。

この時期に御広式の普請が進められたのは真龍院のためのものであったのか、翌安政元年（一八五四）六月に金谷出丸に存した松の御殿よりここに移った。

安政二年九月になると、斉泰の子で藩の重臣前田図書家（七〇〇〇石）に養子に遣わされていた桃之助が養家より戻り、二ノ丸蔦の間に移ったことが知られる。蔦の間は「国格類聚」に「若年寄中・御家老御用取捌」などとあって家老や若年寄が政務を行う部屋であった。桃之助はその後蔦の間を出て大聖寺藩主家を継ぎ最後の藩主利鬯となった。

金沢城の「御守殿」

幕末期の文久三年になると、十一代将軍徳川家斉の娘で十三代斉泰の正室である溶姫が金沢城の広式の主になった。幕末の政情不安を背景に、幕府の参勤交代の制度緩和政策のもと領国への下向が決定された。溶姫の

下向に際し金沢城二ノ丸御殿の住居を「御守殿」と称することになった。五十人以上の女性たち、幕臣・藩士を従えての道中であった。江戸の本郷邸と異なり金沢の「御守殿」では松の間付近・御居間廻の斉泰の部屋を溶姫や御附の女性たちの生活空間として取り込んだ。それまで二ノ丸の広式に住まいしていた真龍院は二ノ丸広式から現在の兼六園の地に巽新殿を造営しここに移った。溶姫の下向は金沢城の歴史にとって大きな出来事であり、この時期の御殿全域図は残されておらず、部屋方・広式など一部を描くものしかない。新たな絵図が出てくるのを俟ちたい。

(7) 明治維新前後の金沢城

慶応二年（一八六六）慶寧が藩主となると、職制をはじめ急激な諸改革が断行された。城をめぐる環境も大きく変わり、二ノ丸御殿は藩主の居住・執務空間から軍事の中心施設へと性格が変化する。明治元年（一八六八）、二ノ丸御殿では会議所が設置されている。

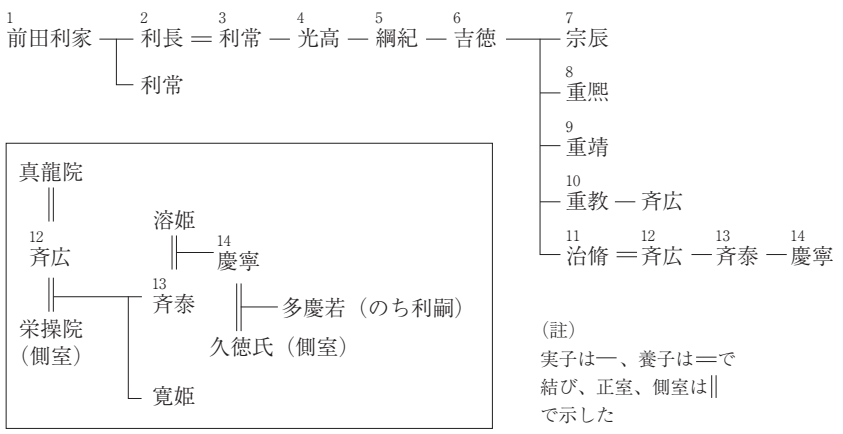
翌明治二年三月に慶寧が版（土地）と籍（人民）を新政府に返還することを申し出（版籍奉還）、二ノ丸御殿中で年寄本多政均が暗殺されるというショッキングな事件が起こったのはこの年の八月の出来事であった。この出来事は白昼起った事件だけに動揺は隠しきれなかった。急激な社会変革にともなう矛盾のあらわれとみることができるであろう。その年の十月、藩知事慶寧は二ノ丸を出て年寄本多資松（政均の子）邸に移り（広坂御住居）、かわって城跡には藩兵の屯所が置かれるようになった。不要な建物の取り壊しも始まるなど、明治三年頃から城内の景観に変化が訪れるようになった。旧二ノ丸御殿でも、明治二年十一月にもとの竹の間を兵隊屯所とするための修繕が開始される（金沢市立玉川図書館清水文庫「雑留帳」）など旧態を残しながらも金沢藩の手によって改変され、二ノ丸には士官養成と兵卒訓練を行う場としての学塾兵舎が設置された。それらの変化とともに城地の所管も刻々と変わった。明治四年には城地が兵部省管轄下、翌五年には陸軍省の所管となった。最近、明治五年の絵図を得ることができたが（三節参照のこと）、陸軍省管掌下のもと作成されたものと考えられる。

軍事拠点としての性格を強めてきた金沢城であるが、明治初年ごろの二ノ丸御殿の様子を書き留めたものは少ない。明治三年十一月に御殿内を見分した旧藩士成瀬正居によれば、旧藩主の居住空間である御居間廻を除くと老朽化している状況であったという（金沢大学附属図書館「成瀬正居日記」13）。老朽化している従来の建物を改装しながら利用してきた様子がわかる。

廃藩置県にともない前田家が東京移住を果たすと、城内の改修は国家事業として加速された。徴兵令による国民兵役の義務化を背景に、明治六年金沢に名古屋鎮台分営営所が設置され、名古屋鎮台より遠藤政敏中尉が赴任し二ノ丸御殿菊の間を執務室とした。また、名古屋から軍医別所元収が赴任すると、広式や部屋方を病室に改めたという（『稿本金沢市史』市街編第四）。

明治八年には歩兵第七連隊が城内を占めるようになった。少佐津田正芳

参考〔加賀藩主前田家略系図〕



が菊の間を執務室とし、翌九年には、旧御殿内の松の間・竹の間・柳の間・膳所・台所を三個中隊の兵舎に改造し五十間長屋に大隊本部・一個中隊の兵舎が置かれた（『稿本金沢市史』市街編第四）。

明治十四年一月、旧御殿は内部からの失火によって焼失し、名実ともにその役割を終えた。

二　二ノ丸御殿図　個別解題

石野友康・木越隆三

（1）前期（寛文～宝暦8年）

ここでは二ノ丸御殿図のうち十七世紀後半から宝暦五年（一七五五）に幕府の巡見上使が来訪したときに作成された絵図までを「前期二ノ丸御殿図」として収載する。

この時期の御殿絵図としては、五代藩主前田綱紀期の貞享・元禄期と、宝暦五年、幕府の巡見上使が訪れた際に作成されたものが総数13点を数える。このうち二ノ丸御殿の全域を描いたものは4点、部分を描いたもの7点のほかに、金沢城全体図の中から二ノ丸御殿部分を抽出したもの2点を加え、本書では別刷2点を含む13点を収載する。

No.1「金沢城二之丸座舗之図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）（別刷）

写図ではあるが、金沢城二ノ丸御殿として最も古く十七世紀後半頃の景観を描く。「二ノ丸座敷　元禄年中マテノ御絵図写」・「二御丸惣屋形絵図但御居間廻□御小書院等建替り不申以前之絵図ニ御座候」という表題が付されている。数寄屋屋敷に建物がみられないことから、元禄九年に御殿を拡張する以前の様子を描いている。黒書院・白書院という古い呼称を用いており、楽屋多門北側の出しが三つあるところに特徴がある。また表向き・御居間廻りと御広式が分離した建物構造になっており、寛永年間の御殿草創期の状況を彷彿させる間取りとなっている。なお、奥敷台からあがった付近は二階建てだったようで「二かい物置」と書かれている。

No.2「金沢城座敷之図二之丸」（石川県立歴史博物館　大鋸コレクション）

十七世紀から十八世紀初頭にかけての景観で、二ノ丸御殿全体を描く。「御新宅」＝増築箇所を青色で示しており、朱引きによって「道筋」を表示する。この朱引き導線が何を示すかは不明で、今後の研究が待たれる。「金沢城二之丸座舗之図」では分離されていた表向きと居間廻り、御居間廻りと広式がつながるようになり、数寄屋丸の部屋方も確認できる。二ノ丸御殿は貞享から元禄期にかけて段階的に整備されていくが（『元禄雑記』）、この時期に二ノ丸御殿の間取りがほぼ固まった。

No.3「金沢城中惣絵図」（石川県立歴史博物館）

十八世紀前半、六代藩主吉徳時代の金沢城全域図の中に描かれた二ノ丸御殿図である。凡例によると「御家廻り御長屋諸役所等」「御櫓」「御土蔵」「二重塀　但シ墨引土蔵・掛塀共」「足軽番所」の五色に描き分けられている。

No.4「金沢城図」（横山隆昭氏）

十八世紀前半の金沢城全体を描く絵図（全域図）である。詳細はすでに『絵図でみる金沢城』で述べているので、それを参照されたい。

二ノ丸御殿部分に注目すると、「松の間」・「奥書院」という文字が見え、残存する絵図のなかでは「松の間」「奥書院」の初見となる。「松の間」は加賀八家とよばれた重臣（年寄）が詰める部屋であり、「奥書院」は藩主在国時に諸大夫の年寄が藩主に拝礼する部屋として知られている。

No.8絵図とそれほど御殿の形は変わっていないが、楽屋多門や数寄屋丸の部屋方で形状が異なっている。

No.5「金沢城図」（金沢市立玉川図書館　大友文庫）

前期の金沢城全体を描くが（全域図）、精度の高い絵図であり、建物や土居・塀など七種類の施設を六色で色分けしている。城内に引かれた辰巳用水の水路は青色で描いている。作事所で作成された藩用図で金谷御殿の形状などから十八世紀前半の姿を示していると考えられる。二ノ丸御殿については詳細な情報を持ち合せているわけではないが、この時期の形状を確認することができる。

No.6「金府城二ノ丸」（（公財）静嘉堂文庫）

加賀八家奥村家（嫡流）に大工として仕えた池上家伝来の二ノ丸御殿の部分図である。御居間先土蔵の形状等から宝暦大火以前の景観を描いているものと考えられる。一段低い部屋方の部分が描かれていない。「塀重門」の位置も異なっているが、これは誤記であろうか。御居間廻りから広式にかけて水路が描かれている。

No.7「二ノ御丸絵図」（金沢大学附属図書館）

御居間先土蔵の形状などから宝暦九年の大火以前の様相を描いているものと考えられる。「文化十三年子正月写之」とあることから、絵図自体の成立は文化十三年以前である。御居間の傍らに「鳥へや」とあり注目できる。

No.8「二ノ丸御殿図」（普森清美氏）

表向や御居間廻りのエリアを青色にし、奥向部分を緑色に色付けしている。前期金沢城の様相を示しており、数寄屋屋敷に建物がなく、「橋爪頬当御門」とするなど元禄期より古い時期の様相を示しながらも、その時期の絵図との間で齟齬があり、景観年代については検討を要する。五十間長屋を「鉛屋ね御長屋」、御居間先土蔵には「銅屋ね御土蔵」とするなど興味深い内容も含む。

No.9「金沢城二之丸御殿絵図」（金沢市立玉川図書館　清水文庫）

金沢城の全域図のうち、二ノ丸部分を拡大したものである。藩の御大工清水家に伝来した絵図である。「若年寄中席」「新番頭溜」などの貼紙がみえる。金谷出丸の文庫数から、宝暦五年（一七五五）頃の景観と推測できる。

No.10「金沢城御城中絵図（御家廻り）」（石川県立図書館）（別刷）

宝暦五年四月に金沢へ派遣された巡見上使に閲覧させる目的で作成された絵図の写で、二ノ丸御殿全域を描いた絵図。表向や御居間廻りの所々に貼紙があり、「若年寄中席」「御使番溜」などの記述がある。

No.11「金沢城図（写）二ノ御丸御家廻り并御広式」（金沢市立玉川図書館　氏家文庫）

城代の指示により作事所にて作成された二ノ丸御殿全域を描いた絵図と推定できる。提出日（宝暦五年二月十日）の記載がある。No.10と同じものであるが、No.7でみられる貼紙は本図では見当たらない。

No.12「二之丸御殿図」（金沢市立玉川図書館　大友文庫）

No.13「二之丸間取図」（金沢市立玉川図書館　大友文庫）

No.12、No.13とも二ノ丸御殿の全体を描く。寛政四年（一七九二）の図で、間取りなどから宝暦五年、幕府巡見上使が金沢に訪れるのに際し作成されたものと考えられる。ただし、楽屋多門西側の「御釜屋」あたりの書き方が若干異なっている。

（2）中期（宝暦9年～文化5年）

二ノ丸御殿は宝暦九年の大火で焼失し再建事業が進められた。この時期

の景観を示す絵図は二ノ丸御殿全体を描いたもの四点のみが残されており、本書では、四点（別刷一点を含む）すべて収載する。これらの絵図によって宝暦大火後二ノ丸御殿は順次普請が進められていったものの、表御殿の中核をなす竹の間等大広間の完成をみなかった様子を視覚的に確認することができる。

No.14「宝暦年中二之御丸御殿地指図」（金沢市立玉川図書館　大友文庫）

再建がはじまった頃の二ノ丸御殿全域を描いた絵図である。屋根図の重ね書きや排水路等の書き込みがあり「やね形　水はき樋砂溜」の文字がみえる。造営事業を進めるため御大工などに指示するために作成された絵図と考えられる。

No.15「文化焼失以前二の丸之図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）（別刷）

二ノ丸御殿全域を描いている。安永三年（一七七四）や天明七年（一七八七）に建てられた旨を貼紙で示した箇所があり、宝暦大火後の再建が段階を踏んで進んでいったことを示している。また、竹の間など表向の一部は未だ見られず、再建されていなかったことを示している。

No.16「二之丸御殿幷御広式御絵図」（金沢市立玉川図書館　清水文庫）

加賀藩御大工清水家旧蔵の二ノ丸御殿全域図である。「寛政五歳四月改之」との注記から宝暦大火以降寛政五年までに再建された姿を示している。貼紙に「御居間三間四方二重板敷アイに糠入」「御用之御間二間半ニ三間右同断」などの記述があって「寛政五年ニ出来被仰付候事」と見える。御居間書院三ノ間脇の部屋には「佐渡守様御溜」との貼紙があり、十代藩主重教の子斉敬（寛政七年に十八歳で没）の部屋があり、これとも年代的に齟齬はない。寛政五年段階は表向の竹の間・表式台・表能舞台が再建されていないことが確認できる。150分の1の縮尺図。

No.17「金沢表二之御丸御殿並御広式御絵図」（村松家）

二ノ丸御殿全域を描いた図で、基本はNo.16と同じ絵図で150分の1の縮尺図。No.16図に貼紙で見える「御居間三間四方二重板敷アイに糠入」「御用之御間二間半ニ三間右同断」などの記述が本図にもある。ただしNo.16にみえる「佐渡守様御溜」の文字は見えない。

（3）後期（文化6年～明治5年）

文化五年（一八〇八）正月の二ノ丸火災で全焼した二ノ丸御殿が文化五～七年にかけ再建される過程で、普請・作事の現況図・計画図と推定されるものが作成されており、再建なった文化七・八年以後の姿を描く二ノ丸御殿図も数多く残る。ここでは、この文化五年火災のあと明治初期までの景観を描く二ノ丸御殿図のうち、変化や特徴が顕著なものを中心に解説する。というのは、近世後期の二ノ丸御殿図の半数、約三〇点は文化再建直後の姿もしくは再建途中に描かれた二ノ丸御殿図であり、そのすべてについて説明することは煩雑であり、略したからである。また景観年次の特定すら難しい御殿部分図も相当数含まれるので、解説は限定的にせざるを得なかった。

文化再建後の二ノ丸御殿図は、部分図も含めれば六〇点を超えるが、景観年代の特定が難しい部分図については、できるだけ関連のある絵図に近接させ配列し、景観年代についての言及を避けたものもある。御殿全体を描く絵図の配列は、景観年代に則し五つの時期ごとに区分し、各時期の全体図と関連のある部分図を各時期に分け、御殿の変遷過程がたどれるよう配慮した。

文化六年以後、最後の藩主十四代前田慶寧が金沢城から住居を移した明

治二年（一八六九）十月までの約六〇年間を、二ノ丸御殿絵図に描かれた景観変化をもとに区分すると左の五時期に区分できるであろう。

＊1期図：文化六年～文化末年

①御居間西端の風呂場が風呂屋階段脇上に置かれ、②広式と松の間との間に土蔵を配置する点が、御殿全体を描く1期図の重要な特徴である（№18～37）。

＊2期図：文政元年（一八一八）～弘化四年修理以前

1期図の特徴のうち②に変化はないが、①の御居間西端の風呂場位置が部屋方（前期の数寄屋丸）へ移設されたことが、大きな特徴である。その典型は石川県立歴史博物館図（№48）だが、天保元年（一八三〇）の周知の「御城中壱分碁絵図」（横山図。№55）、前田育徳会の天保四～九年の四二枚組図（100分1図。№56～59別刷図）なども、ここに含まれる。

＊3期図：弘化四年（一八四七）～嘉永六年（一八五三）七月修理以前

1期図の特徴のうち②でも変化があり、1期図の特徴①・②ともに変化した。②での変化というのは、広式と松の間との間にあった単立の土蔵が消え、直線廊下で広式と松の間が結ばれるようになった点である。この変化は弘化四年に藩主斉泰の子息豊之丞が二ノ丸御殿に移住したことに伴う改修の影響と推定される。前田育徳会の「御城分間御絵図」（№64）や石川県立図書館・三井文庫の「三歩碁図」（№65～67）がこの時期を代表する御殿全体図である。

＊4期図：嘉永六年～文久三年（一八六三）溶姫御殿以前

1～3期図と異なり居間廻りのうち御居間南縁廊下が直線になった点が特徴で、3期図に上記の改修が加えられたものを4期図とした。居間廻り御居間南縁廊下を直線に改修する工事は嘉永六年七月になされた可能性がたかく、その際の改修部分図（№69）も残っていた。この時期の全体図は青硯文庫所蔵図一点（№68）のみである。

＊5期図：文久三年溶姫御殿造築以後～明治五年

文久三年五月に江戸藩邸の御守殿に居住していた十三代藩主斉泰正室溶姫（十一代将軍息女）が金沢城二ノ丸御殿に移住し、それに伴い広式附近で大規模な建物改修があり、松の間周辺も広式空間に取り込まれた。この溶姫移住に伴う御殿改築の規模は相当大きく、二ノ丸御殿の表向きへも影響が波及した点で、文化以後の改変の中では最も大きな変容であったが[1]、残念ながら、そのことを示す図面はない。部分図として三点が知られるだけである。今回発見された明治五年図で多少なりとも5期図の面影を類推できるにしても、文久三年以後の改修たとえば、慶応二年（一八六六）四月に十四代藩主となった慶寧が移住したときの御居間廻り改修、明治二年十月の慶寧が二ノ丸御殿を立ち去った後の軍（兵部省）による改修などを経たのちの景観を描くので、単純に5期図を想定できるといいきれない面があることを断っておきたい。

この5期区分の画期とした弘化四年改修、嘉永六年七月修理、文久三年溶姫御殿造築については、一節でその背景や経緯などを説明したところである。これ以外にも、藩主の居間廻り・広式・部屋方で改修や増築があったはずであるが、確たる文献史料は乏しく、今後の成果にまちたい。

なお今般、新たに発見された明治五年の二ノ丸御殿図（金沢城廓内絵図面）については、5期図に分類し三節でより詳しく解説することにしたい。

文化六年以後の二ノ丸御殿図を、1期図～5期図に区分してみたが、伝来経緯、成立事情が全く分からない絵図も多く、現存する絵図景観の限りで景観年代を推理し、上記の五期にいちおうあてはめてみた試論であることを断っておきたい。御殿絵図の作成年次・製作事情が皆目分からないまま、描かれた景観の違いのみを手掛かりに前後関係を判定するのは、想像以上に難しい作業であった。景観・外形の相違が、写したときのミスや齟齬に起因するのか、描いた対象に改変があったためなのか、また実際に生じていた変化の記載を略した場合や、一枚の絵図に複数の異なる時期の景観を書き込んだ絵図もあるので、上記の5期区分のなかに矛盾なく配列す

るのは簡単ではない。また説明も不十分になった所もあろう。

5期に分類配列するにあたり、今回掲載した図版の景観はある一定時期の景観を描くという素朴な仮説の上で分類したものである。その意味で、今後さらに精緻な考証を行うときの作業仮説、すなわち試論の域を出るものではない。

一枚の絵図のなかに同時代に共存しえない景観を描く絵図もあり、一枚の絵図に何枚もの修正貼紙があり、二階部分に張り掛けを施したものもあったが、それらをすべて検証するには、写真画像データによる比較だけでは不備があり、原本を詳細に検証する必要があるが、それらはすべて今後の課題となる。

したがって、ここで示した5期分類は、金沢城二ノ丸御殿図の変遷を究明する基礎研究の出発点にすぎない。原本精査を進めることで検討が深化することを期待したい。

■1期図

No.18「二の丸御殿絵図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）

文化五年六月から開始された二ノ丸御殿再建工事が、ある程度進んだ文化六年四月二十六日に、十二代藩主斉広は新しい御殿に移住したが、本図端裏に「文化六己巳年四月廿六日御移徙之二御丸御殿絵図」と記すので、その際に作成された絵図とみてよい。つまり文化六年御殿再建途中の平面図であり、部屋方や表能舞台は略されている。御広式、御居間廻りの再建が進展していたようで、本図でもその部分の文字記載が詳しく、竹の間など表御殿や松の間附近は文字記載が少なく、再建工事は外観はおおむね仕上がってきたが、内部の建築装飾や内装などは未完であったようにみえる。文化十四年に死去する慧照院（十代重教側室）の御部屋が画かれる点も注意しておきたい。前田貞醇家旧蔵。

No.19「文化六己巳御造営之御殿図」（石川県立歴史博物館　篠原一宏家文書）

これも文化六年四月二十六日の藩主斉広移徙の頃を描いた御殿平面図である。絵図端に書かれた標題の両脇に「文化五年五月廿九日初而木作立十二ケ月ニ而出来」「御居間先御土蔵ハ正月ヨリ取掛」あるいは「四月廿六日御移徙被遊、但シ御小書院・竹之御間・大式台ハ未出来無之」と記すので、本図の成立年次、景観年代の根拠となる。前号と極めて近似し、部屋方・表能舞台が略される。篠原一宏家旧蔵。

No.20「金沢城二之丸御殿図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）（別刷）

絵図端に「己巳十一月写之御作事奉行小堀左門より」と記されるので、これも文化六年の再建中の御殿図である。前二点と異なり数寄屋丸に展開する部屋方の再建状況と表能舞台の姿を継ぎ足した所が注目される。作事奉行小堀氏の所持する原図・余図を合成し作成したものと思われる。文化六年再建途中の全域図として代表的なものなので別刷図とした。前田貞醇家旧蔵。

No.21「金沢城二之丸図」（石川県立図書館）

文化六年再建以後の二ノ丸御殿全体を描く彩色平面図。作成事情や伝来は不明である。次頁の参考図版に付した破線は、文化六年再建直後、文化末年までの1期図の特徴といえる①風呂屋階段脇上に置かれた風呂場、②広式と松の間の間にある土蔵、の位置を示すためのものである。

No.22「金谷御殿間取図（金沢城二ノ丸御殿間取図）**」**（富山県立図書館）

所蔵機関では本図の名称を「金谷御殿間取図」とするが、描かれた姿は文化六年再建後の金沢城二ノ丸御殿の全域を描く彩色平面図であった。描写景観は前号に近い。

〔参考図版〕21　金沢城二之丸図

No.23「二の御丸惣絵図（三歩碁）」（金沢大学附属図書館）

絵図裏面に「文化九年申正月夜中於私宅拵直之　山本庄助」と記すので、これも文化再建直後の彩色全体平面図である。「三歩碁」とあるので、一間を三歩に縮尺した200分1図。模写は山本庄助による。

No.24「金沢城二之御丸御殿明細図」（金沢市立玉川図書館　郷土資料）

文化六年再建後の彩色全域図であるが、図左上に部屋ごとの屋根瓦仕様が左記のごとく、部屋ごと詳細に記録される。文化再建時の御殿屋根の仕様がわかるので貴重である。

「　下部屋廻りノ　　桟瓦　　棟胴のし
　高部屋　　本葺　　棟のし瓦長サ三十六間十一遍重下り棟八遍置六間
　御末　　桟瓦　　角下り迄棟八遍重張十間
　蔦之御間　　桟瓦　　棟のし瓦十枚重　長十間
　檜垣之御間　　桟瓦　　棟九間　のし拾枚置下り棟六間
　柳之御間　　桟瓦　　棟十間　のし拾枚置下り十二間
　土到之御間　　桟瓦　　棟十間半　のし拾枚置
　御進物所　　桟瓦　　棟十間半　のし拾枚置
　波之御間　　桟瓦　　棟十間　のし拾枚置下り七間　八枚置
　御茶所　　桟瓦　　棟十一間　のし十一遍置下り拾四間　八枚置
　御膳所　　桟瓦　　棟四間　のし十一遍置下り十七間　八枚置
　船之御間　　桟瓦　　棟四間　のし十一遍置下り九間　八枚置
　桐之御間　　長十九間桟瓦のし拾一枚置下り十五間　八枚置
　御居間書院　　棟六間　のし十一枚置下り拾二間　八枚置
　松之御間并奥書院　　棟弐十六間のし十枚置同十七間計のし瓦七枚置　かんふり一通かんふり一扁
　御居間先御土蔵　　棟拾弐間のし七扁置角登のし三遍置　かんふり一通かんふり一遍
　御雛御土蔵　　本葺　　棟拾弐間のし十枚置
　御台所　　桟瓦　　棟
　橋爪御番所　　桟瓦　　棟
　五疋立御馬屋　　同
　奥御式台　　桟瓦　　五扁重
　御楽屋　　本葺棟三十間
　　釜屋棟十二間
　　」

No.25「金沢城二ノ丸絵図面」（金沢市立玉川図書館　郷土資料）

二ノ丸御殿の彩色全体図。張紙に「文化八年以降ノモノ」とある。

No.26～33　解説略ス

No.34「金沢城二丸諸建物図」（石川県立図書館　森田文庫）

「文化中造営」と注記あり、湯浅氏所蔵図を安政元年（一八五四）に森田柿園が写した彩色二ノ丸御殿平面図。文化再建直後の景観である。

No.35「金沢営中図」　解説略ス

No.36「金沢城二ノ丸之図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）

文化再建中の詳細な間取り図。前田貞醇旧蔵。

No.37「二ノ丸御建物平面図」解説略ス

No.38「於表御舞台御規式御能被仰付候御補理御絵図」（金沢市立玉川図書館 大友文庫）

文化八年二月に挙行された御殿完成を祝う規式能のため、表能舞台附近で仮設工事等を行ったときの「補理図」（修理計画図）。本図の収納袋に「文化六年二月」と記し、延享五年二月の「御入国御祝儀御能」のときの先例等を書き付ける。

◇1期部分図

No.39「加賀金沢城表御殿中之図」（（公財）三井文庫）

二ノ丸御殿の竹の間・表式台・表能舞台附近に限定した部分平面図。縮尺は300分の1。景観年代の特定はできない。

No.40「金府敷面之図」（石川県立歴史博物館 村松コレクション）

前号と同じ表式台・竹の間・表能舞台など表座敷空間の部分平面図である。

No.41「金沢城二之丸御殿間取之図」（金沢市立玉川図書館 清水文庫）

二ノ丸御殿の松の間・柳の間・檜垣間・波の間・舟の間・御膳所のある空間を他と切断して描く平面図。天井・障壁画の仕様など書き込みが多く、朱三角印で窓障子、朱丸印で遠州狭間であることも示す。二ノ丸全体を描く大型平面図の中央部分に相当するものであろう。二ノ丸御殿のたとえば四分割図の一部分と推定される。景観年代の特定は難しいが1期図と矛盾しない。

No.42「二ノ丸表向座敷等之図」（石川県立歴史博物館 大鋸コレクション）

二ノ丸御殿の表式台・裏式台・表能舞台・竹の間・御台所など表向き部分を描く彩色模式図。測量図ではない。

No.43「御広式向御二階之分絵図」（金沢市立玉川図書館 加越能文庫）

御広式と部屋方部分の彩色平面図。一階平面図の上に二階平面図を貼り重ねる。1期図に描かれた部屋方の姿は多様であり、同じ1期図のなかでも微妙な相違があるが、相違の理由や変遷過程はなお解明されていない。また部屋方に二階が増築された時期も不明である。なお本図は文化十年の大脇六右衛門作成図を文化十一年四月に写したものである。

No.44「二の丸部屋方間取図」（松井建設）

二ノ丸御殿の部屋方のみを描く無彩の部分図であり、風呂の位置などから1期図の部分図といえる。部屋方西端の井戸と風呂屋口階段付近に張り掛けがある。

No.45「二の丸竹の間付近平面図（付屋根伏せ図）」（松井建設）

二ノ丸御殿の竹の間附近の平面図に、朱書きで屋根や天井の仕様・寸法などを書き込む。「御焼失以前之絵図」とあるので、文化度の再建にあたり文化焼失前の情報を記載したものかもしれない。

No.46「二の丸桧垣之間・松之間・奥御書院等平面図（付屋根伏せ図）」（松井建設）

二ノ丸御殿の奥書院・檜垣の間附近の平面図に朱書きで屋根や天井の仕様・寸法など書き込んだ部分図。

No.47「二の丸御殿御居間付近の図（付水道路線）」（松井建設）

二ノ丸御殿御居間・御寝所付近と風呂屋を描く平面図に朱書きで地下水路の経路を記す。風呂屋の位置から1期図と同時期の景観といえる。前号・前々号と同時に調製されたと推定されたので同じ所に配列した。

■2期図

No.48「金沢城二の丸地図」（石川県立歴史博物館）

二ノ丸御殿全体を描く大型彩色平面図で、風呂場位置や土蔵の位置などから2期図とした。この時期を代表する御殿全体図で、詳細な文字情報があり、障壁の種類や襖絵の画題・絵師などが丁寧に記される。なお本図の大型別刷図は『金沢市史　資料編18絵図・地図』（一九九九年）に収録され、広く活用されている。

No.49～51「二之丸御殿並御広式下部屋等絵図」（表御式台ヨリ竹之間迄、御台所ヨリ柳之御間迄）・（滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻リ御広式廻リ迄）・（御広式下壇廻り）（金沢市立玉川図書館　清水文庫）

二ノ丸御殿全体を四分割した彩色の平面図である。風呂場の位置などから2期図とした。

No.52「二ノ丸御殿御補修絵図」（金沢市立玉川図書館　清水文庫）

二ノ丸御殿の御居間廻りの部分平面図。絵図隅に「文政三年辰六月勝千代様就相殿、朱引之所御補裡御箇所」とあるので、文政三年（一八二〇）六月に勝千代（斉泰）が二ノ丸に移った際の改築計画を示す図面である。御居間書院を斉泰の寝所とし、新しい御鈴廊下の位置も朱書きで記載する。この図面通りに改修されたと断定できないが、文政三年に御居間廻りで一定の改修があったことを証する史料として貴重な図面である。

No.53「金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）（別刷）

二ノ丸御殿御居間廻りの彩色平面図。部屋ごとに天井・欄間・障子・襖などの意匠に関し詳細な注記をつけるので別刷図とした。細かにみていくと藩主御殿の居間廻りの内装がよくわかる。

No.54「二ノ丸万年樋絵図」（大友佐俊氏）

二ノ丸御殿全体を描く2期図のひとつ。次号の文政十三年図と似ており、同時期の景観とみてよい。

No.55「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏）

文政十三年に作事奉行から城代横山隆章に提出された「壱歩碁絵図」（縮尺600分1、元図に1寸ごとの碁線＝方格線の入った平面図）。絵図収納袋に付く詞書や前藩主斉広が将軍家より拝領した綿羊の小屋が金谷出丸に描かれることなどから文政八～十三年の景観とされる城全域図。そのうち二ノ丸部分のみを拡大して掲載する。

No.56～59「金沢城御城内外御建物絵図」（表向）・（御居間廻）・（御広式）・（御台所廻）（（公財）前田育徳会）（別刷）

前田育徳会所蔵の代表的な金沢城全域図。縮尺100分1の詳細な測量図で、城内建物および石垣・堀・水路等を詳細かつ精度よく描く。全部で42枚から成るが、そのうち二ノ丸御殿にかかる四点を別刷に掲げた。景観年代はこれまでの考証によって天保四～九年の幅で考えている。

2期図の代表として冒頭に掲げたNo.48「金沢城二の丸地図」（石川県立歴史博物館）と比べれば若干の変化もあり、そうした小さな違いの発生理由に関する検証が、今後の御殿絵図編年の課題である。

No.60～62「竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図」（二之御丸御台所辺・二之御丸御表廻・二之御丸御居間廻）（大友佐俊氏）

二ノ丸御殿の表向き部分を三分割して描く部分図三点。収納する箱書に「竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図」と記すが、そのうちの二ノ丸御殿平面図のみ調査させていただいた。

No.63「金沢城二の丸奥部絵図」（石川県立歴史博物館）

本図は二ノ丸御殿奥廻り（御広式と部屋方）を描く部分平面図であり、「化粧の間」については、これ以前の2期図と比べやや小さくなっている。

■3期図

No.64「御城分間御絵図」（（公財）前田育徳会）

本図端裏に「嘉永三年改正」とあり、東ノ丸附段土蔵の形状などから嘉永元年～三年（一八四八～五〇）の景観を描く一分碁絵図である（『絵図でみる金沢城』）。周知の金沢城全域図であるが二ノ丸御殿のみ、ここに掲げた。ここに示された二ノ丸御殿の外形は、嘉永元～三年の御殿の標準型といえるので、御殿外形（平面）の変遷を探る重要な定点となる。典型的な碁絵図（縮尺600分の1）であり精度もよい。

No.65「加州金沢城二ノ丸之図」（（公財）三井文庫）

3期図の特徴である、広式と松の間を結ぶ直線廊下が描かれるので、弘化四年の広式普請の結果登場した景観と推定される。全体的に嘉永三年図（No.64）に近い。その上に貼られた屋根仕様の張紙部分はNo.67「金沢城二之御丸三歩碁図」B（石川県立図書館）とよく似ている。同時代の同種絵図写と推定されるが、細部において微妙な相違もあり、今後より詳細な比較検討が必要である。また、三井文庫には、本図のほか、本図と近似した「二ノ御丸三歩碁之図」という表題をもつ同種図（『加州金沢城之図』②）があり、同様に四種の屋根仕様を書き分けた張り掛けがあった。これも次に掲げる「金沢城二之御丸三歩碁図」Bと同種図の写といえるが、掲載は略した。

No.66「金沢城二之御丸三歩碁図」A（石川県立図書館）

嘉永三～六年頃の景観を描く御殿全体図である。本図にきわめて近似した「金沢城二之御丸三歩碁図」Bとともに同じ機関に所蔵されるが、細部を子細に比較すると若干の相違もある。4期図特有の特徴が本図になく、3期図の特徴を明確に有するが一部に相違もあるので、上記の景観年代を想定してみた。次号が正本で本号はその下図とみられる。

No.67「金沢城二之御丸三歩碁図」B（石川県立図書館）

景観年代は前号と同じ嘉永三～六年頃と推定される御殿全体図である。前号と異なりこちらには、屋根材の銅板・鉛瓦・柿・土瓦を色分けした貼紙や二階部間取を示す貼紙が掛けられるので、貼紙が掛った姿と貼紙を外した景観の2点とも図版を載せた。屋根材を色分けした貼紙は、屋根仕様を知るうえで貴重な絵図で、広式・部屋方など奥向き建物の屋根には各部分の坪数や一辺長さなども記載される。

＊No.66～67はいずれも「金沢城二之御丸三歩碁図」として石川県立図書館に所蔵されている。A・Bはこの二枚の絵図を分類するために便宜上、付した。

■4期図

No.68「二ノ丸御殿図」（青硯文庫）

本図の景観は3期図と異なり、御居間南縁の廊下が一直線に変容し、松の間と広式を結ぶ廊下がなくなり、長方形の土蔵が広式側に出来、松の間と広式は塀で仕切られてしまう。こうした景観変化は嘉永六年の改修に係

るものと推定されるので、嘉永六年以後、文久三年溶姫移住前の景観だと想定される。これを4期図としたが、当該期の御殿全体図は本図のみである。

No.69「金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図」（金沢市立玉川図書館　清水文庫）

端裏書に「嘉永年中御修補」という文言があり、嘉永六年に実施された広式周辺での改修工事に関係した平面図と推定される。本図に示された修理結果をうけ改訂されたのがNo.68の御殿全体図であろう。

No.70「金沢城二之丸転席方絵図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）

本図のねらいは二ノ丸御殿の表空間と御台所付近を描くことにあるが、御広式と土蔵および楽屋多門の一部も描かれ、その部分が4期図の標式となる青硯文庫図（No.68）に近似するので、ここに置いた。

No.71「用番方御絵図⑩松之間席絵図」（金沢市立玉川図書館　大友文庫）

安政二年五月に松の間で実施された儀式の手順を描いた部分図。儀礼に関し多くの文字記載がある。このように御殿内での儀式の座列次第などを記した図面は多数伝来しており、その一例として掲げた。

No.72「用番方御絵図⑮御用之間江被召候節出所等絵図」（金沢市立玉川図書館　大友文庫）

前号と同じ儀礼手順の図。標題に「安政五年御補理替後」と肩書きするので、安政五年に描かれた御殿御居間廻り御用の間での儀式図である。

■5期図

No.73「金沢城殿中図」（（公財）前田育徳会）

二ノ丸御殿の松の間・小書院付近を描く部分図の上に改修後の姿を貼り掛ける。貼り掛けの下の図には、広式側の御土蔵が描かれ、その付近の間取りは4期図のNo.68・70に近似するので、4期図の松の間付近で行われた改修後の姿が貼り掛けの上に描かれたと推定できる。No.73の上段は貼り掛けされた姿であるが、松の間は「御居間」に変化し、「御広式より渡り廊下」が直接入る構造に変わっている。小書院付近では「御盛立所」「御近習」という表記もなされる。4期図以後、松の間付近でなされた大改修は、文久三年の溶姫の移徙しか考えられないので、本図は溶姫の御守殿建造に伴う改変を示す図と考えられる。

No.74「姫君様御着輿之節御供落シ絵図」（御守殿御門内外御供落シ個所）（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）

絵図表題に「御守殿」「姫君様御着輿」とあり、絵図中でも切手門内のすぐ脇に「御守殿御門」を明瞭に記すので、金沢城二ノ丸御殿に溶姫が移住していた時期の切手門付近の略図である。この表題のもと収納袋内に二点の絵図を納めるが、もう一点は「御城内御行列御供人落ケ所絵図面」という表題をもち、二ノ丸御殿切手門からタスキ御門→河北門→桐木門→尾坂門までの行列進行過程を描く。本図は溶姫が二ノ丸御殿御守殿から他出する際の行列供立ての配置図のうち、出発地点である御守殿門と切手門付近での供建ての配置場所を詳細に記す。とくに城内溶姫御守殿の式台付近の姿が具体的である。

No.75「金沢城二之丸御守殿御供建方絵図」（姫君様・初姫様御建込非常之節御立退御行列御供建方絵図）（金沢市立玉川図書館　加越能文庫）

絵図中に前号同様の「御守殿御門」を描くので、これも金沢城二ノ丸御殿に溶姫が移住していた時期の切手門付近の略図である。溶姫御殿の式台部分の間取りが具体的である。この図を納める袋にもう一点「姫君様御城

外御出之節御行列御供建ケ所絵図」という表題をもつ同種の絵図があったが、本図のほうが供立ての記載が詳細なので、こちらのみ掲載した。溶姫が二ノ丸御殿御守殿から他出する際の行列供立ての配置図である。なお初姫は斉泰の娘である。

No.76「金沢旧城廓総図」（石川県教育委員会）

明治五年の景観を描く「金沢旧城廓総図並建物部分図等」全三三点のうち城全体を描く図であるが、解説は三節にゆずる。

No.77「金沢城廓内絵図面」（石川県教育委員会）

明治五年の二ノ丸御殿全体図であるが、解説は三節にゆずる。

三　明治五年二ノ丸御殿図について

木越隆三

明治五年頃の景観を描く「金沢旧城廓総図並建物部分図等」（全三三点）は二〇一五年、本県の取得するところとなったが[2]、この中に「金沢城廓内絵図面」という表題の付いた二ノ丸御殿平面図が含まれ、明治五年頃の二ノ丸御殿の現況を描く図面だと推定されている。もしこの推定が妥当であるなら、近世最末期の二ノ丸御殿の様相を推認できる絵図として、すこぶる貴重な史料となる。

金沢城が大名前田家の御殿・政庁として機能していたのは明治二年十月迄で、最後の藩主前田慶寧は同月、金沢城を去り年寄衆筆頭の本多家（五万石）上屋敷に住居を移した。そのあと金沢城地は明治新政府の収用地となり、新政府の所轄下にあった金沢藩兵の駐屯地・兵営となった。それゆえ明治五年の二ノ丸御殿図（「金沢城廓内絵図面」、以下「明治五年二ノ丸御殿図」と略記）には、金沢城御殿最後の様相が描かれている可能性があり、詳細な検証が求められる絵図といってよい。

明治四年七月に廃藩置県の改革があり、明治国家の中央集権化は一段と進み、当初兵部省管轄地であった金沢城地も、明治五年三月に陸軍省管轄地となり、明治の陸軍部隊の兵営・軍事施設としての利用が本格化する。その点で明治五年というのは、まさに明治国家が中央集権体制を本格整備する途上にあり、旧藩時代の城地・港湾・軍事施設等の実情を調査し、それらを収用し、近代国家にふさわしい軍事施設・支配装置として有用な施設を選別する作業がなされた時期にあたる[3]。

そのような過渡期にあった明治五年と特定できる二ノ丸御殿全体図を入手し内容を精査したので、その検討結果をここで紹介したい。まず、この二ノ丸御殿図を含む全三三点の概要と二ノ丸御殿図に描写された内容を紹介しつつ、これらの絵図群が明治五年に作成されたと推定した根拠を説明したい。また明治五年に、こうした旧藩所属の軍事施設等の図面が作成された時代背景にも言及し、年紀推定の傍証としたい。

（1）「金沢旧城廓総図並建物部分図等」の年紀推定

今回入手した、「金沢旧城廓総図」等全三三点のリストは表1に掲げた通りであるが、大きく分類すると、①金沢城内の建物等配置図17点、②砲台屯所図1点、③鉄砲屯所絵図7点、④鈴々見鋳造場絵図5点、⑤小柳製薬所絵図2点からなる。このうち②砲台屯所図は旧藩年寄奥村宗家邸を利用した軍事施設で、その全体景観の平面図が1点のみここに入っていた。③鉄砲屯所絵図は全7点あり、藩年寄（三万石）横山家の邸宅を転用した旧金沢藩の軍事施設図であった。7点の内訳は全体平面図1点と「塾所」「長屋等」「使所」「土蔵」など内部建物の平面プランを描く部分図6点からなる。このほか鈴見鋳造場関係の部分図が5点、また9点以上あったと想定できる小柳製薬所の建物別部分図2点も金沢城関係図とともに一括され伝

表１　明治五年「金沢旧城廓総図並建物部分図等」一覧

番号		名称	寸法 (cm)	形態	内容
1	0	金沢旧城廓総図	68×78	彩色	旧城郭内の建物配置図 建物に朱書きで番号を記し、 敷地面積、建坪数、樹木数を注記する
	1	金沢城廓内絵図面	140×77	彩色	第壱号 二ノ丸御殿の平面図 部屋の名称を記し、敷地面積、建坪数、建具数を注記する
	2	金沢城廓内　石川門	40×28	墨書	第二　建物５棟描く
	3	長屋	40×28	墨書	第三　建物（九十間長屋）１棟を描く
	4	河北門	40×28	墨書	第四　建物４棟を描く
	5	元会所	40×28	墨書	第九　建物７棟を描く
	6	宮	40×28	墨書	第拾　建物７棟を描く
	7	時鐘所	40×28	墨書	第拾一　建物２棟を描く
	8	元土橋門之内	40×28	墨書	第拾二　建物３棟を描く
	9	スロイス御貸家	40×28	墨書	第拾三　建物９棟（鼠多門など）を描く
	10	金沢城廓内　本丸附段	40×28	墨書	第拾四　建物２棟を描く
	11	元本丸	40×28	墨書	第拾五　建物２棟を描く
	12	元東ノ丸	40×28	墨書	第拾六　建物６棟（大獅子土蔵など）を描く
	13	東ノ丸附段	40×28	墨書	第拾七　土蔵１棟　外１棟を描く
	14	鶴ノ丸	40×28	墨書	第拾八　建物２棟を描く
	15	元諸方	40×28	墨書	第拾九　土蔵１棟を描く
	16	元花畑	40×28	墨書	第二拾　建物１棟を描く
2		砲台屯所図	109×77	彩色	小立野の旧奥村邸に置かれた屯所を描く
3	1	鉄砲屯所絵図面	104×76	彩色	旧横山邸に置かれた屯所を描く
	2	鉄砲屯所内建物　塾所等	39×28	墨書	第壱　　鉄砲屯所の建物部分図
	3	鉄砲屯所内建物　塾所	39×28	墨書	第弐　　〃
	4	鉄砲屯所内建物　長屋等	39×28	墨書	第三　第六　　〃
	5	鉄砲屯所内建物　塾所	39×28	墨書	第四　　〃
	6	鉄砲屯所内建物　使所并土蔵	39×28	墨書	第五　　〃
	7	鉄砲屯所内建物　物置并土蔵	39×28	墨書	第七　　〃
4	1	鈴々見鋳造場兵器局内建物　鋳造所	40×27	墨書	第壱　鈴見の鉄砲製造所の建物部分図
	2	鈴々見鋳造場兵器局内建物　器械所	40×27	墨書	第弐　　〃
	3	鈴々見鋳造場兵器局内建物	40×27	墨書	第三　　〃
	4	鈴々見鋳造場兵器局内建物　大砲納屋等	40×27	墨書	第四　　〃
	5	鈴々見鋳造場兵器局内建物	40×27	墨書	第五　　〃
5	1	小柳製薬所内　役所	40×27	墨書	第七　小柳（鶴来）の火薬製造所の建物部分図
	2	小柳製薬所　硝石場蔵	40×27	墨書	第九　　〃
6		袋		墨書	旧城廓総絵図、同旧演武場図、兵器方絵図、砲台屯所図、銃隊屯所図、練兵自炊小屋図、寺中村砲蔵図と墨書あり

来していた。

横山邸・奥村邸などが金沢藩の軍事施設・政庁として利用されるのは、明治二年後半からなので、[4] 本図の景観年代は明治三年以後であろう。また「金沢旧城廓総図」「明治五年二ノ丸御殿図」ともに、二ノ丸御殿表門付近にあった唐門が描かれていないのは、その移築先となった卯辰山招魂社の成立時期から明治三年十二月以後の移築のためとみられるので、[5] 明治四年以後の景観を描くとみてよい。

さらにいえば、④鈴々見鋳造場絵図7点のうち「鈴々見鋳造場兵器局内建物第一　鋳造所」（表1の4―1）に「但シ、当年より拾九年前出来」と記すので、ここに描かれた鈴見鋳造場建設から一九年後に作成された絵図だと理解される。鈴々見鋳造場の建設時期については「温敬公記史料」に「是月（嘉永六年十二月）造製炮所干鈴見邑」[6]、「本藩歴譜」では「（嘉永六年）十二月城東鈴見村ノ地ヲ拓テ鋳造場ヲ創ム」[7] とあり、鈴々見鋳造場は嘉永六年（一八五三）に建設されたと周知されている。それゆえ、鈴見鋳造場は明治五年（一八七二）からちょうど一九年前に創設されたのであり、本図の成立時期も明治五年と特定できる。以下では、他の史料も援用し、明治五年作成という点をさらに傍証したい。

この絵図群のうち①金沢城内の建物等配置図一七点の内訳をみていくと、冒頭の「金沢旧城廓総図」は目次に相当する総括図で、城内に残存する金沢城建物は一六点の部分図に書き分けられ（表1参照）、建物の外形と建坪・屋根仕様などを記載する。「金沢旧城廓総図」はそれらの位置と番号を城全体図の内に示す役割を果たしている。この総括図のうち玉泉院丸部分には「医学教師スロイス居住所」と記した付箋があり、それに該当する部分図第十三（表1の1―9）にはスロイス館の平面図が記載され、建坪・外辺長さ・屋根仕様のほか「スロイス御貸屋」という記載があった。したがって、本絵図群はオランダ人医師スロイスが金沢藩の招聘により金沢に滞在し、玉泉院丸敷地内に洋館を構えていた時期のものといえ、そこに該当する期間は、関係資料を要約すると明治四年秋～明治七年九月と確定できるので、明治五年成立という推定の傍証となる。

なお軍医スロイスが金沢にやってきた事情については、今井一良氏等の研究があり、[8] それに拠って金沢赴任前後のスロイスの動静を時代順に左に掲げておく。

◆スロイス館の変遷

明治3年2月：大手町津田玄蕃邸に医学館が設置される。
明治4年3月：オランダ軍医スロイスが金沢に着任し、医学館の外人教師となる。
（最初のスロイス住居は、大手町の寺西邸とされる）
明治4年7月：廃藩置県で旧金沢藩は金沢県と改めた。
明治4年秋頃：玉泉院丸にスロイスのための洋館を建設する。その頃に移住か。
明治5年2月：県庁を美川に移転、金沢県を石川県と改める。
（6年1月：県庁を金沢に戻す）
明治5年4月：医学館は廃止。民間有志による金沢病院で医学教育を継承し継続。
明治7年10月：スロイス、金沢を離れる。スロイス館閉鎖。
以後、スロイス館の建物は広坂に移築され再利用された。

（2）金沢旧城廓総図に書かれた文字情報

「金沢旧城廓総図」等三三点の作成時期を明治五年と推定した根拠を述べてきたが、三三点の冒頭にくる「金沢旧城廓総図」（以下では「総図」と略記）と「明治五年二ノ丸御殿図」に記載された文字情報の概略をここで紹介し、明治五年段階の金沢城二ノ丸御殿の現況を確認したい。

最初に「総図」に書かれた文字記載を、二ノ丸中心に紹介しよう。「総図」には金谷出丸と兼六園のエリアは省かれ、北ノ丸も御宮部分のみで北端部は除外される。二ノ丸を起点に三ノ丸→新丸→北ノ丸→土橋門付近→

玉泉院丸→本丸付段→本丸→東ノ丸→東ノ丸付段→鶴ノ丸→元諸方土蔵→元花畑という順に、ほぼ螺旋状に、城内各地に所在する建物に朱で番号を打ち、それぞれの番号ごと部分図を作成し添付していた。部分図一六点の概要は表1に示した通りで、二ノ丸が「第壱」図で、「第二拾」図は本丸東面と南面の高石垣下の腰曲輪、通称「花畑」にあった建物1棟を描く。表1では第五図から第八図迄が欠けているが、「総図」によれば第五図は新丸東側（「元細工所」と旧越後屋敷エリア）にあった建物六棟に該当し、このうち旧越後屋敷に「軍事掛兵器方」という記載があるので、明治四・五年の現況を示すものと察せられる。第六図は新丸の「元作事所」付近に残存する建物一棟を記し、第七図は新丸の「元下台所」、第八図は「元割場」にあった建物を描く部分図だと想定できる。第九図「元会所」からあとの建物図は現存しており、表1に示した通りである。

さて「総図」右下には

「金沢旧城廓総図　反別弐拾三町四反五畝拾六歩壱分

総建坪五千八百十六坪四歩九厘、

樹木　六十五本　松木▼目廻リ三尺計ヨリ八尺ニ至、

二十八本　杉木▼目廻リ一尺計ヨリ一丈計ニ至ル、

三十二本　栂木▼目廻リ八尺計ヨリ一丈計ニ至ル、

九十本　雑木▼目廻リ一尺計ヨリ一丈二尺ニ至ル」（▼印以下は割書）

と城内の樹木についても詳細に記す。この樹木記載は陸軍省築造局の調査要項と一致し、本図の製作時点を特定する根拠ともなりうるので、あとでふれたい。また付箋が先述の「医学教師スロイス居住所」のほか甚右衛門坂上にもあって「時鐘所」、北ノ丸では「東照宮堂宇地元」と記す。

二ノ丸では御殿外形を朱色で彩り、「八千五百歩二分　但広鋪トモ」という二ノ丸敷地全域の坪数や「旧演武場」「拾八間」という記述がある。「演武場」は表御殿（竹の間）が金沢藩時代に使われたときの用途名称であり、「拾八間」はその大きさを示すものであろう。また御殿外形の上に付された貼紙に屋根材を種類別に「鉛屋根　四百拾三坪、柿屋根　六百七拾八坪七分五厘、銅屋根　千三百二拾六坪九歩、瓦屋根六百六拾弐坪五分五厘」と記しており、最終時点の二ノ丸御殿の屋根材ごとの屋根面積がわかる。御殿現況に関する有益な情報といえる。

表２　「明治五年二ノ丸御殿図」の部屋名記載一覧

絵図内位置番号	区分	部屋名等の記述 <>内は明治５年の呼称	旧御殿時代の呼称
1	表向き	表式台	表式台
2		実検之間	実検之間
3		竹之間＜練場＞	竹之間
4		舞台	表能舞台
5		書院	小書院二・三ノ間
6		柳之間	柳之間
あ		＜寝室＞	進物裁許与力詰所
7		檜垣間＜講堂＞	檜垣間
8		小書院	小書院上段
9		松ノ間	松ノ間
10		奥書院	奥書院
い		＜寝室＞	牡丹之間
う		＜寝室＞	執筆溜
11		台所	台所
12		波之間	波之間
13		舟之間	舟之間
14		膳所＜給養方物置＞	膳所
15	御居間廻り	鏡之間	鏡之間
16		居間書院	御居間書院
17		式台	式台
え		＜縮所＞	奥小将詰
お		＜講堂＞	御居間二・三の間
18		居間	御居間上段
19		折之間	折上之間

（3）「明治五年二ノ丸御殿図」に書かれた文字情報

次に№77「明治五年二ノ丸御殿図」（金沢城廓内絵図面）に書かれた文字記載を紹介したい。まず御殿内部の部屋名については、旧藩時代と同じ部屋

名称を記した所と明治五年時点での用途を記した所に分かれる。最後の藩主慶寧時代の部屋名のままの箇所には算用数字を入れ、表2に一覧した。また明治二年に新政府が二ノ丸御殿建物を接収し、明治五年段階で旧軍が御殿内部を使用していたことに伴い名称・用途が変化したことを示す文字記載は五十音順の記号を図版に付し表2に掲げた。

奥向き空間の広式と部屋方では「空地」「長屋」という記載のみなので、表2への記載は略した。奥向き空間は軍隊の利用に適しておらず、建物改造もまだなされていなかったのであろう。部屋方は4期図と比べ大きく縮小され、慶応末年・明治初頭での改変が想定されるが、広式は最末期の姿をとどめている。

表2に示した「表向き」と「居間廻り」も文字記載のある部屋等のみ示したが、建物の骨格はほぼ残っていると判断される。寝室・講堂とされている部屋の旧名称は表2に示した通りだが、そこでは改変がなされたとみられる。「竹之間　練場」と記したケースでは、旧状を基本的に残しつつ「練場」つまり武芸の練習道場として用途を変えていたと推定できる。

さて「明治五年二ノ丸御殿図」の右下には「総歩数八千五百歩弐分内　三千八拾壱坪九歩弐厘　建物　但シ板ノ間」と二ノ丸全域の面積と御殿の総建坪などが記載される。絵図上部（部屋方敷地）には「広式総坪数六百六拾二坪七歩五厘」とあり、絵図左上の貼紙には、

「　　松壱本　　三尺計
　　右演武場
　　建具附
一、四百拾七枚　　唐紙
　内八拾弐枚　　九尺
　　三百三拾五枚　　六尺
一、千五拾枚　　障子
　　内拾弐枚　　弐間
　　百拾六枚　　九尺
　　九百廿弐枚　　六尺
一、六拾六枚　　杉戸
　内弐拾枚　　九尺
　　四拾六枚　　六尺
一、拾弐枚　　房附等唐紙
　内弐枚　　房附
一、三拾枚　　書院附障子
一、弐枚　　鉄網戸
一、弐百枚　　半障子
〆　　」

と記し、御殿内にかつてあった唐紙や障子の保管数を示す。この記載も最後の二ノ丸御殿の建築内装の実情を語る重要な証言である。最後の二ノ丸御殿に由来する部屋名称とともに最後の御殿の様相を窺うことのできる貴重な情報といえよう。

（4）「金沢旧城廓総図並建物部分図等」の時代背景

上記のごとく、本図は明治五年作成と推認できるのであるが、ここで明治五年になぜ、こうした絵図群の作成が必要とされたのか、その作成背景について言及したい。

明治二年六月の版籍奉還によって、存続を許された藩の領地と人民は天皇および明治新政府に返上され、城地・軍事施設は新政府の支配下に繰り込まれた。しかし天皇と明治新政府は、旧藩人民の支配と領地を当分は旧藩主に託し、藩主は「知藩事」となり、府・県・藩に編成された地方支配機構のうち藩の支配が天皇から委託された。同時に藩主の私的財産と藩の

公的財産は明確に区別され、支配区分や身分もすべて天皇中心に再編された。その結果、前田加賀守領は「金沢藩」と公式に呼ばれるようになり（これが行政機関としての「藩」の初見）、明治二年十月、知藩事前田慶寧は金沢城地を新政府に譲り渡し、広坂の本多家上屋敷に私宅を移した。また藩庁は長町の長家上屋敷に移された。

版籍奉還によって、金沢藩は明治政府から管下の兵権・税権を委任され旧藩領の支配にあたったが、金沢藩直属軍は金沢城内を屯所とし、旧加賀八家の横山邸には鉄砲屯所、奥村宗家上屋敷に砲兵屯所が置かれた。先述した嘉永六年設置の鈴見鋳造場（兵器鋳造所）は、旧藩時代、石川郡小柳村に設置された弾薬製造所とともに、金沢藩兵器局の下に置かれ管理された。版籍奉還後の金沢藩は約二千六百人の旧藩兵を掌握し、新政府の地方軍隊として旧藩時代の軍事施設を利用しながら、任務につき教練をしていた。

版籍奉還後、城郭の破却を願い出た藩が一五もあり、その他城地の開墾を願い出た藩もあり、全国的にみると旧城郭は無用の施設となりつつあったが（前掲森山一九七〇）、金沢藩では活用できる範囲で利用していた。

明治四年七月、薩摩・長州・土佐の藩兵一万をもって構成した御親兵を東京に集結させて廃藩置県の政変が起きると、知藩事は解任され、新政府から大参事などを地方長官として府・県に派遣、中央集権化が一気に進み、地方制度も大きな転換期を迎えた。新政府の軍事体制の中央集権化は、旧藩兵の解散、旧藩所轄の軍事施設の兵部省接収という形で進展した。

このとき金沢藩は金沢県となり、明治五年二月～六年一月に県庁が金沢から石川郡美川に移されたが、その間に県名が「石川県」に変えられた。明治四年八月二十日、太政官（明治政府）は、府・県・藩の管轄下にあった地方城郭は兵部省が直轄することを正式に決定し布令したので（前掲森山一九七〇）、これ以後、金沢城などの旧藩所属城郭および軍事施設は兵部省管轄に編入された。長野県では明治四年秋・冬、東京鎮台に松本城本丸・上田城を引き渡し、同五年一・二月に松代城・高遠城が引き渡された。彦根城は五年二月、名古屋城は五年五～八月に鎮台に引き渡された。しかし鎮台分営の置かれていない城には番人を置くだけで、実情把握はきわめて不十分であったという（前掲森山一九七〇）。

明治五年二月二十七日に兵部省が改組され、新たに陸軍省・海軍省が設置されると三月十八日、陸軍省築造局は管轄下の城郭等に武官を派遣し、旧藩所属の城郭・練兵場・屯所・軍学校・兵器製造所・弾薬製造所等の軍事施設について調べさせた。旧藩軍事施設等の調査を行い、使用可能な旧藩軍事施設の存廃の決断を迫られていたのである。

こうしたなか明治五年三月九日、兵部省令で旧金沢県の兵員（二六六〇人）と旧大聖寺県の兵員（一八九人）に解散が命ぜられ、三月十八日に陸軍省から石川県に、今後「兵事ニ関スル城廓・堡・砦・練兵場及兵器等一切、本省ニ管轄ス」と布達された。またこれに続き、明治五年三月に石川県から「旧金沢城及火薬庫等ノ図ヲ陸軍省ニ進達ス」という記録もあるので[9]、今回発見した「金沢旧城廓総図並建物部分図等」は、このとき陸軍省に進達した旧金沢城関係の軍事施設図の控図もしくは写図ではないかと推測される。

また同じ明治五年三月十八日付で太政官は「城郭兵器取調」のため陸軍省官員を各地方に派遣し、「官庫ハ勿論社寺四民共従来貯蔵宝物ノ内武器ニ属スル分巨細取調候筈」につき各府県はこの旨を管内に布達し協力するよう指令したが、陸軍省も同日付で府県宛に「今般城郭兵器等為取調、当省官員、各府県へ派出巡回為致候ニ付而ハ、別紙ノ件々詳細取調、出張官員へ可申出候事」と布達した。ここに記された「別紙」では以下のような調査項目が列記される[10]。

「一、城廓・堡・砦・練兵場等総而兵事ニ関渉シ建築スル者ハ土地並厦屋・樹木共悉皆当省管轄ニ候条、詳細取調可申出候事、

但城郭之儀ニ付テハ追々届出候向キモ尚又今般明細可申出候事、

一、兵単弾薬並製造所及ヒ火工所用ノ薬品、其産出之場所等凡テ陸軍関係之分同断可申出候事、

（下略）」

さきに紹介した明治五年「金沢旧城廓総図」に樹木まで記載していたのは、この調査項目の指示に合致するものといえ、ここで紹介した明治五年「金沢旧城廓総図」「明治五年二ノ丸御殿図」など三三点の軍関係絵図群は、明治五年三月十八日の陸軍省布達により、石川県にて作成し進達したものとみてよいのではないか。

こうした軍関係施設の調査のあと明治六年一月十日、徴兵令が発布され、続いて一月十四日、存城廃城令が発令される。この存城廃城令によって、全国約四〇の旧城郭ほか軍艦所・兵器製造所・港湾など五六ヵ所を存城とし、一二五城六八陣屋を含む軍事施設二七五ヵ所を廃止対象物件と定めた（前掲森山一九七〇）。これによれば金沢城は存城とされ軍が利用することになったが、富山城や小松城などは廃城となって、大蔵省から別途地方や他の省庁に譲られた。こうした処置の判断の基礎になったのが、前年に行われた全国城郭等軍事施設調査であり、府県に命じて提出させた旧藩の軍関係施設図面が参照されたものと想定される。

明治六年十一月には、旧金沢城地の一部をなしていた金谷出丸が尾山神社地としての利用を許された。明治八年になると、旧金沢城地に置かれた名古屋鎮台営所に名古屋鎮台第七連隊司令部が設置され、連隊（二個大隊編成）本部は旧二ノ丸の「菊の間」に設置された[11]。「明治五年二ノ丸御殿図」に描かれた明治五年段階の軍による建物改修・改変は、明治六年の存城廃城令を契機に一段と広がったといえよう。明治十四年一月に第七連隊司令部などとして利用されていた旧二ノ丸御殿から失火し建物すべて焼失し、金沢城二ノ丸御殿はその歴史を完全に終える。

（5）「明治五年二ノ丸御殿図」発見の意義

最後に、今回発見された「金沢城廓内絵図面」が明治五年の絵図と特定されたことで、すでに確認されている江戸後期二ノ丸御殿図の編年作業に、どういうメリットをもたらしたか簡単にふれておきたい。

本書には別刷図も含め、文化六年再建以後の後期御殿図のうち主なもの六〇点余を掲載し、二節で簡単な解説も行ったが、解説にあたり御殿の変遷過程に即し、描かれた御殿景観を五期に分けた。各期ごとの掲載数は1期図の三〇点と2期図の一六点で過半を占め、あとは3期図四点、4期図五点、5期図五点と明治に近づくにつれ激減する。つまり、江戸後期の二ノ丸御殿図の大半は弘化四年の改修以前の景観を描いたものが圧倒的に多く、3期図も含めた嘉永六年の改修以前の御殿図という整理をすれば五〇点がこれに該当し、大半が嘉永年間以前の絵図であった。

文久三年、藩主斉泰の正室溶姫が、文久の幕政改革の影響で江戸藩邸から金沢城二ノ丸御殿に移住することになり、斉泰は手狭な金沢城奥向き空間でやり繰りを行い、溶姫の居住空間（御守殿）を造営したが、表向きの部屋を奥向き空間に取り込むという従来にない大改修を行った。その結果、二ノ丸御殿の部屋方・御広式・松の間付近で大きな改変がなされたが、そのことを示す御殿全体絵図は残っていない。わずか三点ほどの部分図によって、文久三年の御殿大改修の一端を確認できるに過ぎない。

今回の「明治五年二ノ丸御殿図」は、文久三年に改造された後の二ノ丸御殿を描く唯一の全体図といえるので、使い方を工夫すれば、溶姫御殿設置の頃の御殿の特徴を引き出せる可能性をもつ。むろん「明治五年二ノ丸御殿図」は、文久三・四年に在城した溶姫の時代の姿をそのまま描くものでなく、その後、慶応二年四月に十三代斉泰から十四代慶寧に藩主が交替した際の改修などを経たのちの姿をとどめるにすぎないが、大きく見れば、文久三年の御殿改修による変化を経た御殿であるいじょう、文久三・四年

の姿を推定するとき不可欠の史料となることは間違いない。

溶姫の金沢城滞在期間は一年余であったが、広式で起きた変化などは、どの程度その後改変されたのであろうか。溶姫が去ったあとの慶応年間の改修を想定しながら、「明治五年二ノ丸御殿図」は今後も引き続き慎重に検証されるべきであろう。「明治五年二ノ丸御殿図」は、明治二年に最後の藩主慶寧が御殿を出た時点の姿を示す御殿全体図として意義があるだけでなく、文久三年以後の御殿全体図が残存していない現状において、文久三・四年の溶姫在城時の御殿景観を考察する際にも参照すべき絵図であるといえよう。文久三・四年の溶姫在城時の御殿景観を類推するにあたり、溶姫による改修直前の姿を示す青硯文庫本の全体図（No.68）と「明治五年二ノ丸御殿図」を比較することで、何らかの所見が得られるかもしれない。

近世後期の二ノ丸御殿図の遺存状況の偏りからみて、今回の「明治五年二ノ丸御殿図」の発見は、最末期の御殿を推定するとき有力な証拠になりうる史料であると評価でき、そこに本図の意義をもとめたい。

註

（1）石野友康「溶姫の加賀下向と金沢城」『金沢城研究』12号、二〇一四年

（2）平成二十九年四月以後、本図は石川県立図書館に架蔵され、閲覧可能となる予定。

（3）森山英一『名城と維新』城郭資料館出版会、一九七〇年。以下では「前掲森山一九七〇」と略記する。

（4）清水文庫「雑留帳」（金沢市立玉川図書館蔵）によれば、八家屋敷などが中隊屯所・銃隊屯所等に変化した年次を記載しており、奥村邸・横山邸の変化時点は明治二年としていた（石野友康「藩体制の解体と金沢城」『金沢城研究』8号、二〇一〇年）。

（5）北村魚泡洞『尾山神社誌』尾山神社社務所、一九七三年。

（6）『加賀藩史料』藩末篇上巻。

（7）『金沢市史』資料編3（近世一）。

（8）今井一良「金沢最初のもう一つの異人館―スロイス居館の変転と遺品の透彫り装飾―」『石川郷土史学会々誌』29号、一九九六年、同「新発見の元蘭医スロイス居館の写真」『石川郷土史学会々誌』30号、一九九七年。

（9）「石川県史料　制度部　兵制」『石川県史料』3巻。

（10）「法令全書：明治五年」、森山前掲一九七〇（一二〇頁）。

（11）石野友康「藩体制の解体と金沢城」『金沢城研究』8号、二〇一〇年。

No.	時期	題名	所蔵者等	請求番号等	寸法（cm）
44	後期１	二の丸部屋方間取図	松井建設	撮影番号 04	103×76
45	後期１	二の丸竹の間付近平面図（付屋根伏せ図）	松井建設	撮影番号 07	56×67
46	後期１	二の丸桧垣之間・松之間・奥御書院等平面図（付屋根伏せ図）	松井建設	撮影番号 05	51×70
47	後期１	二の丸御殿御居間付近の図（付水道路線）	松井建設	撮影番号 09	60×56
48	後期２	金沢城二の丸地図	石川県立歴史博物館	館蔵 2-18-2-1355	130×255
49	後期２	二之丸御殿並御広式下部屋等絵図（表御式台ヨリ竹之間迄、御台所ヨリ柳之御間迄）	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-49-①	40×54
50	後期２	二之丸御殿並御広式下部屋等絵図（滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻リ御広式廻リ迄）	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-49-②	52×55
51	後期２	二之丸御殿並御広式下部屋等絵図（御広式下壇廻り）	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-49-③	33×43
52	後期２	二之丸御殿御補修絵図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-36	67×88
53	後期２	金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.26-24	176×243
54	後期２	二ノ丸万年樋絵図	大友佐俊氏		188×98
55	後期２＊	御城中壱分碁絵図	横山隆昭氏	絵図３	151×137
56	後期２	金沢城御城内外御建物絵図（表向）	（公財）前田育徳会		82×143
57	後期２	金沢城御城内外御建物絵図（御居間廻）	（公財）前田育徳会		104×115
58	後期２	金沢城御城内外御建物絵図（御広式）	（公財）前田育徳会		96×125
59	後期２	金沢城御城内外御建物絵図（御台所廻）	（公財）前田育徳会		79×125
60	後期２	竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図（二之御丸御台所辺）	大友佐俊氏		119×75
61	後期２	竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図（二之御丸御表廻）	大友佐俊氏		128×76
62	後期２	竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図（二之御丸御居間廻）	大友佐俊氏		91×100
63	後期２	金沢城二の丸奥部絵図	石川県立歴史博物館	館蔵 2-18-2-1022	110×78
64	後期３＊	御城分間御絵図	（公財）前田育徳会		155×213
65	後期３	加州金沢城二ノ丸之図	（公財）三井文庫	c825-47	80×145
66	後期３	金沢城二之御丸三歩碁図Ａ	石川県立図書館	K391-7	143×83
67	後期３	金沢城二之御丸三歩碁図Ｂ	石川県立図書館	K391-7	142×83
68	後期４	二ノ丸御殿図	青硯文庫		—
69	後期４	金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-40	56×80
70	後期４	金沢城二之丸転席方絵図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.26-25	55×78
71	後期４	用番方御絵図⑩松之間席絵図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	大 1117-⑩	28×49
72	後期４	用番方御絵図⑮御用之間江被召候節出所等絵図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	大 1117-⑮	30×21
73	後期５	金沢城殿中図	（公財）前田育徳会		77×55
74	後期５	姫君様御着輿之節御供落シ絵図（御守殿御門内外御供落シ個所）	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.15-110	48×36
75	後期５	金沢城二之丸御守殿御供建方絵図（姫君様・初姫様御建込非常之節御立退御行列御供建方絵図）	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.15-111	108×79
76	後期５＊	金沢旧城廓総図	石川県教育委員会		68×78
77	後期５	金沢城廓内絵図面	石川県教育委員会		140×77

金沢城二ノ丸御殿絵図リスト　※金沢城全域図には＊を付した

№.	時期	題名	所蔵者等	請求番号等	寸法（cm）
1	前期	金沢城二之丸座舗之図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.18-28	166×120
2	前期	金沢城座敷之図二之丸	石川県立歴史博物館（大鋸コレクション）	大鋸コレクション⑥	83×65
3	前期＊	金沢城中惣絵図	石川県立歴史博物館	館蔵 2-18-2-1019	88×75
4	前期＊	金沢城図	横山隆昭氏	絵図 1	78×79
5	前期＊	金沢城図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	大 1125	35×42
6	前期	金府城二ノ丸	（公財）静嘉堂文庫	（池上家文書）1- 癸	86×66
7	前期	二ノ御丸絵図	金沢大学附属図書館		105×152
8	前期	二ノ丸御殿図	普森清美氏		140×82
9	前期＊	金沢城二之丸御殿絵図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-34	106×141
10	前期	金沢城御城中絵図（御家廻り）	石川県立図書館	K391-9-3	69×111
11	前期	金沢城図（写）二ノ御丸御家廻り并御広式	金沢市立玉川図書館（氏家文庫）	13.0-73- ②	81×112
12	前期	二之丸御殿図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	大 1096	72×84
13	前期	二之丸間取図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	大 1122	77×82
14	中期	宝暦年中二之御丸御殿地指図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	大 1095	115×203
15	中期	文化焼失以前二の丸之図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.18-29	136×257
16	中期	二之丸御殿并御広式御絵図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-35	96×181
17	中期	金沢表二之御丸御殿並御広式御絵図	村松家		179×90
18	後期 1	二の丸御殿絵図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.18-30	80×54
19	後期 1	文化六己巳御造営之御殿図	石川県立歴史博物館（篠原一宏家文書）	館蔵 2-2234-20	54×80
20	後期 1	金沢城二之丸御殿図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.18-31	100×52
21	後期 1	金沢城二之丸図	石川県立図書館	K391-69	74×129
22	後期 1	金谷御殿間取図（金沢城二ノ丸御殿間取図）	富山県立図書館	T092.75-3	74×125
23	後期 1	二の御丸惣絵図（三歩碁）	金沢大学附属図書館	5-40-160	75×144
24	後期 1	金沢城二之御丸御殿明細図	金沢市立玉川図書館（郷土資料）	K2-839	140×70
25	後期 1	金沢城二ノ丸絵図面	金沢市立玉川図書館（郷土資料）	090-776	87×137
26	後期 1	金沢城二の丸絵図	金沢大学附属図書館		150×77
27	後期 1	金沢城二ノ丸絵図	石川県立歴史博物館（村松コレクション）	村松コレクション A	66×144
28	後期 1	金沢城二之丸御住居殿閣図（二ノ丸全図）	金沢市立玉川図書館（氏家文庫）	13.0-84- ①	80×168
29	後期 1	金沢城二之丸御住居殿閣図（二ノ丸全図（三分割））	金沢市立玉川図書館（氏家文庫）	13.0-84- ②	165×80（3枚計）
30	後期 1	金沢城二之丸御殿之図	金沢市立玉川図書館（後藤文庫）	19.9-75	103×118
31	後期 1	金沢城二の丸絵図	石川県立歴史博物館	館蔵 2-18-2-947	75×130
32	後期 1	二ノ丸御殿図	照円寺		121×73
33	後期 1	二ノ丸御屋形図	前田土佐守家資料館	絵図 6	272×140
34	後期 1	金沢城二丸諸建物図	石川県立図書館（森田文庫）	K391-15	90×53
35	後期 1	金城営中図	西尾市岩瀬文庫	子 -351	54×94
36	後期 1	金沢城二ノ丸之図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.18-32	140×260
37	後期 1	二ノ丸御建物平面図	石川県立図書館（富田文庫）	1	78×132
38	後期 1	於表御舞台御規式御能被仰付候御補理御絵図	金沢市立玉川図書館（大友文庫）	大 1115	74×155
39	後期 1	加賀金沢城表御殿中之図	（公財）三井文庫	c825-48	40×27
40	後期 1	金府敷面之図	石川県立歴史博物館（村松コレクション）	村松コレクション 96	78×109
41	後期 1	金沢城二之丸御殿間取之図	金沢市立玉川図書館（清水文庫）	18.6-39	28×40
42	後期 1	二ノ丸表向座敷等之図	石川県立歴史博物館（大鋸コレクション）	大鋸コレクション⑤	56×48
43	後期 1	御広式向御二階之分絵図	金沢市立玉川図書館（加越能文庫）	16.18-42	80×100

協力者一覧（敬称略・順不同）

【公共機関・団体等】

石川県立図書館　石川県立歴史博物館　金沢市立玉川図書館　前田土佐守家資料館
金沢大学附属図書館　照円寺　富山県立図書館　西尾市岩瀬文庫
（公財）前田育徳会　（公財）静嘉堂文庫　（公財）三井文庫　松井建設株式会社

【個人】

横山隆昭　普森清美　大友佐俊　村松七九　山森　隆

表紙「金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図」（金沢市立玉川図書館　加越能文庫所蔵）

〔金沢城史料叢書29〕「金沢城二ノ丸御殿絵図集」

絵図にみる金沢城二ノ丸御殿

平成29年３月31日　発行

編集・発行　石川県金沢城調査研究所

〒920-0918
石川県金沢市尾山町10-５
電　話（076）223-9696　　FAX（076）223-9697
E-mail:kncastle@pref.ishikawa.lg.jp
http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html
印　刷　㈱ハクイ印刷

別刷絵図一覧

番号	名　称
1	金沢城二之丸座舗之図
10	金沢城御城中絵図（御家廻り）
15	文化焼失以前二の丸之図
20	金沢城二之丸御殿図
53	金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図
56	金沢城御城内外御建物絵図（表向）
57	金沢城御城内外御建物絵図（御居間廻）
58	金沢城御城内外御建物絵図（御広式）
59	金沢城御城内外御建物絵図（御台所廻）
77	金沢城廓内絵図面

1　金沢城二之丸座舗之図

金沢市立玉川図書館　加賀藩文庫（166×120㎝）

10　金沢城御城中絵図（御家側）

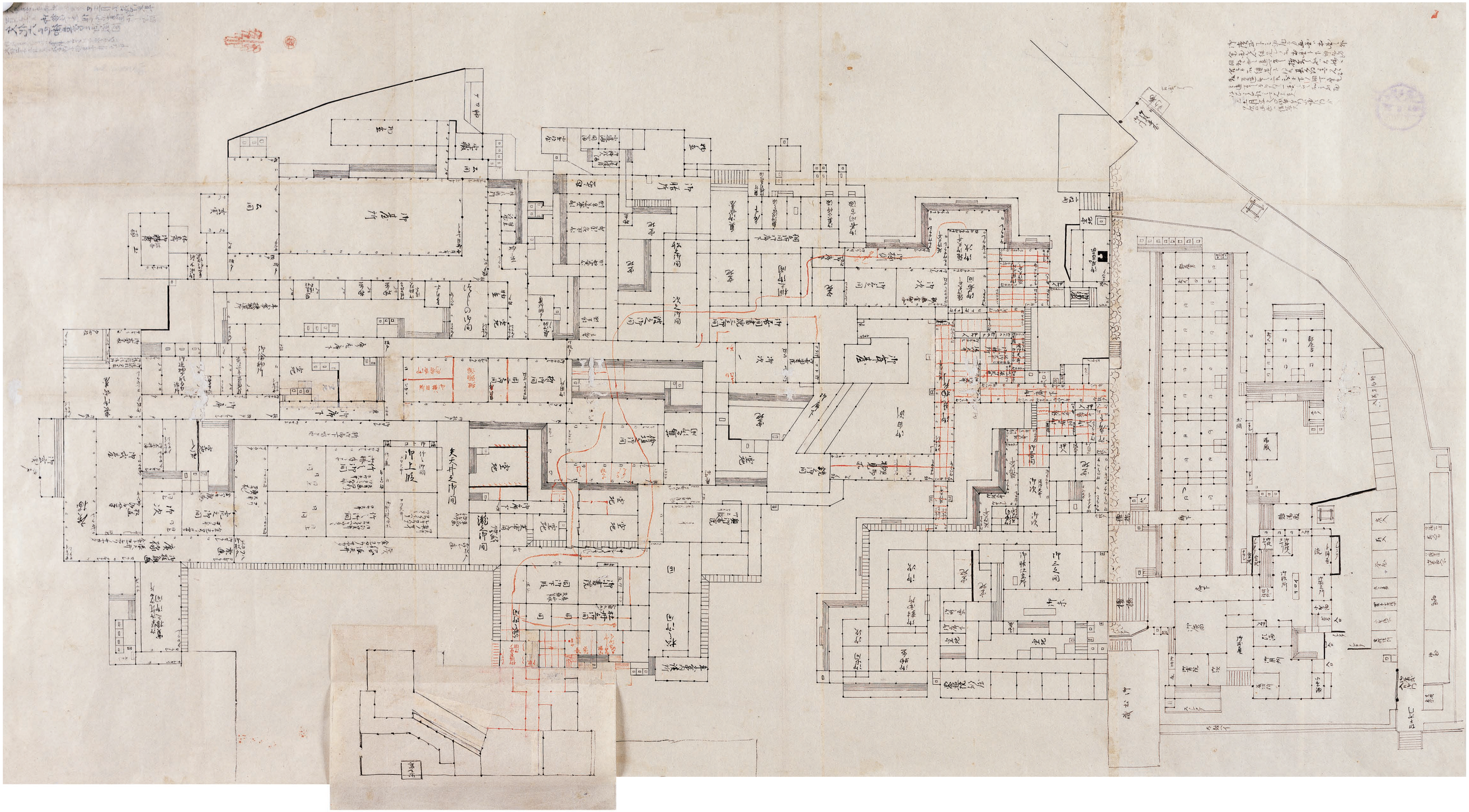
石川県立図書館（㊐×111㎝）

15 文化焼失以前二の丸之図

金沢市立玉川図書館蔵　加賀藩文庫（136×257㎝）

20 金沢城二之丸御殿図

金沢市立玉川図書館　加越能文庫（100×252㎝）



53 金沢城二ノ丸御殿御次内証細絵図

金沢市立玉川図書館　加越能文庫（176×243㎝）

56

金沢城御城内外御建物絵図（表向）

（公財）前田育徳会（82×143㎝）

金沢城御城内外御建物絵図（御居間廻）

（公財）前田育徳会（104×115㎝）

58

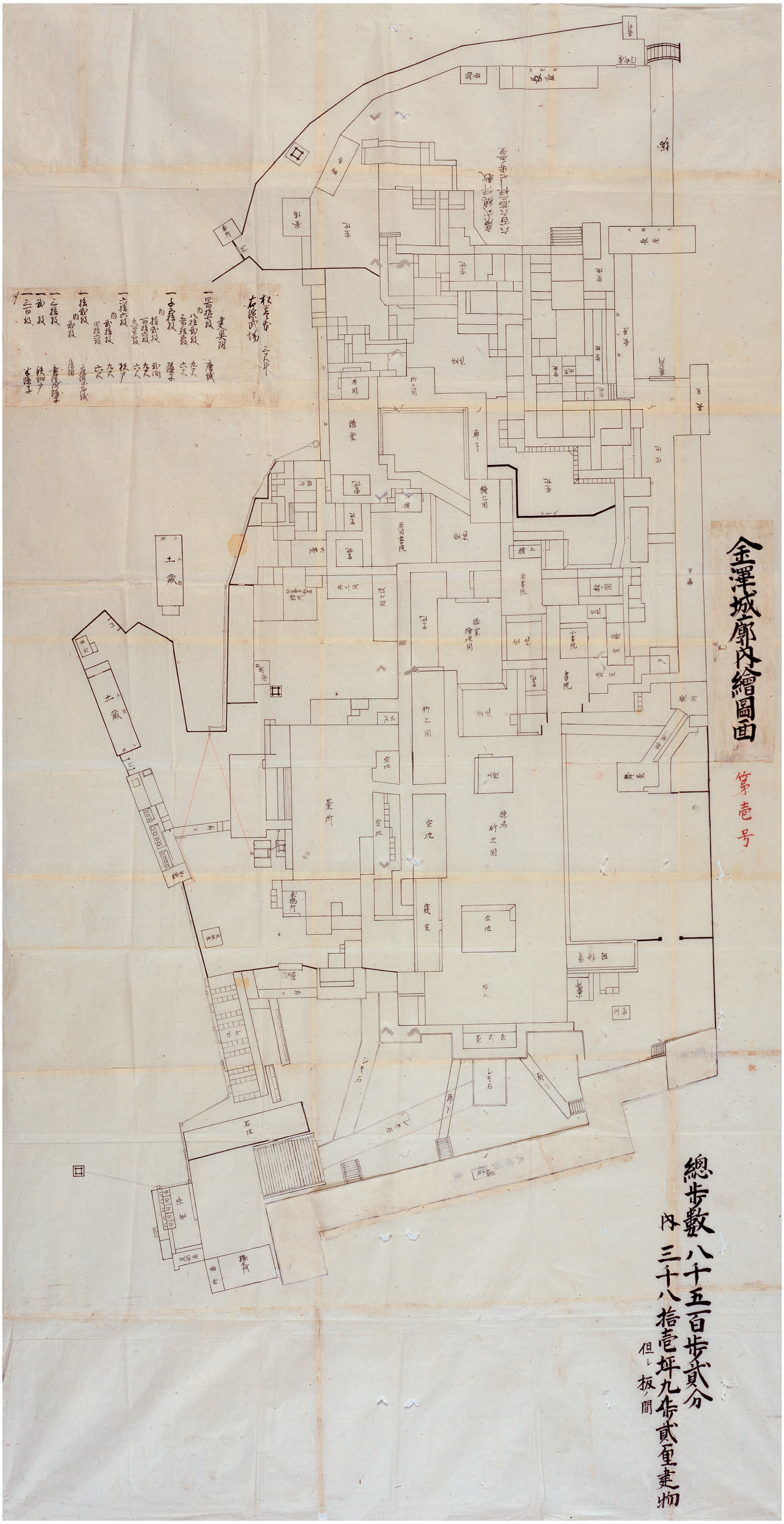
金沢城御城内外御建物絵図（御広式）

（公財）前田育徳会（96×125㎝）

59

金沢城御城内外御建物絵図（御台所廻）

（公財）前田育徳会（79×125㎝）

金沢城廓内絵図面

石川県教育委員会（140×77cm）